

道後城北遺跡群

文京4次・道後今市6次・8次

道後樋又2次・祝谷本村

1992

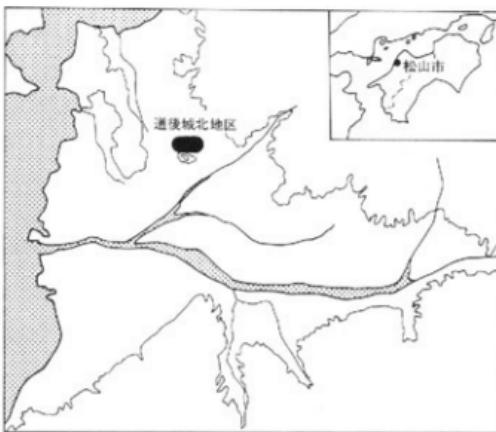
財松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

道後城北遺跡群

文京4次・道後今市6次・8次

道後樋又2次・祝谷本村



1992

(財)松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



卷頭圓版 松山東中學校構内土壙出土分銅形土製品

序

本書は、昭和58年～平成3年度にかけて道後域北地域で緊急調査いたしました5遺跡の発掘調査報告書であります。

道後域北遺跡群は、瀬戸内地域を代表する弥生遺跡として知られ、これまで、明治42年の道後今市遺跡から平形銅劍10数口の発見に始まり、著名な遺跡発掘が行われております。ことに近年の調査では、祝谷六丁場遺跡から平形銅劍の埋納状態での画期的発見、若草町遺跡からの弥生期集団墓と前漢鏡(長母忘君鏡)の発見、さらには、愛媛大学、松山大学、松山北高等学校、松山東中学校などそれぞれの継続的な構内遺跡調査やその周辺地域の調査によって、同遺跡群は、弥生期の有力集落で縄文後期からの生活域であったことやその他、弥生期の上器編年、弥生期～古墳期にかけての集落動態など、多くのことが分かり始めております。

今回の5遺跡の調査成果は、これら同遺跡群にかかる未調査地域や未解明部分が多くあるなか、それらの基礎的資料として、また充填される資料になるものと思われます。今後一層の調査研究が期待されるところであります。

本報告書が、多方面にわたって広くご活用していただけることを心から願っております。最後になりましたが、調査にあたって指導いただいた愛媛大学、下條信行教授、多大のご協力とご理解をいただきました事業者及び地権関係者のほか関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成4年8月31日

財團法人 松山市生涯学習振興財團
理 事 長 田 中 誠 一

例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センターが昭和58年～平成3年に松山市文京町2番2号、道後今市1053番地1、道後今市1065番地5、道後橋又1219番地8、祝谷5丁目745番地1他で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺物の実測・製図は、調査担当者の責任のもと、池田　学、水口あをいを中心に小坂ゆかり、丹生谷道代、白石聖子、瀬戸泰子、藤井宏枝、藤沢真美、森田晶子、山下満佐子、松山桂子、三木和代、兵頭千恵、好光明日香、大西陽子が行った。
3. 遺構は呼称を略号で記述する場合がある。竪穴式住居址：S B、溝：S D、土塙：S K、自然流路：S R、柵列：S A、柱穴：S P、攝立柱建物址：攝立、性格不明：S Xである。
4. 造構図・遺物図等の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
5. 本書に使用した方位はすべて磁北である。
6. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。
7. 本書の執筆は、栗田茂敏、梅木謙一、宮内慎一、相原浩二が分担して行った。浄書は高橋　恒が行った。
8. 写真図版では、遺構写真は調査担当者が行い、遺物写真の撮影・図版作成は担当者の指示と協議のうえ大西朋子が行った。
9. 調査においては、愛媛大学法文学部下條信行先生、愛媛大学法文学部宮本一夫先生、愛媛大学教育学部平井幸弘先生に指導を賜った。記して感謝申し上げます。
10. 編集は、調査担当者が協議の上、梅木謙一、宮内慎一が行った。校正においては田城武志、水口あをいの援助と協力を得た。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	
1 調査に至る経過	(梅木謙一).....1
2 調査組織	(梅木謙一).....2
3 環境	(宮内慎一).....4
第Ⅱ章 文京遺跡4次調査	(柴田茂敏).....11
1 調査の経過	2 層位
3 調査の概要	4 構内採集弥生式土器について
5 小結	
第Ⅲ章 道後今市遺跡6次調査	(宮内慎一・梅木謙一).....35
1 調査の経過	2 層位
3 調査の概要	4 小結
第Ⅳ章 道後今市遺跡8次調査	(相原浩二).....49
1 調査の経過	2 層位
3 調査の概要	4 小結
第Ⅴ章 道後樋又遺跡2次調査	(宮内慎一).....57
1 調査の経過	2 層位
3 調査の概要	4 小結
第Ⅵ章 祝谷本村遺跡	(宮内慎一).....77
1 調査の経過	2 層位
3 調査の概要	4 小結
第Ⅶ章 調査の成果と課題	(梅木謙一).....93

挿図目次

第1図	松山平野の主要遺跡分布図(縮尺1/50,000)	5
第2図	道後城北地区の主要遺跡分布図(縮尺1/25,000)	7
文京遺跡4次調査		
第3図	文京遺跡における各調査の位置(縮尺1/300)	12
第4図	A-1区北壁土層図(縮尺1/60)	13
第5図	A区遺構配置図(縮尺1/400・1/200)	15
第6図	竪穴住居SB-1(縮尺1/40)	17
第7図	SB-1出土遺物(縮尺1/2・1/3)	18
第8図	竪穴住居SB-2(縮尺1/40)	19
第9図	SB-2出土遺物(1)(縮尺1/4)	21
第10図	SB-2出土遺物(2)(縮尺1/3)	22
第11図	SB-2出土遺物(3)(縮尺1/2)	23
第12図	竪穴住居SB-3(縮尺1/40)	24
第13図	SR-1堆積土層図(縮尺1/60)	25
第14図	SR-1出土須恵器(縮尺1/4)	
第15図	B区出土繩文式土器(縮尺1/3)	
第16図	土壤遺物出土状況(縮尺1/20)	26
第17図	土壤出土弥生式土器(1)(縮尺1/4)	27
第18図	土壤出土弥生式土器(2)(縮尺1/4)	28
第19図	土壤出土弥生式土器(3)(縮尺1/4)	29
第20図	土壤出土分銅形土製品(縮尺1/2)	30
道後今市遺跡6次調査		
第21図	周辺調査位置図(縮尺1/3,000)	36
第22図	調査地測量図(縮尺1/200)	37
第23図	調査地区割図(縮尺1/200)	38
第24図	東壁土層図(縮尺1/40)	39
第25図	遺構配置図(縮尺1/100)	
第26図	SB-1測量図(縮尺1/40)	40
第27図	SB-1出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	41
第28図	SB-1出土遺物実測図(2)(縮尺1/4)	42
第29図	包含層出土遺物実測図(1)(縮尺1/4)	43

第30図 包含層出土遺物実測図(2) (縮尺 1 / 3)	44
道後今市遺跡8次調査	
第31図 調査地位置図 (縮尺 1 / 2,500)	49
第32図 調査区位置図 (縮尺 1 / 500)	50
第33図 南壁上層図	51
第34図 造構・遺物図 (縮尺 1 / 80)	52
第35図 S R 1 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 8)	53
道後櫛又遺跡2次調査	
第36図 調査区位置図 (縮尺 1 / 5,000)	57
第37図 調査地測量図 (縮尺 1 / 400)	58
第38図 西壁上層図 (1 / 80)	60
第39図 北壁・南壁土層図 (縮尺 1 / 80)	61
第40図 調査地区剖図・第Ⅳ層上面コンタ図 (縮尺 1 / 200)	63
第41図 造構配置図 (縮尺 1 / 200)	64
第42図 S K 1 測量図 (縮尺 1 / 40)	65
第43図 S R 2 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3)	66
第44図 造構配置図 (縮尺 1 / 200)	67
第45図 S K 2・S K 3 測量図 (縮尺 1 / 40)	68
第46図 S K 4 測量図 (縮尺 1 / 40)	69
第47図 出土遺物実測図(1) (縮尺 1 / 4)	70
第48図 出土遺物実測図(2) (縮尺 1 / 4)	71
祝谷本村遺跡	
第49図 調査地位置図 (縮尺 1 / 5,000)	77
第50図 調査地測量図 (縮尺 1 / 600)	78
第51図 基本層位図 (縮尺 1 / 40)	79
第52図 A区西壁土層図 (縮尺 1 / 40)	80
第53図 調査地区剖図 (縮尺 1 / 150)	81
第54図 造構配置図 (縮尺 1 / 80)	82
第55図 1号掘立柱建物測量図 (縮尺 1 / 60)	83
第56図 2号掘立柱建物測量図 (縮尺 1 / 60)	84
第57図 S K 2・S K 3 測量図、S K 2 出土遺物実測図 (縮尺 1 / 30・1 / 4)	85
第58図 S K 1 測量図 (縮尺 1 / 30)	86
第59図 第III層出土遺物実測図 (縮尺 1 / 3・1 / 4)	87
第60図 第IV層出土遺物実測図 (縮尺 1 / 4・1 / 3)	88

写真図版目次

卷頭図版 松山東中学校構内土塹出土分鏡形土製品

文京遺跡4次調査

図版1. 1 B区調査前全景（東北より）

2 B区トレチ掘削状況

図版2. 1 A-1区 調査前全景（南西より）

2 A-1区 調査状況

図版3. 1 竪穴住居SB-1（南より）

2 SB-1（東北より）

図版4. 1 A-1区 東半部調査状況（南西より）

2 竪穴住居SB-2（北より）

図版5. 1 SB-2（東北より）

2 竪穴住居SB-3（東より）

図版6. 1 運動場東端検出土塙

2 上塙内遺物出土状況

図版7. 1 SB-1・SB-2出土遺物（1~6：SB-1, 30~33：SB-2）

図版8. 1 SB-2出土遺物①

図版9. 1 SB-2出土遺物②

図版10. 1 B区出土縄文式土器

図版11. 1 土塙出土遺物①

図版12. 1 土塙出土遺物②

道後今市遺跡6次調査

図版13. 1 遺構検出状況①（南より）

2 遺構検出状況②（南西より）

図版14. 1 遺構検出状況③（南より）

2 SB-1検出状況（西より）

図版15. 1 SB-1炉検出状況①（西より）

2 SB-1炉検出状況②（北西より）

図版16. 1 SB-1出土遺物①

図版17. 1 SB-1出土遺物②

2 包含層出土遺物

道後今市遺跡8次調査

- 図版18. 1 南西隅上層（北東より）
2 遺物出土状況（南より）

- 図版19. 1 S R 1 出土遺物

道後櫛又遺跡2次調査

- 図版20. 1 調査前全景（東より）
2 造構検出状況（南より）

- 図版21. 1 南壁上層（北より）
2 西壁上層（東より）

- 図版22. 1 灰色砂疊検出状況（北西より）
2 S K 4（南より）

- 図版23. 1 S D 4（南より）
2 遺物出土状況（東より）

- 図版24. 1 S R 2 出土遺物〔上〕：外面、〔下〕：内面

- 図版25. 1 S R 4 出土遺物（4～7） S K 2 出土遺物（8）〔上〕：外面、〔下〕：内面

- 図版26. 1 S D 4 出土遺物（9～11） S R 5 出土遺物（12）
第Ⅷ層出土遺物（13・14）〔上〕：外面、〔下〕：内面

祝谷本村遺跡

- 図版27. 1 調査区全景（北より）
2 A区 造構検出状況（北西より）

- 図版28. 1 南壁土層（北より）
2 S K 1（北より）

- 図版29. 1 S K 2・S K 3（北より）
2 遺物出土状況（南より）

- 図版30. 1 S K 2 出土遺物（1）、第Ⅲ層出土遺物（3・5・6・7・9）
〔上〕：外面、〔下〕：内面

- 図版31. 1 第Ⅳ層出土遺物①〔上〕：外面、〔下〕：内面

- 図版32. 1 第Ⅳ層出土遺物②

表 目 次

表1. 調査地一覧.....	1
道後今市遺跡6次調査	
表2. 出上遺物觀察表（土製品）.....	45
表3. 出土遺物觀察表（石製品）.....	46
道後樋又遺跡2次調査	
表4. 上塙一覧.....	73
表5. 溝一覧	
表6. 自然流路一覧	
表7. 出上遺物觀察表（土製品）.....	74
祝谷本村遺跡	
表8. 掘立柱建物址一覧.....	90
表9. 土塙一覧	
表10. 溝一覧	
表11. 包含層出土遺物觀察表（土製品）.....	91
表12. 包含層出土遺物觀察表（石製品）.....	92

第Ⅰ章 はじめに

1 調査に至る経過

昭和57年～平成2年に、松山市文京町、道後今市町、道後樋又町、祝谷町内の5ヶ所において埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

確認願いが申請された文京町2番2号、道後樋又1219-8は松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「67 樋又遺物包含地（文京遺跡）」内に、道後今市1053-1、同1065-5は「68 今市遺物包含地」内に、祝谷5丁目745-1、753-2は「55 北代遺物包含地」内に当たり、周知の遺跡として知られている。

各包含地内で、これまで縄文時代～近世までの集落関連遺構が確認され、特に弥生時代では松山平野の重要な集落地帯であったことが、これまでの調査・研究で明かとなっている（道後城北遺跡群）（松山大学他）。

文化教育課では、確認願いが申請された5地点について埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために、昭和57年～平成2年に順次確認調査を実施した。

確認調査（試掘）の結果を受け、文化教育課と申請者は発掘調査について協議を行った。発掘調査は、道後城北遺跡群の集落構造解明を目的とし、文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、申請者各位の協力のもと昭和57年～平成2年の間に確認調査及び本格調査を実施した。

以下、各調査の遺跡名、所在等を略記する。

●表1 調査地一覧

遺跡名	所在地	面積(㎡)	期間
文京遺跡4次	文京町2番2号	750	昭和57年8月3日～8月20日
道後今市6次	道後今市1053-1	238	平成元年7月31日～9月16日
〃8次	道後今市1065-5	379	平成2年9月3日～10月6日
道後樋又2次	道後樋又1219-8	601	平成3年1月16日～3月31日
祝谷本村	祝谷5丁目745-1, 753-2	578	平成2年7月6日～10月12日

なお、昭和62年4月～平成3年9月30日の間は、松山市教育委員会文化教育課が主体となり野外調査及び室内調査を行い、平成3年10月1日以降は財團法人松山市生涯学習振興財团埋蔵文化財センターが調査主体となり室内調査及び報告書刊行事業を実施した。

【参考文献】

- 愛媛大学・松山市教育委員会 1976 「文京遺跡」
愛媛大学埋蔵文化財調査室 1989 「文京遺跡第8・9・11次調査」
愛媛大学埋蔵文化財調査室 1990 「文京遺跡第10次調査」
松山大学・松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991 「松山大学構内遺跡－2次調査」

2 調査組織

【昭和57年度調査組織】

調査主体／松山市教育委員会 教育長 西原多喜男
教育次長 森田富士弥
教育次長 二神 寛
調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課長 藤原渉
課長補佐 坪内晃幸
第二係長 大西輝昭
主任 西尾幸則

【平成元年度調査組織】

(平成元年4月1日～平成元年10月30日)

調査主体／松山市教育委員会 教育長 平井 龜雄
参事 井手 治己
教育次長 古本 克
教育次長 井上 量公
調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課長 渡部 忠平
第二係長 西 伸二
調査係長 西尾 幸則
主事 重松 佳久
主事 栗田 正芳

(平成元年10月31日～平成2年3月31日)

調査主体／松山市教育委員会 教育長 平井 龜雄
参事 井手 治己
教育次長 古本 克
教育次長 井上 量公
調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課長 渡部 忠平
松山市立埋蔵文化財センター 所長 森脇 将
調査係長 西尾 幸則
調査主任 田城 武志
調査主事 栗田 正芳

調査組織

【平成2年度調査組織】

調査主体／松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷
参事 古本 克
教育次長 井上 量公
教育次長 一色 正士
調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課長 渡部 忠平
松山市立埋蔵文化財センター 所長 森脇 将
調査係長 西尾 幸則
調査主任 田城 武志
調査主事 栗田 正芳

【平成3年度調査組織】

(平成3年4月1日～同年9月30日)

調査主体／松山市教育委員会 教育長 池田 尚郷
参事 古本 克（～5月19日）
参事 池田 秀雄（5月20日～）
教育次長 西森 寛彦
教育次長 一色 正士（～5月19日）
教育次長 渡部 泰輔（5月20日～）
教育次長 日野 正寛（5月20日～）
調査総括／松山市教育委員会 文化教育課 課長 渡部 忠平（～5月19日）
課長 岩本 一夫（5月20日～）
松山市立埋蔵文化財センター 所長 和田祐三郎
次長 田所 延行
調査係長 西尾 幸則
調査主任 田城 武志
調査主事 栗田 正芳

【平成4年度刊行組織】

刊行主体／財團法人松山市生涯学習振興財團 理事長 山中 誠一
事務局長 渡辺 和彦
事務次長 鶴井 茂忠
埋蔵文化財センター 所長 和田祐三郎
次長 田所 延行
調査係長 西尾 幸則
調査主任 田城 武志
調査主事 栗田 正芳（文化教育課職員）

3 環境

(1) 遺跡の立地

松山平野は、伊予灘と燧灘とを二分するように北に突き出た高縄半島のつけね部分にある。高縄半島中央部には、半島の最高峰、東三方ヶ森をはじめとして、伊之子山、北三方ヶ森、高縄山からなる高縄山地が形成されている。この高縄山に源を発した河川が伊予灘に流れ出て形成した沖積平野が松山平野である。

道後城北地区は、この松山平野の中でも、高縄山地の南端部の御幸寺山と、その南の分離独立丘陵である勝山（城山）とに挟まれた丘陵・平野部にあたる。同地区は、文京遺跡（愛媛大学）のほか、西は若草町遠路（1）（現 松山市総合福祉センター）から東は県民文化会館を含む道後今市遺跡〔岡田敏彦 1985〕に至り、さらに東へ広がる可能性も存在する地域である。

(2) 歴史的環境

道後城北地区は、文京遺跡をはじめとして、縄文時代から中世に至るまでの数多くの遺跡が立地している。それらのうち、近年発掘された遺跡を中心に、時代別に述べていくこととする。

旧石器時代

松山平野においては、これまでに明確な旧石器時代の遺構は検出されていない。縄文時代や弥生時代の遺跡の調査中に偶然、旧石器時代の石器がみつかり、この時代の遺跡として確認できたものである。松山市祝谷にある丸山遺跡（2）〔長井數秋 1986〕では、表面採集資料として細石刃や細石核を含む石器類の出土が報告されている。ただし、遺構に伴わないので、不明な点が多い。

縄文時代

古くから知られる遺跡に、縄文後期の道後冠山遺跡（3）、土居津遺跡（4）、土居ノ段遺跡（5）などがある。最近では、道後城北 R N B（南海放送）遺跡（6）〔西尾幸則 1989〕から、縄文後期と晩期後葉の包含層が層位的に検出されている他、文京遺跡 8 次（7）、9 次調査（8）では、縄文後期から晩期前葉の包含層が確認されている。また、同11次調査（9）においては、野外炉 3 基が検出され、道後城北地区では、はじめて縄文後期の遺構の存在が明らかになった〔宮本一夫 1990〕。

弥生時代

弥生前期では、前半の遺跡として木葉文土器が出土した持田遺跡（10）や、道後冠山遺跡、阿方式土器を出土した道後姫塚遺跡（11）〔坂本安光 1979〕などがある。後半になると、扇状地から丘陵地への遺跡の広がりが認められ、前期末から中期末にかけては、その分布が道後

環 境



- 1 文京遺跡 4 次調査 2 道後今市 6 次調査 3 道後今市 8 次調査 4 道後嵇又遺跡 2 次調査
5 祝谷本村遺跡 ④ 文京遺跡 ⑧ 祝谷六丁場遺跡 ⑩ 道後湯月遺跡
① 椿味立添遺跡 ⑤ 三島神社古墳 ⑨ 福音寺遺跡 ⑪ 来住庵寺遺跡

第1図 松山平野の主要遺跡分布図

(S = 1 : 50,000)

城北地区全域に広がってくる。

中期において、丘陵地では、アイリ式土器で知られるアイリ遺跡⁽¹⁾や、東雲神社遺跡⁽²⁾などがある。前述の上居渾遺跡からは、弥生前期末から中期の遺物のほか、櫛状木器や、当時の農耕状況を察知させる木歯の出土がある。中期中葉では、祝谷六丁場遺跡⁽³⁾〔宮崎泰好 1991〕から、中期中葉段階の遺物が包含層より大量に出土している。後葉では、文京遺跡3次調査⁽⁴⁾にて方形周溝状遺構を、また、道後今市遺跡2次調査⁽⁵⁾では、四線文土器が集中して出土した土塙（SK1）を検出している。

後期では、丘陵部の祝谷アイリ遺跡⁽⁶⁾〔梅木謙一 1992〕の上塙（SK15）より、後期前半の遺物がまとまって出土しているほか、祝谷六丁目遺跡⁽⁷⁾では壺棺墓群が検出されている。扇状地においては、松山大学構内遺跡2次調査⁽⁸⁾〔梅木謙一 1991〕のSB7号住居址より、後期後半の遺物が集中して出土しており、松山北高等学校遺跡⁽⁹⁾やカキツバタ遺跡⁽¹⁰⁾、若草町遺跡〔宮崎泰好 1991〕などから、後期の遺構・遺物が多数検出されている。

道後城北地区における特徴的な資料として、分銅形土製品があげられる。愛媛県内39点中24点までが、同地区から出土している。その内訳は、祝谷六丁場遺跡12点、文京遺跡3次調査6点のほか、祝谷大地ヶ田遺跡⁽¹¹⁾、御幸寺山東麓遺跡⁽¹²⁾、文京遺跡1次調査⁽¹³⁾、同4次・10次調査、道後鶯谷遺跡⁽¹⁴⁾から各1木ずつの出土である〔谷若倫郎 1989〕。特に御幸寺山東麓遺跡出土の分銅形土製品は、その典型的な完形品として、広く学界にも知られている。

そのほか、弥生時代の遺物として注目されるものに平形銅劍がある。松山平野においては22口の出土があり、その内訳は、道後一万遺跡⁽¹⁵⁾10口、道後樋又遺跡⁽¹⁶⁾8口、道後公園山麓遺跡⁽¹⁷⁾3口、祝谷六丁場遺跡1口である。なかでも、祝谷六丁場遺跡では、平形銅劍が理納状態で発見されている。道後城北地区は、愛媛県内でも平形銅劍の出土の多い地域であり、なおかつ限られた範囲で密集して出土している点では、全国的にもあまり例をみない。また、青銅製の鏡の出土が道後城北地区において2例ある。1つは、文京遺跡10次調査出土の舶載鏡片、もう1つは若草町遺跡出土の完形の重巻日光鏡である。後者については、「見日之光長母忘君」の銘文が刻まれており、わが国でははじめての出土となる。これら2例を考えあわせると、道後城北地区一帯が、当時の松山平野の盟主的な集団をなしていたものとも考えられる。

古墳時代

古墳は、松山平野北部の丘陵部に数多く立地している。西から、祝谷古墳群、御幸寺山古墳群、常信寺古墳群、桜谷古墳群、石手・伊佐爾波古墳群などがある。集落関連遺構としては、松山北高等学校遺跡2次調査の6号竪穴式住居址より、庄内併行期の上師器類が多数出土している。また、道後今市遺跡4次調査⁽¹⁸⁾では、5世紀中頃から6世紀にかけての竪穴式住居が検出され、前述の松山大学構内遺跡2次調査では、カマドを付設する住居址2棟を含む12棟の竪穴式住居址が確認されている。他に、若草町遺跡においては、数棟の竪穴式住

環 境



- A 文京4次 B 道後今市6次 C 道後今市8次 D 道後桶又2次 E 祝谷本村 I 若草町
- 2 丸山 3 道後冠山 4 土居塗 5 土居ノ段 6 道後城北RNB 7 文京8次 8 文京9次
- 9 文京II次 10 持田 11 道後鄭塚 12 アイリ 13 東雲神社 14 祝谷六丁場 15 文京3次
- 16 道後今市2次 17 祝谷アイリ 18 祝谷六丁目 19 松山大学構内2次 20 松山北高校
- 21 カキツバタ 22 祝谷大地ヶ田 23 御幸寺山東麓 24 文京1次 25 道後鷺谷 26 道後一万
- 27 道後桶又 28 道後公園山麓 29 道後今市4次 30 湯ノ町廻寺 31 内代麻寺 32 伊佐西波神社
- 33 湯神社・出雲同神社 34 湯榮城

第2図 道後城北地区の主要遺跡分布図

(S = I : 25,000)

店址や周溝状遺構のほか、包含層中より多量の遺物の出土がみられる。

古代

松山平野においては、9箇所の古代寺院が発見されている。そのうち、道後城北地区では湯之町廃寺⁽³⁰⁾と内代廃寺⁽³¹⁾がある〔吉本弘、1986〕。また、延喜式内社は8社あり、伊佐爾波神社⁽³²⁾、湯神社・出雲岡神社⁽³³⁾が道後地区に集中している。このように多くの神社仏閣が集中する道後地区は、古代の松山平野において大和朝廷の重要な拠点のひとつであり、「伊予國風土記」にも、皇族達の道後温泉行幸が記されている。

中世

中世には、建武年間（14世紀）に河野通盛によって湯築城⁽³⁴⁾が築かれ、以後250年にわたり、河野本宗代々の拠城として領国を支配した。その後、天正13年に小早川隆景が入城、統いて天正15年に福島正則が居城としたが、後に福島正則は府中城へ移り、湯築城は廃城となつた。

【参考文献】

- 岡田 敏彦 1985 「道後市遺跡」愛媛県教育委員会・附愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 長井 敦秋 1986 「丸山遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』
- 西尾 幸則 1989 「道後城北（R N B）遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』
- 宮本 一夫 1990 「文京遺跡第8・9・11次調査」『文京遺跡10次調査』
愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 阪本 安光 1979 「道後姫塚遺跡」 愛媛県教育委員会
- 宮崎 泰好 1991 「祝谷六丁場遺跡」『松山市文化財調査報告書24』
- 梅木 謙・ 1992 「祝谷アリ遺跡」『松山市文化財調査報告書25』
1991 「松山大学構内遺跡」『松山市文化財調査報告書20』
- 谷若 倫郎 1989 「分銅形土製品にみる地域相」『花園史学10号』
- 吉田 弘 1986 「湯之町廃寺」「内代廃寺」『愛媛県史 資料編 考古』
- 松 山 市 1986 「松山市 史料集 第2巻 考古編II」
- 古代学協会四国支部 1988 「松山道後城北の弥生遺跡をめぐって」（シンポジウム資料）

第 II 章

ブン
キョウ
文京遺跡

— 4次調査 —

第II章 文京遺跡4次調査

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1982(昭和57)年、松山市教育委員会は、松山市文京町2番2号所在の松山市立御幸中学校(現・松山市立東中学校)の木造校舎、および屋内運動場老朽化に伴い、1983(昭和58)年3月竣工を日程に両施設の交替を計画した。同校地は、松山市の指定する遺物包含地のうち67番、櫛又遺物包含地に含まれる周知の包蔵地にある。西側に隣接する愛媛大学城北地区構内では昭和50年から57年の間、大学教棟新営に伴う発掘調査が松山市教育委員会により文京遺跡第1次～第3次調査として行われ、弥生時代中・後期、とりわけ中期後半の松山平野にあっては、盟主的存在ともいべき集落が大学構内を中心に展開していることが確認されている。これら既往の調査や、遺物の採集事例から判断して、同校地内にもこの集落の一角を構成する遺構群が存在することが充分に予測された。

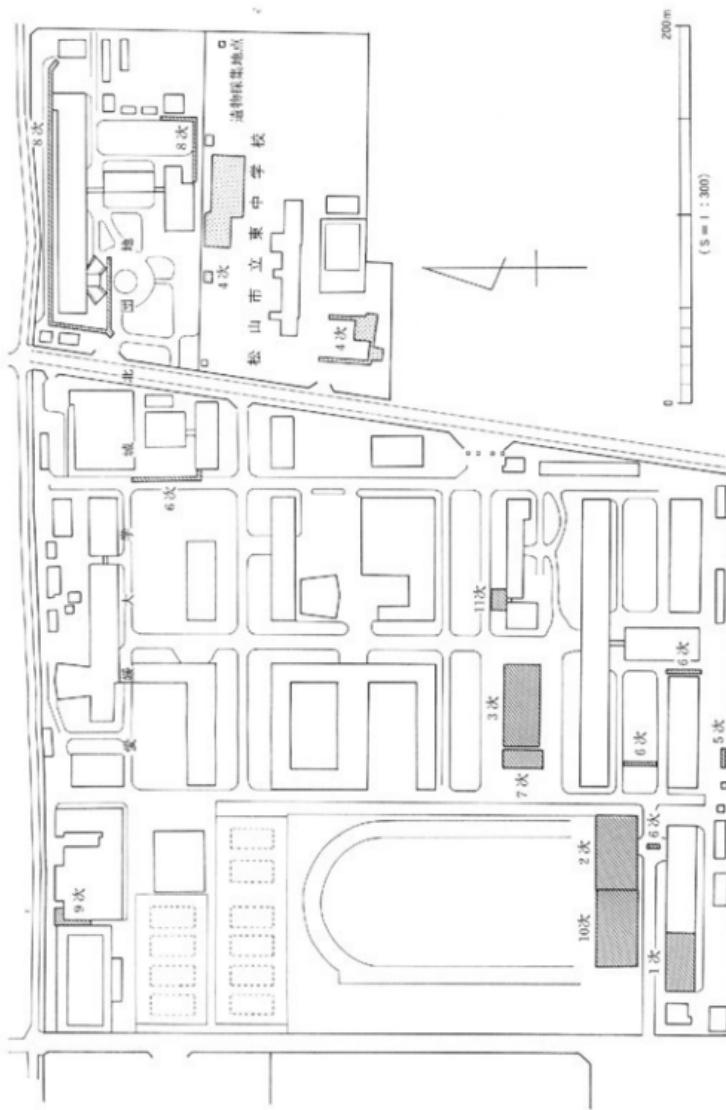
屋内運動場は同校地南西部分の、また新校舎は北部分の既存建物跡地に計画され、同教育委員会文化教育課は、この計画に基づく確認調査を1982(昭和57)年7月21日から8月2日まで行った。確認調査の結果、B区とした屋内運動場用地は、そのほとんどの部分を既存建物により擾乱されており、重機によるトレンチ掘削中に縄文中期上器片2点を含む細片遺物数点の出土をみたにとどまり、本格調査を要するに至らなかった。

新校舎建設用地A区にも、既存建物による擾乱はかなりの部分にまで及んでいたが、部分的に遺物包含層や住居址とみられる遺構が確認されたため、この区域を本格調査対象として、引き続き同年8月3日から8月26日の間、記録保存を目的とした緊急発掘調査を行った。調査対象は面積は750m²である。

(2) 調査組織

調査地	松山市文京町2番2号
遺跡名	文京遺跡第4次調査地
調査期間	1982(昭和57)年8月3日～同年8月26日
調査面積	750m ²
調査主体	松山市教育委員会
教育長	西原多喜男
教育次長	森田富士弥
教育次長	二神貢
文化教育課課長	藤原涉

文京遺跡 4次調査



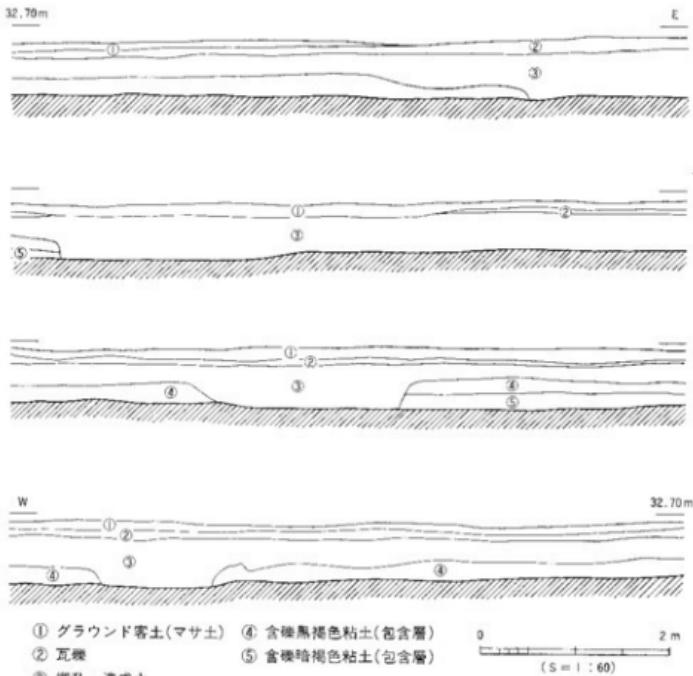
第3図 文京遺跡における各調査の位置

層 位

文化教育課課長補佐	坪内 兄幸
" 第二係長	大西 麟昭
調査担当	西尾 幸則
" 主 任	池田 学
" 調 査 員	松村 淳
"	栗田 茂敏

2 層 位

前項で記したように、調査地は既存建物跡地であり、この建物に伴う擾乱が造構面にまで達する部分が少なからずある。また、この建物以前にも削平、造成が繰り返されている。これらの造成土直下に遺物を包含する含礫黒褐色シルトが、遺存の良好な部分で15cm程度部分的に残存している。造構は、この含礫黒褐色シルト下層の黄褐色シルトを基盤面として検出された。



第4図 A-I区北壁土層図

3 調査の概要（遺構と遺物）

遺構の検出をみたのは A 区のみであり、したがって A 区の遺構を中心に記述する。

A 区において、新営建物予定地を縱断するかたちで東西方向に試掘溝を掘削した結果、大きく擾乱を受けている部分をはさんだ 2 箇所において部分的に遺物包含層、遺構が認められた。したがって、この擾乱部分を排土置き場として掘削は行わず、東側の A - 1 区、西側の A - 2 区の 2 区にわけて調査を行った。

検出された遺構は、両区あわせて円形竪穴住居址 3 基、柱穴 11 基、旧河川 1 条である。

(1) 竪穴住居

SB-1 (第 6 図、図版 3)

A - 1 区北西隅部で検出された円形竪穴住居址である。その北半部は調査区外におよび、したがって調査されたのは南約 1/2 である。深さ 2 ~ 5 cm の浅い溝状遺構 S D - 1 を切っている。直径 5.5 m、壁高は最も遺存の良い部分で 8 cm を測り、周壁溝は持たない。床面中央部に炉址と考えられる不整円形、断面描り鉢状の窪みを持ち、この窪みをとりまくように検出された、深さ 30 cm 前後の 3 基の柱穴、P - 1 ~ 3 が主柱穴と考えられ、復元すれば 5 本の主柱穴構造をとるものと思われる。

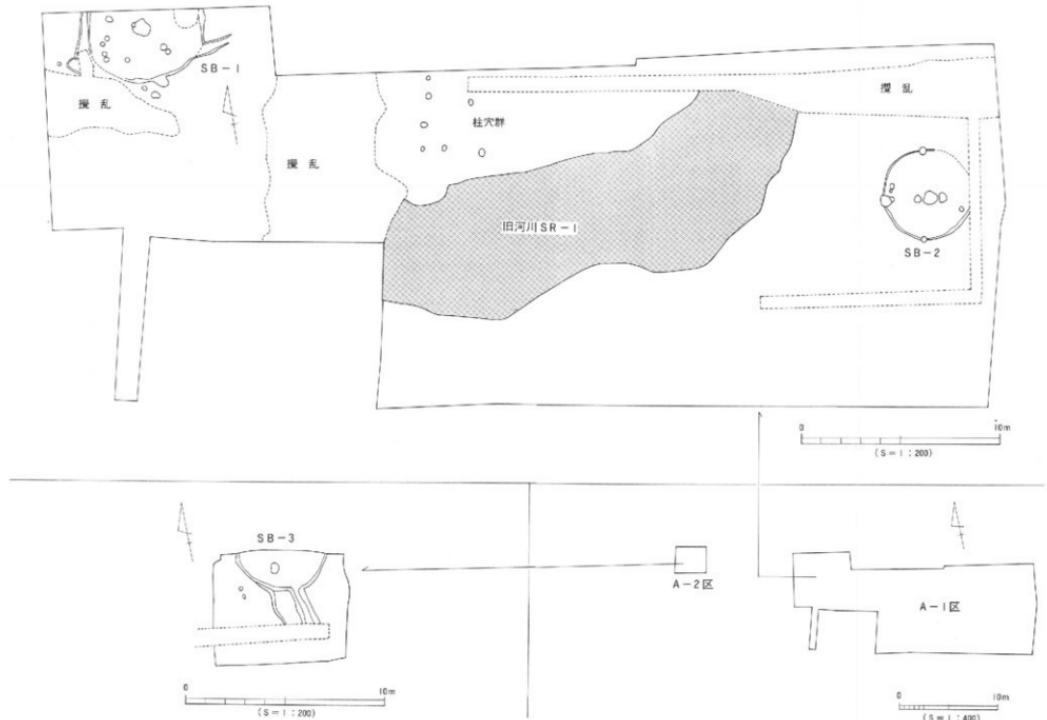
遺物の出土は僅かであるが、弥生時代前期前半の土器片がみられ、後述の SB - 2 とともに該期の住居址であると考えられる。

SB-1 出土遺物 (第 7 図、図版 7)

甕 (1) 口端部に接して断面三角形の比較的幅の広い隆帯を貼付け、その下半部を「D」字状に刻んでいる。口端面は平坦に面取りされている。

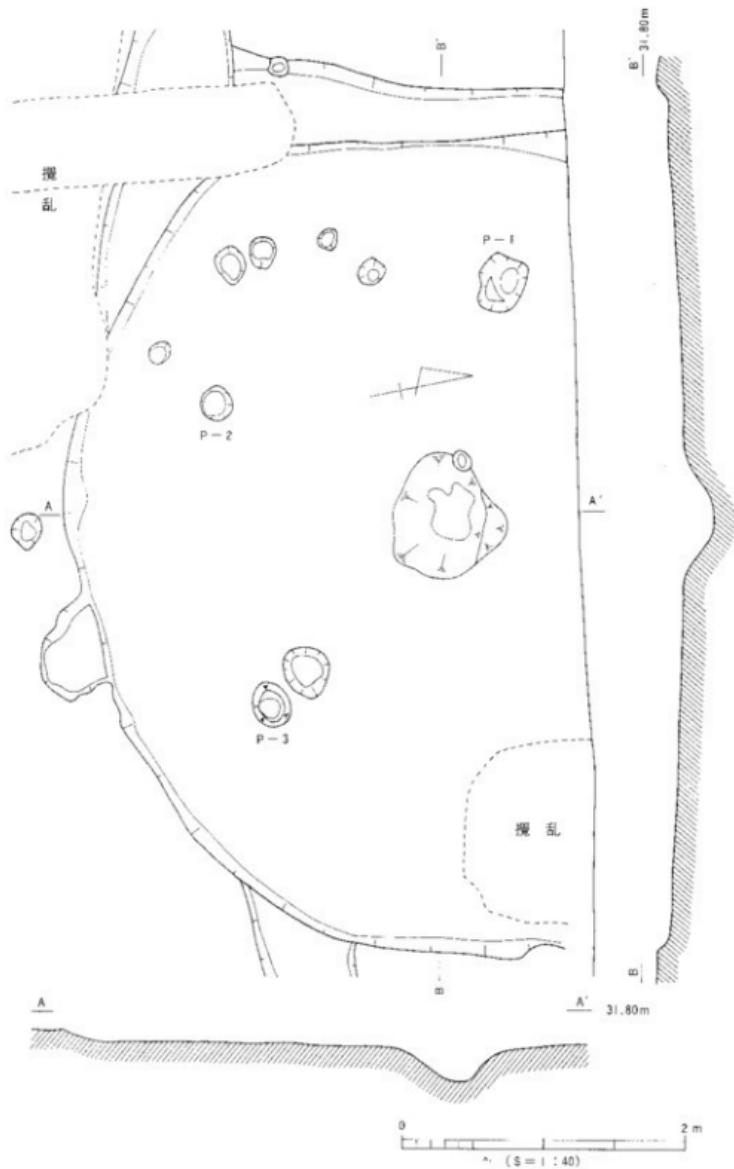
壺 (2 ~ 4) 囲化可能な口頭部、肩部の小片が 3 点出土している。口縁部 2 は口端面を 1 条の沈線で上下に区画し、区画された上下の凸部に刻み目を施している。3 の肩部には沈線状の段が認められる。外面は横方向にヘラ磨きされ、内面は撫でられ指頭圧痕が観察される。4 は壺の頸部片と思われ、上端部にみられる突起は口縁部と頸部を曲する段になるものと考えられる。この段の直下とそのやや下位に 2 条の浅い沈線が施されている。外面はヘラ磨き、段に対応する部分の内面には指頭圧痕がみられる。

剥片石器 (5・6) サヌカイトの剥片を用いた石器が 2 点出土している。5 は不定形な剥片の一側縁のみに簡単な調整を施し削器として用いたものと思われる。6 は石鎌の木製品と思われ、平行四辺形状の剥片の隣接する二側縁に調整を施し、尖端部を作り出している。

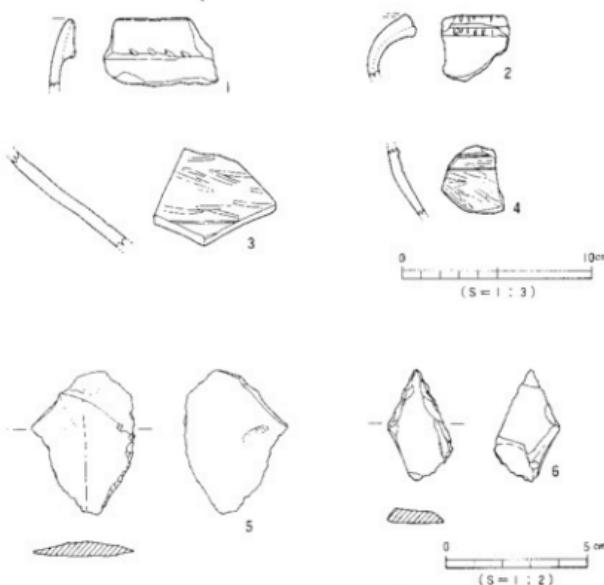


第5図 A区造構配置図

調査の概要



第6図 竪穴住居 SB-1



第7図 SB-1 出土遺物

SB-2 (第8図、図版4・5)

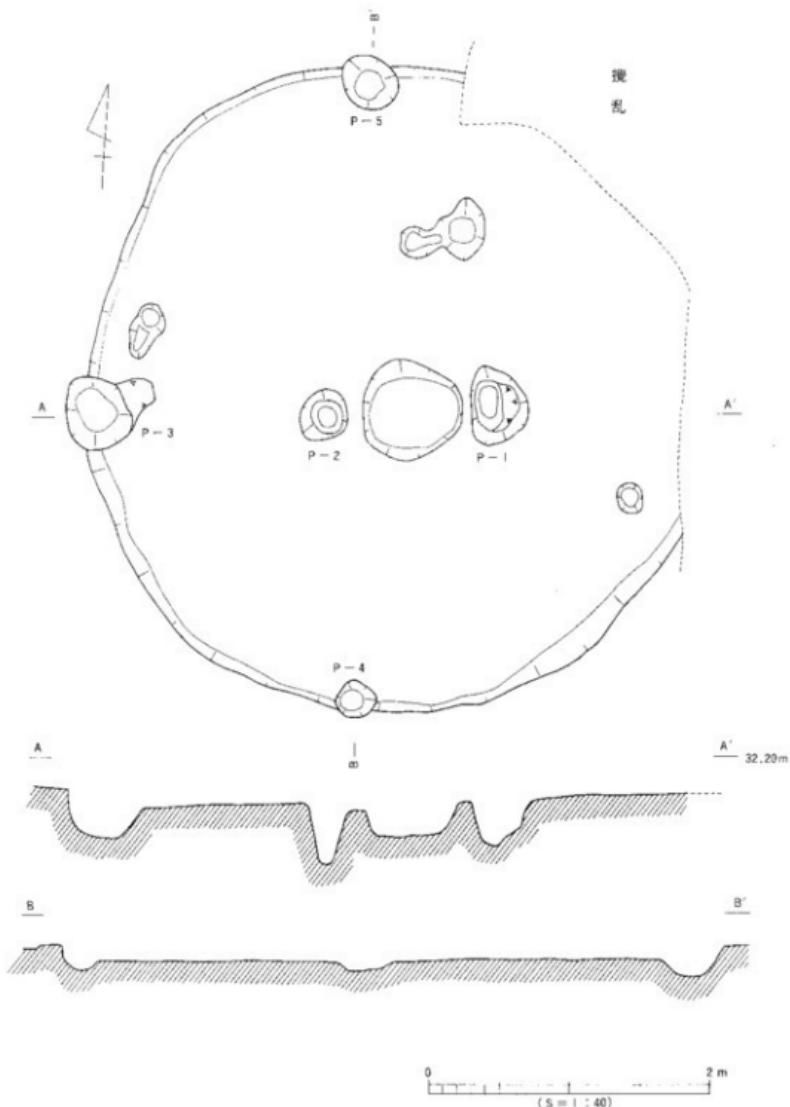
A-1区東端付近で検出された円形堅穴住居址で、北東部から東端部を擾乱により失っている。直径4.5m、残存壁高10cmを測り、周壁溝は持たない。床面中央部に径70cm、深さ15cmの円形に近い土壙を持ち、この土壙をはさんだ直近の対角に深さ30~40cmの柱穴30~40cmの柱穴P-1、P-2が掘られている。さらに、P-1・2、土壙を結んだ延長線上の周壁立ち上がり部分にも柱穴P-3を持つが、擾乱により失われた対角部分にも柱穴が存在していたものと思われる。また、これらの柱穴ラインを3時・9時方向とすると、直交する0時・6時方向の立ち上がり部分にも2基の柱穴P-4、P-5が掘られており、極めて均整のとれた柱穴配置となっている。中央土壙と、その両側に柱穴を持つといったプランは、いわゆる松菊里型住居に近似したありかたである。

床面全体より遺物を出土しているが、特に中央土壙部分に多く集中して検出されている。弥生時代前期前半の遺構である。

SB-2出土遺物 (第9~11図、図版7~9)

甕 (7~10・20~26) 口頭部の小破片を含めて図化可能な13点の出土がみられている。口端部まで確認できる個体でみてみると、その口縁部はいずれも緩く外反し、端部を刻むも

調査の概要



第8図 積穴住居 SB-2

のと刻まないものとがある。口端部、頸部ともに無文のもの7・23・25、口端部刻み目、頸部無文の9、口端部に刻み目を持ち、頸部に1~2条のヘラ描沈線を施されるもの8・10・20がある。その多くは器表面の損傷により調整の観察が難しいが、比較的状態の良い8・10では刷毛目は用いられておらず、内外面ともに撫でによっているようである。ヘラ描沈線を2~3条持つ頸部小片のうち26は沈線間に棒状工具による刺穴を施している。

壺 (11~16・27~29) 壺では口縁部外面に粘土帯を貼付けて口縁部と頸部の間を区画する段を持つものの11・27と、段を持たず頸部や肩部に沈線を施されるもの12・13・28、その他ヘラ描木葉文を持つ肩部小片29や底部片が出土している。

口縁部はいずれも外上方に短く開き、端部は丸みを帯びた面をなす。沈線を持つものに比べて段を持つもののほうが若干その外反度は強い。沈線は頸部、肩部とともに2条ずつ施されているが2本単位で引かれるのではなく、1本ごとに引かれている。13の外面には横方向のヘラ磨きが観察されるが、12は壺と同様の撫でしかみられない。

肩部片29にはヘラ描木葉文が施されている。縦2本、横3本の沈線で区画された四辺形のなかに、対向する2本ずつの弧線で描かれた木葉形をX状に配しているように観察されるが、器表面の摩滅した小破片であるため、弧線と判断した部分が軸線を形成している可能性もある。工楽普通式の分類によるX木葉文のうちX4、もしくはX2に相当する。

底部は平底、ないしは若干の窪み底である。14の立ち上がり外面周縁部には2条の浅い沈線が巡っている。

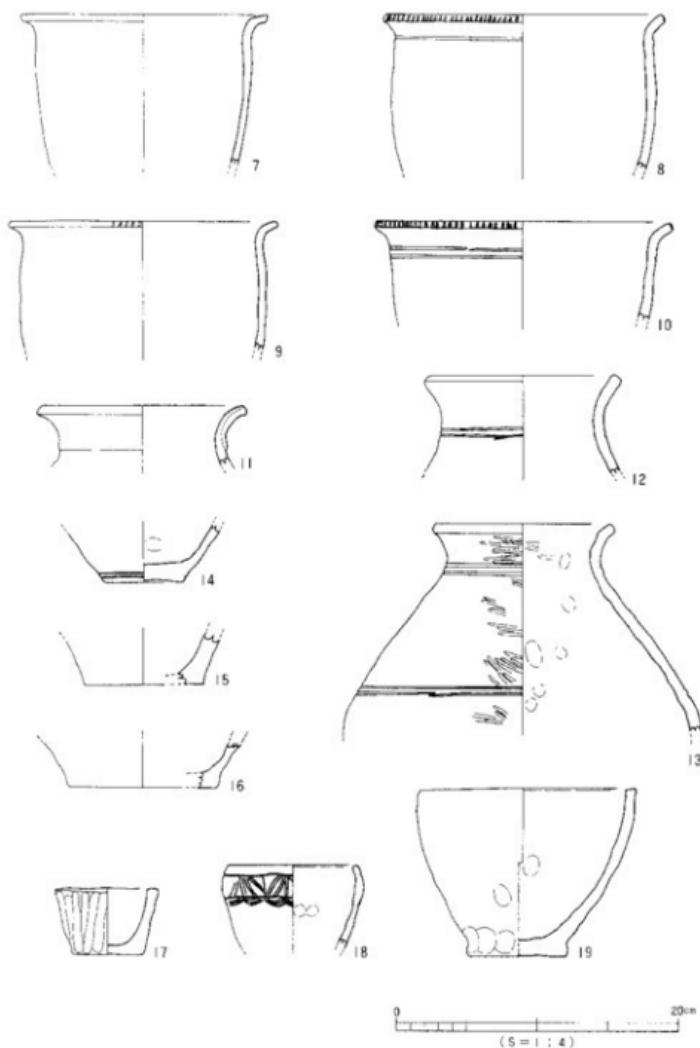
鉢 (17~19) 17は器高4.7cm、口径7.3cm、底径5.2cmを測る小型の完形品で、安定の良い平底のコップ状を呈している。外面は縦方向に撫で上げられ、内面は横撫でされている。器表面に部分的に僅かながら朱の痕跡がみられる。復元完形品19は器高11.5cm、口径15.3cm、底径6.3cmを測る。やや突出した円板状の底部にボウル状の体部を持つ。口縁部は面取りされ、平坦な面をなしている。底部立ち上がり外面に指頭痕がみられるが、その他の部位は撫でられる。

18は口縁部から体部の小片である。復元口径9.3cmを測る。口縁部をやや下った外面にヘラ描きによる半截木葉文と重弧文を組み合わせた文様帶を持っている。上下それぞれ1本ずつの横沈線で区切った文様帶のなかを2本の縦沈線で長方形に区画し、さらにこの長方形区画を1本の縦沈線で2分した正方形のなかに対向する2本ずつの弧線で構成された木葉形を1単位ずつ配している。工楽分類による+2木葉文に対応する+半截木葉文である。さらにこの木葉文帶の下位に接して3本単位の弧線を連続的に配しているが、これらの弧線は正面からみて左方向から右方向へと描かれている。

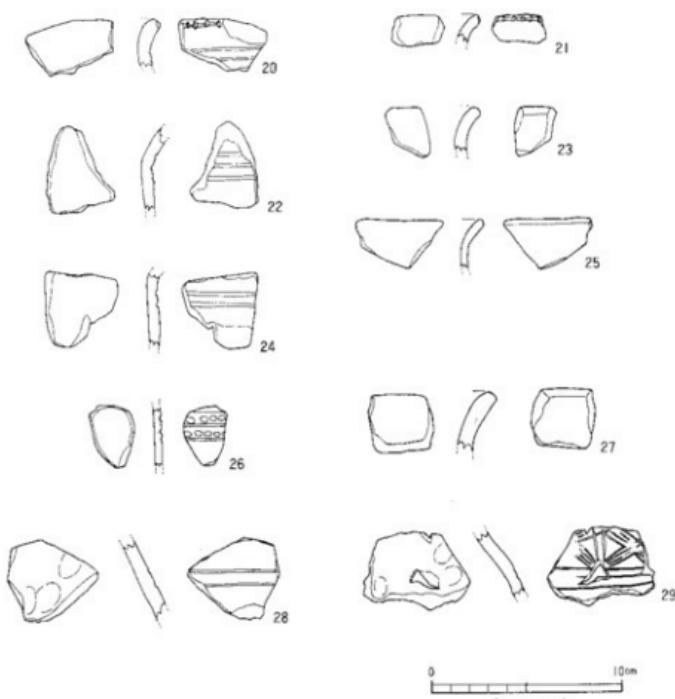
石鏡 (30) サヌカイト製の凹基無茎鏡、長さ2.8cm、最大幅1.2cm、重さ0.86gを測る。

打製石庖丁 (31) サヌカイトの横長剝片の周縁部を調整して長楕円形に成形していたものと思われる。側部には浅い抉りを入れられている。

調査の概要



第9図 SB-2 出土遺物(I)



第10図 SB-2 出土遺物(2)

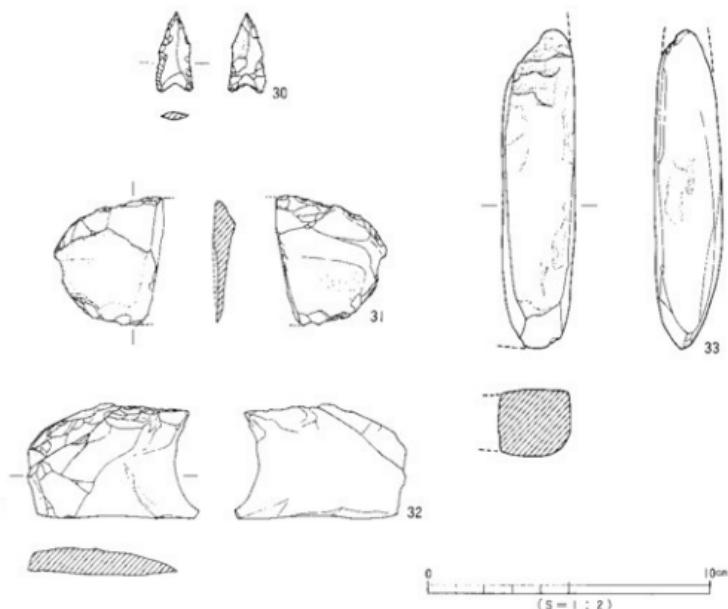
剝片 (32) サヌカイトの横長剝片であるが、打撃痕が確認できるのみで調整痕や使用痕はみられない。

石斧 (33) 鉈刀石斧の破損品である。材質は緑色片岩、現況重量127gを量る。

SB-3 (第12図、図版5)

A-2区において検出された円形竪穴住居址で、その南半部が調査された。立ち上がり10cmを測り、周壁溝は持たない。直径4.5m程度の規模になるものと思われる。南辺から南東外方向に向けて幅50~90cm、深さ10cm、断面U字状の溝が検出されており、住居址との切り合ひもみられないところから、住居に付随する施設と考えられる。床面より柱穴1基が検出されている。図化不能な弥生土器細片を数点出土しているが、時期決定に有効な遺物ではない。

調査の概要



第11図 SB-2 出土遺物(3)

したがって造構の時期は不明である。

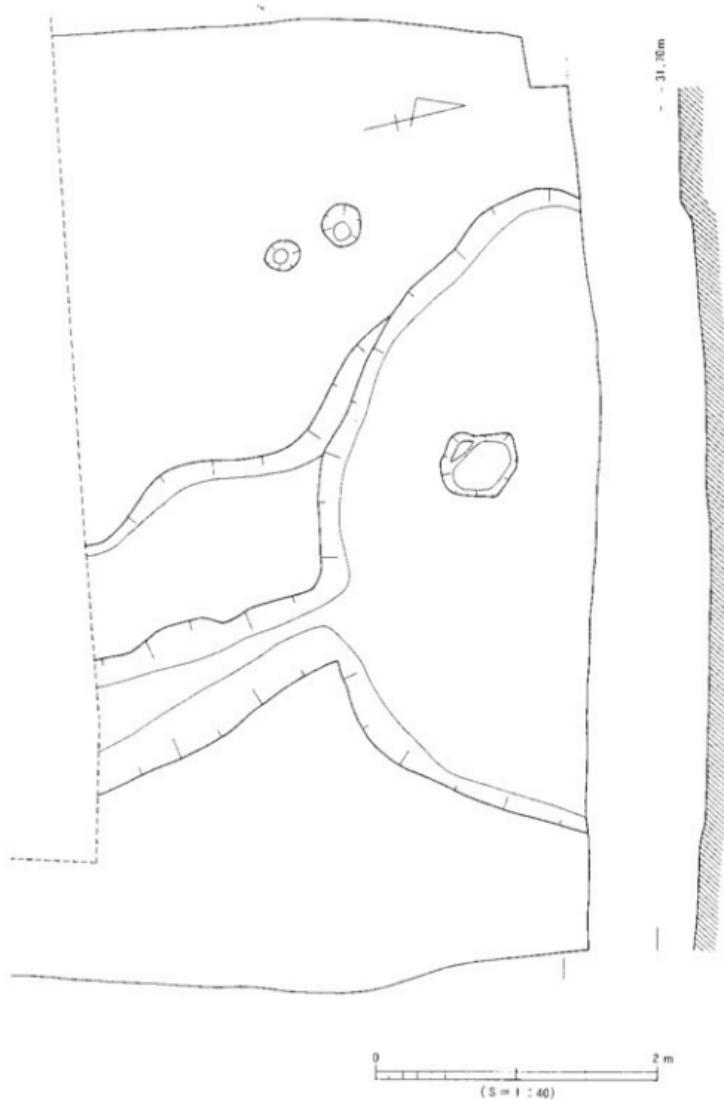
(2) 柱穴 (第5図)

11基の柱穴のうち6基がA-1区中央部、北端に近い部分で検出されており、直交するライン上に載ってはいるものの据立柱建物が想定できるような配置ではない。遺物の出土もなく、所属時期不明の柱穴群である。

(3) 旧河川 (第5・13図)

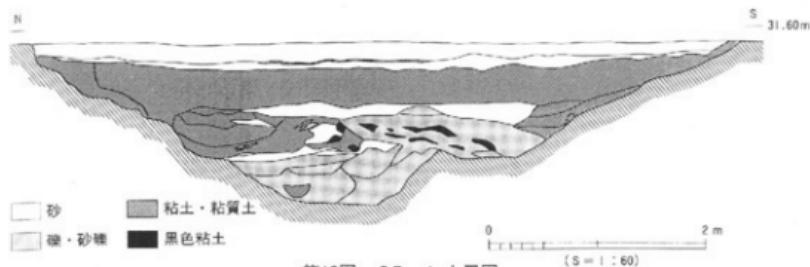
A-1区を二分するように北東部から南西部へ幅6.5m前後の流路SR-1が検出されている。調査日程の都合上、全掘は行わずトレンチによる断面観察を行った。検出面に近いレベルで須恵器片2点が検出されており、これらの須恵器の時期、ほぼ9世紀代に埋積したものと考えられる。

文京遺跡4次調査



第12図 懸穴住居 SB-3

調査の概要



SR-1 出土遺物 (第14図)

須恵器

壺 (34) 頸部片、頸基部径11.4cmを測る。

瓶 (35) 平瓶もしくは長頸瓶の胴部から底部の片である。最大径17.8cmを測る扁平な胴部は、棱を持って強く屈曲する。底部には径11.6cmの輪高台を貼付けられている。

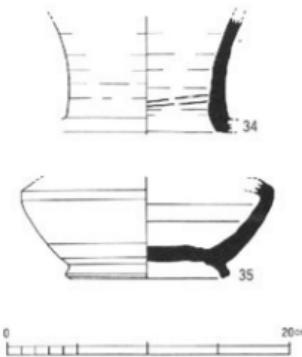
(4) その他の遺物 (第15図)

縄文土器 (36) 屋内運動場用地B区において掘削されたトレーナーから2点の縄文深鉢片が出土しているが、これらの破片は同一個体と考えられる。平坦に面取りされた口端部直下の外面に「C」字状の爪形文を1段施されている。地文に縄文が観察されるが、摩滅のため詳細はさだかでない。西日本瀬戸内沿岸中期、船元I式に相当するものと考えられる。^①

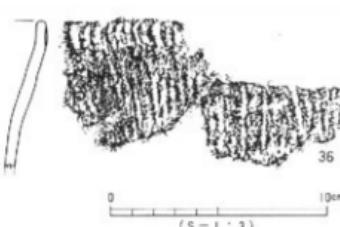
(註)

①工藤善通 「遠賀川式土器における木葉文の展開」『文化財論叢—奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集一』1983

②愛媛大学 宮本一夫氏の教示による。



第14図 SR-1 出土須恵器

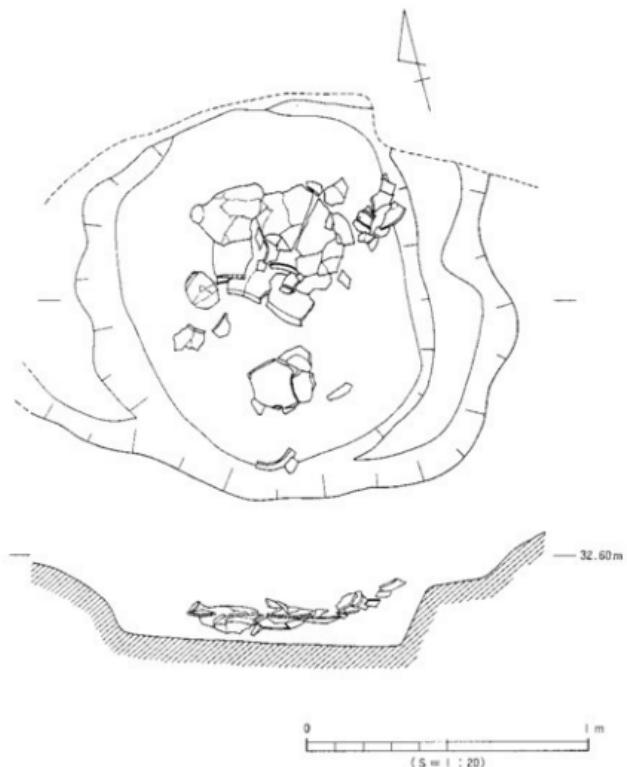


第15図 B区出土縄文式土器

4 構内採集弥生式土器について

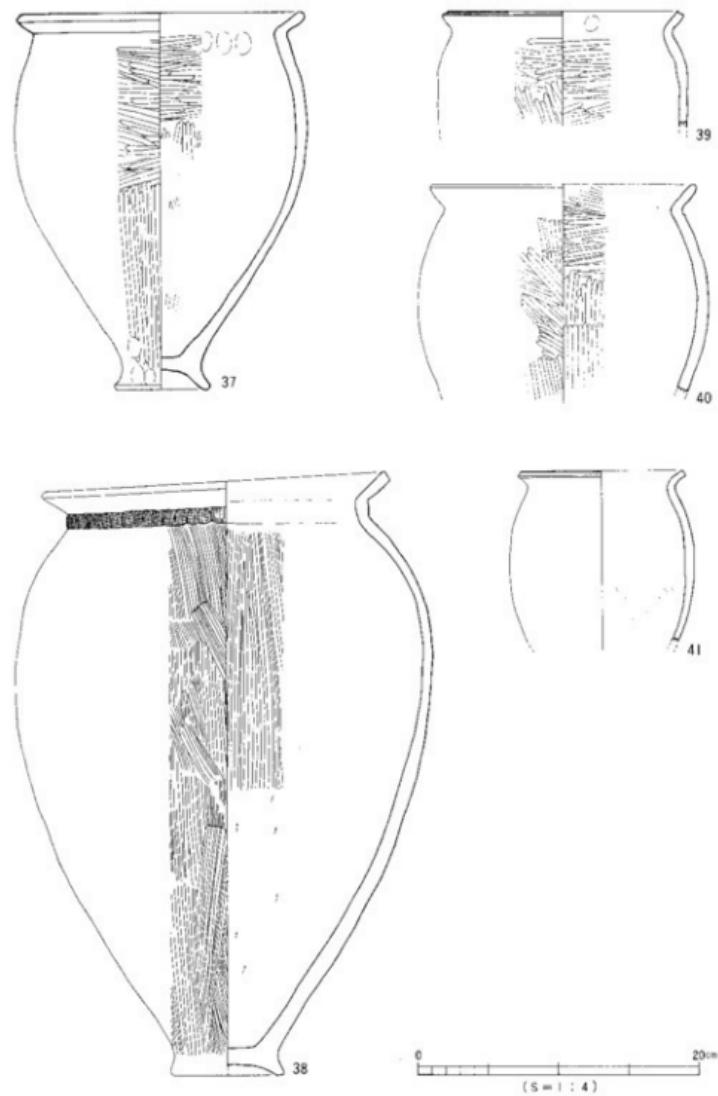
1982(昭和57)年4月30日、同校構内グラウンド東北部においてゴミ焼却穴掘削中に弥生式土器が出土したとの届出が松山市教育委員会になされた。同教育委員会は、同日係員を現地に派遣、現状把握を行った後、同日より5月4日の間、出土状況の実測、遺物のとりあげ等、緊急にこれに対処した。

遺物は、直径1.2m前後の円形もしくは隅丸方形状を呈する土壌内よりまとまって出土しているが、既にその上部は焼却穴掘削中に削平されており、基底部より20cm程度の立ち上がりを残すのみであった(第16図、図版6)。以下、出土遺物について記述する。



第16図 土壌遺物出土状況

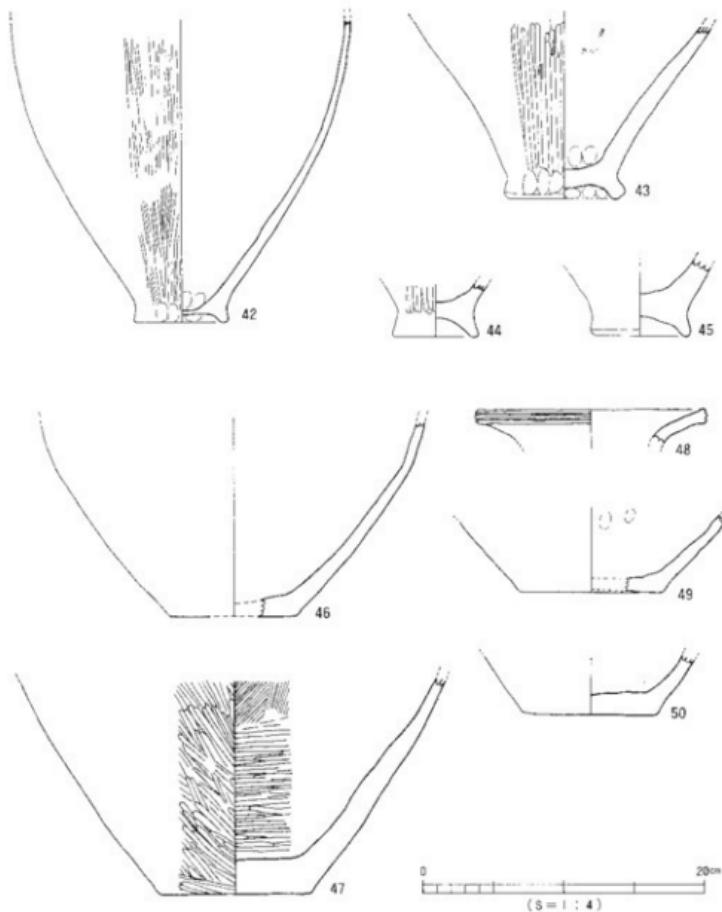
構内採集弥生式土器について



第17図 土壤出土弥生式土器(1)

弥生式土器（第17～19図、図版11・12）

甕（37～45） 大型品38・42・43とその他の中・小型品、あわせて9点が出土している。完形品、および底部の確認できる個体はすべてくびれの上げ底を呈しているが、概してくびれや上げ底の度合は小さい。大型品38の頸部には圧痕文突帯が貼付けられている。概ね中期後葉から後期初頭、凹線文期の在地系甕である。凹線文系の甕が口端面に1～2・3条の凹



第18図 土壌出土弥生式土器(2)

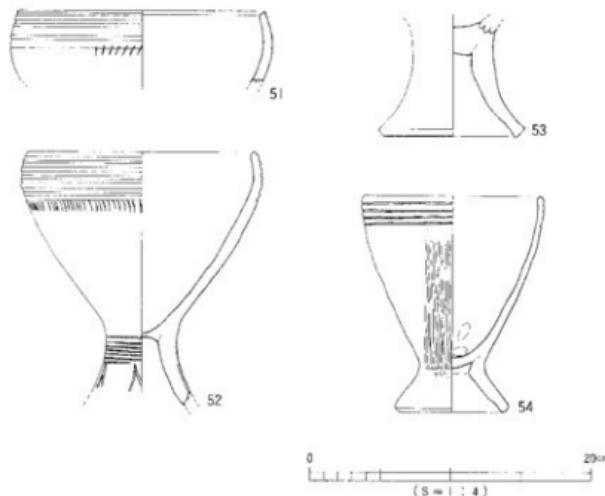
構内採集弥生式土器について

線を持つ跳ね上げ口縁に、平底の底部をなし、器面調整に刷毛目を多用されるのに対し、單純におさめられた口端部、くびれの上げ底、ヘラ磨きの多用、凹線文系大型品の刻み目突帯に対する压痕文突帯といった在地系様の特徴を良く備えている。38の器面調整がヘラ磨きではなく刷毛目によっていること、39・41の口端面に明確な面取りが行われているのは凹線文盛行期、中期後葉を若干下る後出の要素である。

壺 (46~50) 口縁部1点、胴下半部から底部の破片4点が出上している。口縁部48は、端部にあまり大きく肥厚を持たず、端面に2条の不明瞭な凹線を施される。底部は、安定の良い平底、胴部の器面調整の観察できる個体47にはヘラ磨きが行われている。

高壺 (51~53) 深椀タイプの高壺2点と脚部1点が出土している。51の口縁部外面には3条、52には6条の凹線が巡り、どちらもその下位に刻み目を施されている。52の脚上端部には鋭利な工具による沈線が螺旋状に巡り、その直下にヘラ沈線によって矢羽根、もしくは二等辺三角形状の旋文をほどこされる。壺底部は粘土板充填によって塞がれている。53は無文の低い脚部、平坦に面取りされた脚端部は内端で接地する。

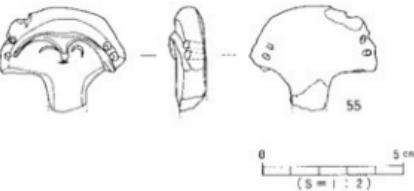
台付鉢 (54) くびれの上げ底の狭底部のような低い脚台を持った深椀タイプの鉢である。口縁部外面には4条の沈線が施される。椀部の外面には輻方向のヘラ磨きが看取される。



第19図 土壤出土弥生式土器(3)

分銅形土製品（第20図、巻頭図版）

土壤床面直上より、最大幅4.3cmと比較的小型の分銅形土製品の上半部が出土している。円形と隅丸方形の中間のような平面形の粘土板の両側縁を大きく削りこみ、くびれ部の断面は方柱状を呈する。肩の表現は隆帯によって行われ、その端部は削りこみ部にまで突出している。眼は半截竹管状の、口はヘラによる刺突で表現され、側端部に2孔ずつの孔を表面側から穿たれている。



第20図 土壤出土分銅形土製品

5 小 結

文京遺跡は、本調査地と西に隣接する愛媛大学城北地区構内、南の日本赤十字病院の一帯に展開する弥生時代を中心とした集落遺跡である。本調査に先行して行われた愛媛大学構内における1~3次調査や、その他の遺物採集事例から、この遺跡に関しては弥生時代中期後葉から後期前葉の遺構・遺物のみがクローズアップされることが多かった。しかし、本調査を含めてその後も断続的に行われている11次に至るまでの調査や、既往の調査における出土遺物・遺構の再検討、さらに加えて周辺部の遺跡との検討により、遺跡内での集落の動態が解明されつつある。

従来言われているように、文京集落は愛媛大学法文教棟、3次調査地を中心に弥生時代中期後葉を盛期とする集落であることは現在のところ動かない。この時期を下って後期になると、1・2次調査や10次調査にみられるように集落の中心は西側に移動する。古墳時代にあっては松山北高遺跡で調査されたように、集落はさらに西へ移動している。遺跡東部にあたるこの4次調査地で弥生時代前期の遺構が検出されたことは、この時間の経過に伴う集落の移動を前期に遡って検証する結果となった。この集落動態については、谷若倫郎氏や宮本一夫氏の論に詳しいところであり、その論にも本調査の成果がふまえられていることを付記しておく。

松山平野における確実な弥生時代前期の住居址の検出は、本調査が初例である。その中でもSB-2は板付II式併行期と考えられる一括性の高い遺物を出土しており、その松菊里型近似のプランとともに注目に値する。

文京遺跡は、現在、松山平野を東北部から南西に流れる石手川の旧流路によって形成された扇状地上に位置し、この扇状地が安定した生活面となるのは弥生時代に入ってからというように従来理解されていたが、近年の文京遺跡8・9次調査や道後櫛又1次調査（道後城北RN B遺跡）における弥生時代遺構面下層からの縄文時代後・晩期の包含層の検出、また文京遺跡11次調査での縄文時代後期の屋外炉の検出により、少なくとも縄文時代後期には文京

遺跡において安定した面上での生活が行われていたことが明らかになってきている。本調査B区、屋内運動場用地での縄文中期上器片の出土は、重機によるトレンチ掘削中の必ずしも良好とはいえない出土状況ではあるとはいえ、この遺跡の時期がさらに該期まで遡ることを示した結果となった。

調査に先だって採集された土壌出土の遺物群は、凹線文期の在地系上器を主体とした一括遺物である。これらのうちでも、縄には本文中でもふれたように、凹線文盛行期を若干する要素を持つものがある。また、口縁部に凹線を施される高環脚部の矢羽根、もしくは二等辺三角形状の施文がヘラ描沈線によっていたり、台付鉢の口縁部施文が凹線ではなく、ヘラ描沈線となっていること、さらに壺口縁部の凹線がきわめて浅く不明瞭になっていることもこれららの縄と同様後出の要素である。したがって、これらの土器の時期を凹線文盛行期に後続する時期、後期初頭にあてておく。

11次にわたる文京遺跡の調査における分銅形土製品の出土は10例を数えるが、その多くは包含層からの出土であり、明確な造構に伴う検出は3次調査、中期後葉の円形住居址S B-6と、本土壙での2例のみである。この土壙が廃棄土壙であるのか、柱穴祭祀を伴った柱穴であるのかによってその出土の意味するところは大きく異なる。この種の土製品の多くが集落内から出土することを考えれば、この土壙周辺に該期の集落関連造構が存在する可能性は高く、その中のこの土壙のありかたによってその性格づけも可能になってこよう。また、この土壙および、周辺に想定される該期の造構群は、西方の1・2・10次調査地周辺に展開する後期の造構群よりもむしろ、東方100m足らずの平形銅剣出土推定地、道後今市遺跡6次調査地検出の後期前葉遺物群等とより強い関連を持つものと考えられる。その意味でもこの東中学校構内は文京集落の東限、東方に展開する道後今市遺跡の西限にかかる部分にあたっている可能性は高いものといえよう。

【参考文献】

- 愛媛大学・松山市教育委員会『文京遺跡』 1976
 愛媛大学・松山市埋蔵文化財センター『文京遺跡第2・3・5次調査』 1992
 愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室
 『文京遺跡第8・9・11次調査—文京遺跡における縄文時代遺跡の調査—』 1990
 愛媛大学埋蔵文化財調査室
 『文京遺跡10次調査—文京遺跡における弥生時代遺跡の調査』 1991
 愛媛県教育委員会・愛媛県立松山北高等学校
 『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書』 1981
 西田 栄
 「松山平野の青銅器出土遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会 1986

文京遺跡 4 次調査

谷若 優郎 「道後城北遺跡の展開」『松山道後城北の森生遺跡をめぐって』

古代学協会四国支部シンポジウム資料 1988

西尾 幸則

「道後城北 R N B 遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会 1989

梅木 謙一・宮内 憲一

「道後今市遺跡 6 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報III』松山市教育委員会 1991

松山市立埋蔵文化財センター

第三章

道後今市遺跡

— 6次調査 —

第III章 道後今市遺跡6次調査

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1988(昭和63)年12月20日、四国電力株式会社より松山市道後今市1053-1地内における社宅建替工事にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター(以下、市教委・埋文センター)に提出された。当該地は、松山市の指定する「68 今市遺物包含地」内にあたり周知の遺跡として知られている。同包含地内では、これまでに愛媛県埋蔵文化財調査センターにより「道後今市遺跡」〔岡田敏彦 1985〕として既に5次の調査が実施されており、弥生時代～古墳・中世の集落関連遺構を多数確認している。周辺地域においては、本調査地の西に、文京遺跡や松山大学構内遺跡〔梅木謙一 1991〕が、東には、日露戦没中、平形銅劍3口が出土した道後公園東麓遺跡や弥生前期の木葉文土器が出土した道後冠山遺跡が、北には弥生中期の遺物が出土した土居窪遺跡などが確認されている。

また、本調査地は1909(明治42)年に平形銅劍10口と壺が出土した地点として古くから知られている〔和田千吉 1909〕。

これらのことから、市教委・埋文センターは当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するために1989(平成元)年3月に試掘調査を実施した。試掘の結果、弥生土器を含む遺物包含層を検出した。この結果を受け、市教委・埋文センターと四国電力株式会社の両者は協議を行い、社宅建替により破壊される遺構・遺物に対して、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

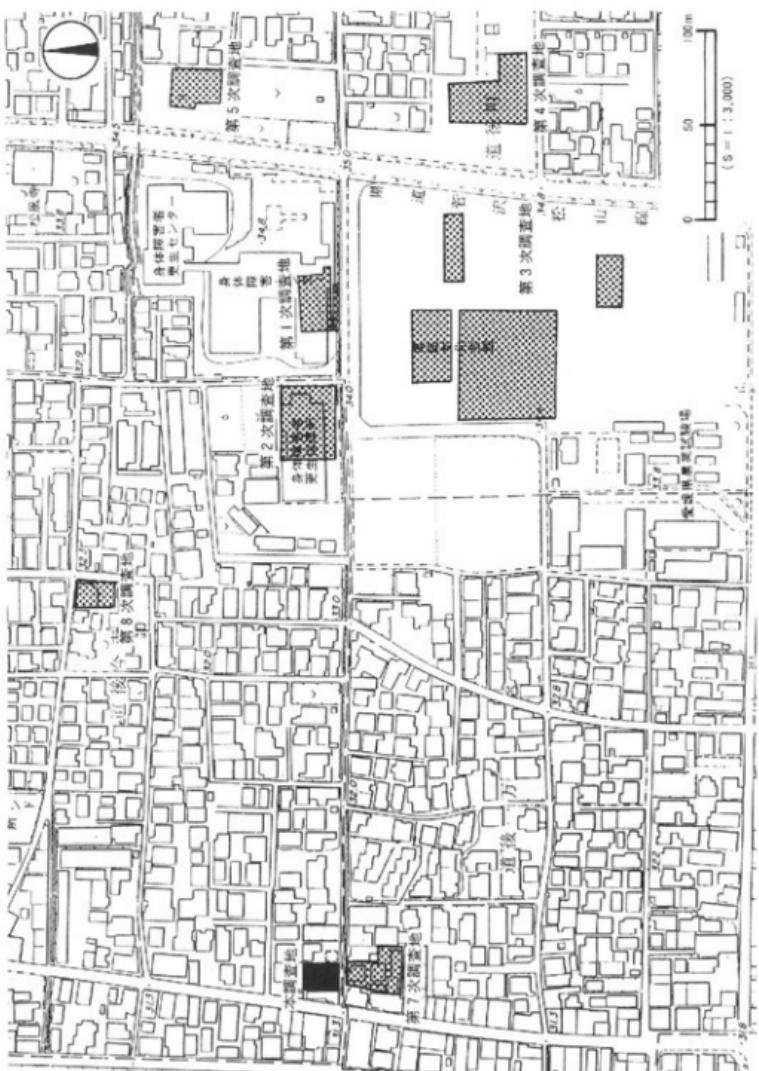
調査は、平形銅劍埋納に関する資料存在の有無と、今市遺物包含地内に存在する古墳～中世の集落の範囲確認を目的とし、埋文センターが主体となり、四国電力株式会社の協力のもと、1989(平成元)年7月31日に開始した。

(2) 調査の経緯

調査地は、以前、住宅として使用されていたため、遺物包含層及び、地山の大半が削平されており、遺跡の依存状況は良好といえるものではなかった。調査の対象面積は238m²であるが、調査地の周囲に民家や道路などがあったため、最終的な発掘調査面積は160m²余りとなった。以下、調査の工程を略記する。

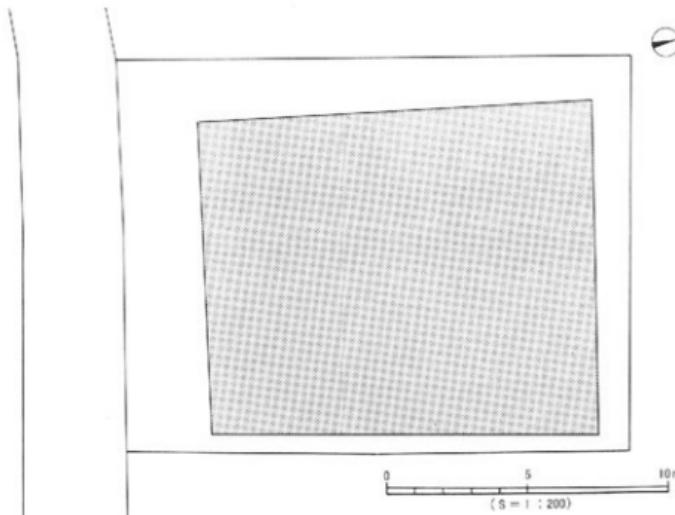
1989(平成元)年7月31日、重機による表土剥ぎ取り作業を開始した。調査区内は建物の基礎や近現代の瓦だめなどがあり、これらの除去と、表土及び擾乱土をすべて場外搬出したため、表土剥ぎ取り作業に2日間を費やした。

道後今市道路 6 次調査



第21図 周辺調査位置図

調査の経過



第22図 調査地測量図

8月2日より作業員を増員し本格的な調査を実施する。擾乱の範囲を確認し、それらの除去を行う。引き続き包含層の掘り下げを行い、8月10日、遺構検出作業を開始し、並行して西半部の擾乱内の遺物の取り上げを行う。8月18日、遺構検出を終了し、竪穴式住居址及び、他の柱穴の掘り下げを開始する。9月8日、遺構の測量図を完了する。9月9日、出土遺物、調査用具等を撤去する（野外調査終了）。

9月11日～16日の間、埋文センターにて整理作業を行う。

(3) 調査組織

調査地 松山市道後今市1053-1

遺跡名 道後今市遺跡6次調査

調査期間 野外調査 1989(平成元)年7月31日～同年9月9日

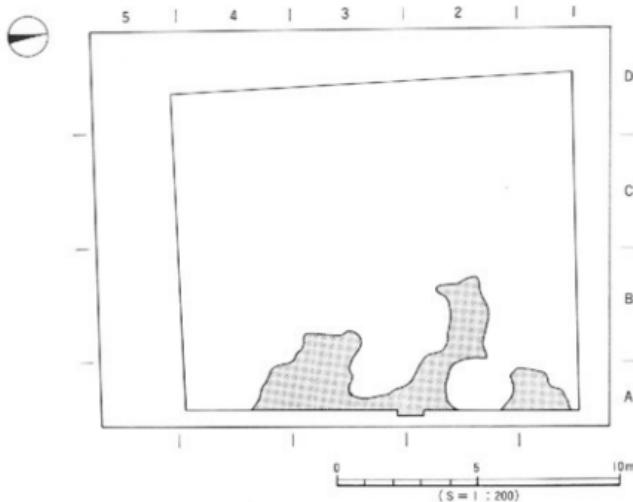
屋内調査 1989(平成元)年9月11日～同年9月16日

調査面積 238.22m²

調査委託 四国電力 株式会社

調査担当 梅木謙一・宮内慎一

作業員 中能 降、宮脇 和人、藤村 英樹、林 亨、黒田 正機、藤永 国博、森田 利恵、松本美知子、黒田 令子、西野 貴子、立木 佳代



第23図 調査地区割図

2 層 位 (第24図)

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土（水田耕作土・攪乱土）、第Ⅱ層暗褐色シルト、第Ⅲ層黄色シルト（地山）である。

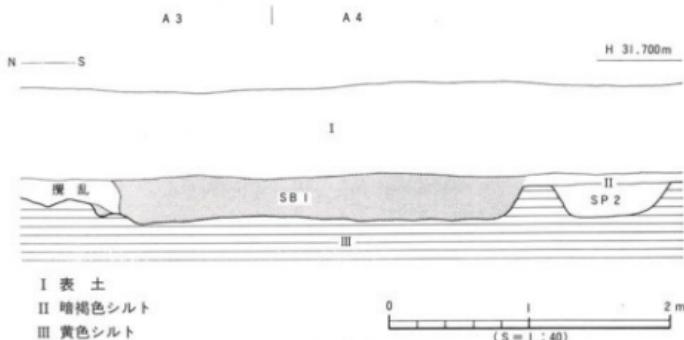
第Ⅰ層は、近現代の造成工事による客土で、地表下75~80cmまで開発が行われている。攪乱土には第Ⅱ層土が多量に含まれておらず、この土壤中より弥生土器（中期末～後期初頭）、須恵器、石庖丁他が出土した。第Ⅱ層暗褐色シルトは近現代の造成工事によりその多くは削平されており、検出は調査区東半部に限られ、しかも堆積は10~15cmを測るにすぎなかった。第Ⅱ層中からは土師器の細片が数点出土している。第Ⅲ層黄色シルトは無遺物層である。

遺構は第Ⅲ層上面で検出した（第25図）。竪穴式住居址（S B 1）1棟、柱穴14基他である。ただし、竪穴式住居址は、調査区東壁で掘り方を確認したところ、第Ⅱ層を切っていることを確認した。また、柱穴についても第Ⅱ層を切って掘り込まれた可能性が高い。

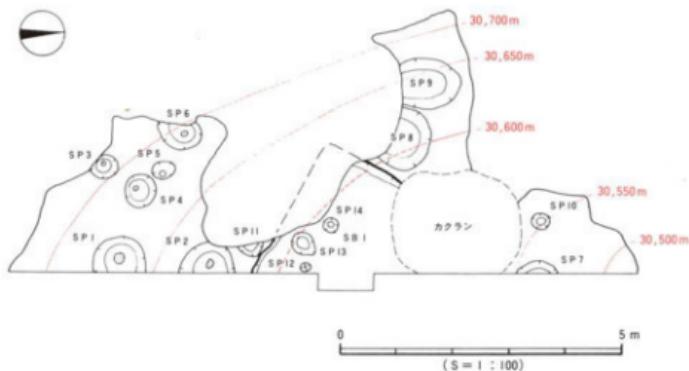
なお、調査にあたり、調査区内を4m四方のグリッドに分けた。4mグリッドは、北から南へ1・2・3・4・5とし、東から西へA・B・C・D・Eとして、A1・A2……E 5といったグリッド名を付した（第23図）。

3 調査の概要（遺構と遺物）

本調査で確認した遺構は、竪穴式住居址（S B 1）1棟、柱穴14基他である。すべて第III層上面での検出である。



第24図 東壁土層図



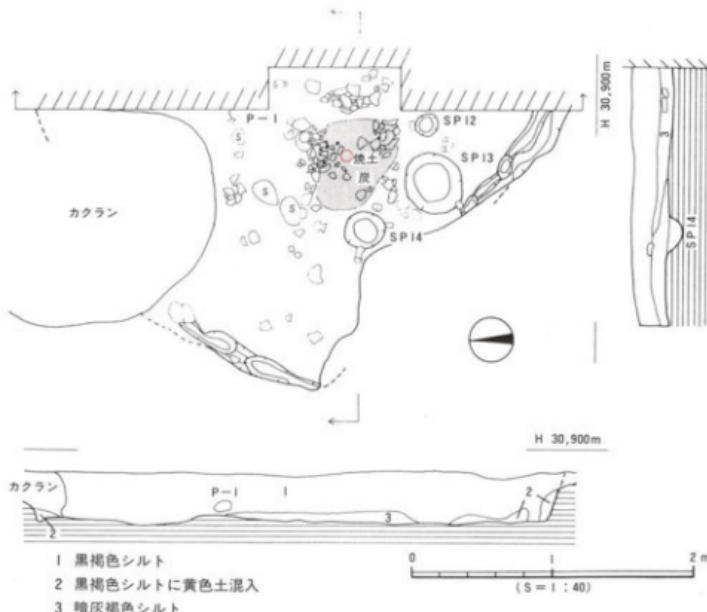
第25図 遺構配置図

道後今市遺跡 6次調査

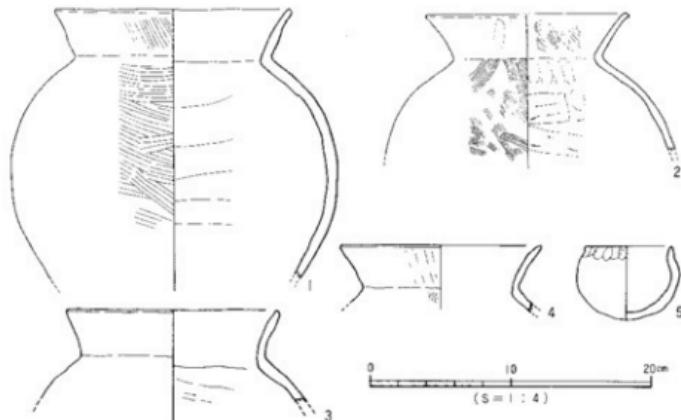
S B 1号住居址（第26図、図版14）

調査区中央東端、A 2～B 3区に位置する。第III層上面の検出であるが、本来は第II層中から掘り込まれたものである。西壁、北壁は擾乱をうけ、東は調査区外にあたるため全様は不明である。ただし、北西部と南端について壁体及び壁体溝を検出しており、平面形は方形もしくは隅丸方形になるものと考えられる。規模は北西—南東で2.4m、北東—南西で1.75m、壁高30cm（検出面下）を測る。壁体溝は断面「U」字状で、幅15cm、深さ5cm程度である。溝底に小ピット（径10cm、深さ5～15cm）が15cm前後の間隔で存在する。床面はほぼ平坦で、埋土は黒褐色シルトである。炉址は付設及び掘り込み式のものは未検出であるが、住居址中央部で焼土及び炭を確認した。この周囲には、幼児頭大の石が弧状に配置されて検出された。

この他、住居址内からは、柱穴3基を確認した。S P14は、本住居址の主柱穴と考えられるもので、径25～30cm、深さ15cmを測る。S P13は、本住居址を切っている（時期不明）。また、S P12は本住居址に伴うかは不明である。



第26図 S B 1 测量図



第27図 SB I 出土遺物実測図(1)

遺物は、住居址中央部の焼土及び炭上で群集して出土したものと、壁体付近で出土したものがある。

出土遺物 (第27・28図、図版16・17)

壺形土器、壺形土器、高壺形土器、ミニチュア土器が出土した。

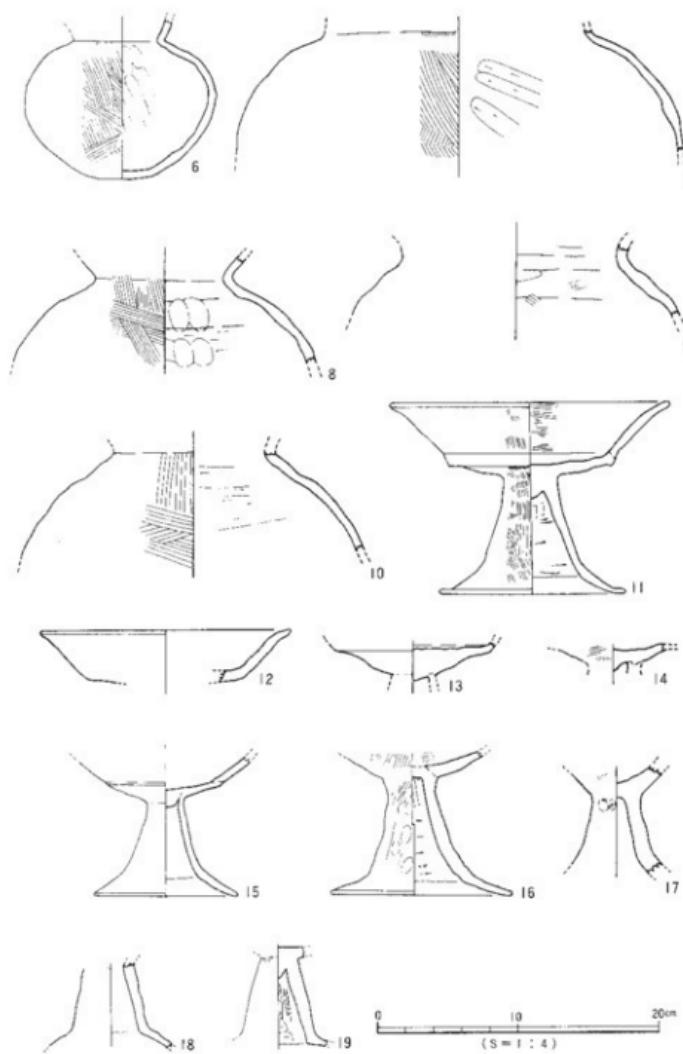
壺形土器 (1~4) 1は長く外傾する口縁部をもつ。口縁端面は外傾し、丸くおさめる。口縁部外面に刷毛目痕を看取る。胴部内面は削るもの、器壁はさほど薄くはない。胴部外面は粗雑な刷毛目調整。2は外反する口縁端面は外傾しナデによる面をもつ。胴部内面は、頭部直下に指頭痕が顕著に残り、以下は強いヘラ削りがされる。3は小片である。口縁部はやや長く直立気味に立ち上がる。口縁端部はやや内湾する。端部は外傾し、丸い。4は外反する口縁部をもつ。端部は丸い。

壺形土器 (6) 6は肩部の張る球形の胴部に、外反する口縁部がつくものである。胴部外面は凹凸が著しい。内面は指によりナデ上げたあとが顕著に残る。

胴部片 (7~10) 7、8は壺形土器の胴部片、9、10は壺形土器ないし壺形土器の胴部片とも考えられるものである。いずれも、内面にヘラ削り痕を看取するものの、器壁は薄くない。外面は粗雑な刷毛目調整である。

高壺形土器 (11~19) 11は2分の1の残存品である。壺部は、底部との境に明瞭な段を

道後今市遺跡 6 次調査



第28図 SB I 出土遺物実測図(2)

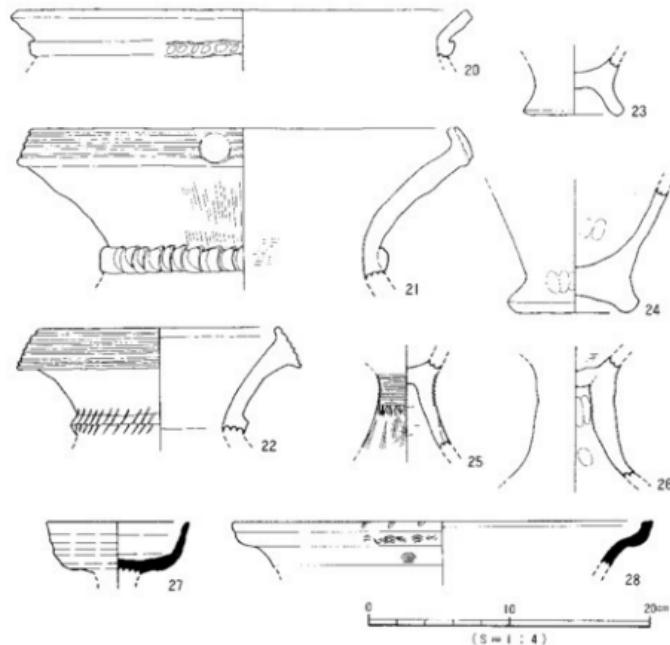
調査の概要

もち、口縁部は外傾し、端部は外反する。脚部は、柱一襷部境に、ヘラ削りによる棱をもつ。环部と脚部は組み合せ式であるが、脚天井部は充填技法を用いる。12は内溝の後、外反する口縁部をもつ。13、14は环底部で、いずれも充填技法である。15は磨滅が著しい。环底部との境には段をもち、脚部内面の柱一襷部境には棱をもつ。16は柱内部の削り痕が顕著で、柱一襷部境に明瞭な棱をもつ。柱部外面は指押えによる凹凸が著しい。17は器壁が著しく厚い。柱内面はケズリ後丁寧なナナデがおこなわれる。

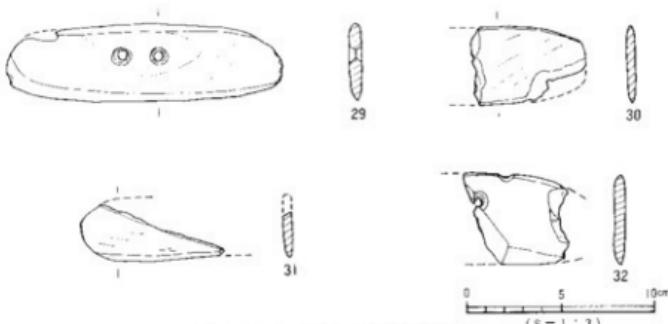
時期：古墳時代前期終～中期前半

包含層出土遺物（第29・30図、図版17）

20～32は、包含層中及び表土中の包含層土壤中より出土した遺物である。弥生時代中期末～後期初頭（20～26）、古墳時代後期（27、28）の遺物群である。石庖丁の時期は特定できず。



第29図 包含層出土遺物実測図(1)



第30図 包含層出土遺物実測図(2)

4 小 結

今回の調査において遺物包含層と集落関連遺構を確認することができた。第II層遺物包含層は、現況の堆積は希薄であるが、第I層擾乱土中に、第II層が多量に含まれていることから、本来はかなり厚い堆積であったことがうかがわれる。さらには、擾乱土中出土の弥生土器（中期末～後期初頭）、須恵器（6世紀代）は、第II層上に混入して検出されることが多く、第II層中の遺物であった可能性が高いと考えている。また、SB1号住居址は、第II層を切り込んで築造されている。

SB1号住居址は、全様は不明であるが、第II層の形式時期や当地が5世紀代に居住地であったことを示す資料であり、当地の集落経営を知り得る数少ない資料として重要な意味をもつものである。また、SB1号住居址では、古墳時代前期の一括資料を得ることができた。本住居址の土器群は、完形品を含む各器種の破片が多数出土しており、これは、松山平野における古墳時代前期の土師器編年を考えるうえでは、好資料となるものであろう。

本調査では、平形銅劍埋納に関する直接資料は得られなかったが、当地が古墳時代には住居であったことを確認できたことは一つの成果である。

【参考文献】

- 岡田 敏彦 1985 「道後今市遺跡」勘査報告書文化財調査センター
- 梅木 謙一 1991 「松山大学構内遺跡 2次調査」松山市文化財調査報告書20
- 松 山 市 1987 「松山市史料集第二巻 考古編II」
- 愛媛県 1986 「愛媛県史 資料編 考古」
- 古代学協会四国支部 1988 「松山道後城北の弥生集落をめぐって」シンポジウム資料
- 和田 千吉 1909 「考古界 第8篇 第5号」

遺物観察表

●表2 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎 土 燃成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口徑(16.5)	口縁部前面に横を待ち、側面部は丸くおさめる。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ(5本/cm)	①ヨコナデ ②抜抜工具によるナデ	暗褐色 ○	砂粒 全 ○	SBI 黒斑	
2	甕	口徑(13.2)	口縁部は側部で「く」の字状にくぎれた後、外反して閉く。	ハケ	①ナデ ②ケズリ	乳白色	石・長(1~4) ○	SBI 16	
3	甕	口徑(15.0)	口縁部はやや内凹斜面に外反し端部に丸くおさめる。	①ヨコナデ ②一磨滅のため不明	①ヨコナデ ②ケズリ	暗褐色 淡褐色	石・長(1~3) ○	SBI	
4	甕	口徑(14.0)	口縁部はやや外凸斜面に閉き、端部は丸い。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ	①ヨコナデ	暗褐色 淡褐色	密 全 ○	SBI	
5	口径 底径 高さ	6.0 5.2 1.0	口縁部は手捏ねによる成形。口縁部にまみ出しがある。	①ナデ(指捺痕抜き) ②ハス(5本/cm)によるナデ	ナデ	赤褐色	密 ○	SBI 16	
6	甕	口径(6.5) 底径 11.3	不完全な底部をもち、口縫部は端形を呈する。端部は強くくびれる。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ(5本/cm) (指捺痕抜き)	①ナデ ナデ上げ ②ナデ	乳白色	砂粒 ○	SBI 黒斑	16
7	甕	口径 8.6	肩部のはるものである。	①ハケ→ヨコナデ ②タテハス(7本/cm)	②ケズリ→ナデ	乳白色	砂粒 ○	SBI 黒斑	
8	甕	口径(9.4)	肩部のはるものである。	①ハケ→ヨコナデ ②ハケ(3本/cm)	ナデ ②ケズリ(指捺痕)	褐色	密 ○	SBI	
9	甕	口径(15.6)	肩部のはるものである。	ヨコナデ	ナデ ②ケズリ	乳白色	石・長(1~3) 全 ○	SBI	
10	甕	底径 7.2	肩部のはるものである。	ハケ(4~5本/cm)	①ナデ ②ケズリ	黄褐色	砂粒 ○	SBI	
11	高坪	口徑(19.0) 底径(13.5) 高さ 13.5	接合部に段をなす。中空で複数がりの脚柱部に外反して閉く。表面をもつ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	淡褐色	密 ○	SBI 16	
12	高坪	口徑(17.6)	複数がりの脚柱部に外反する。口縁部は外反気味に大きく揺す。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	赤褐色	密 全 ○	SBI	
13	高坪	口径 2.5	底部脚部、丸い込み枝法か。	ヨコナデ	剥離のため不明	赤褐色	密 ○	SBI	
14	高坪	口径 1.8	丸塗法か、幅は狭を基取。	ハケ(8本/cm)	ナデ	黄褐色	密 ○	SBI	
15	高坪	底径(10.0) 底高 9.8	接合部に棱をもつ。中空で複数がりの脚柱部に外反して閉く。表面をもつ。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○	SBI 16	
16	高坪	底径 10.1	中空で複数がりの脚柱部組み合わせ性法か。	①ハケ ②ハケ ③ハケ	④ハケ ⑤ケズリ ⑥ヨコナデ	黄褐色	石・長(1~2) ○	SBI 16	
17	高坪	口径 6.1	中空の脚柱部をもつ。	磨滅のため不明	②ケズリ ③ナデ	黄褐色	密 ○	SBI	

道後今市遺跡 6 次調査

出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(名)	胎 烧	土 成	備考	図版
				外 面	内 面					
18	高杯	残高 7.1	充満法。縁部周内面と杯部の境界に強い棱をもつ。	⑪ 一ハケ ⑫ ナテ	⑬ 一ケズリ ⑭ ケズリ	乳褐色	美 ○	SRI	17	
19	高杯	残高 7.5	中ちの脚部から。棱をもって聞く底部をもつ。組み合せ枝法か。	ナテ	ヨコナデ	乳褐色	美 ○	SRI	17	
20	甕	口径(31.4)	底部に断面舌形状の貼付凸巻。凸巻上に押捏。	ヨコナデ	⑪ ヨコナデ ⑫ ナテ	暗褐色 褐色	砂粒 ○			
21	甕	口径(29.2)	口縁上方に粘液し底面に4条の複数縦文。底面に貼付け突巻+押捺文。	⑪ ヨコナデ ⑫ ハケ→ヨコナデ ⑬ 一タテハケ	⑪ ヨコナデ ⑫ ヨコハケ	黒褐色 淡褐色	石・瓦(1~1) ○		17	
22	甕	口径(16.8)	口縁上方に粘液し底面に5条の沈縮文。底面に貼付け二角形の貼付凸巻+割込み目。	⑪ ヨコナデ ⑫ ヨコナデ	⑪ ヨコナデ ⑫ ナテ	深褐色	石・瓦(1~3) ○		17	
23	甕	底径(6.6)	くびれの上辺底を平する甕の底部。	青筋のため不明	青筋のため不明	黄褐色 褐色	砂粒 ○			
24	甕	底径(7.9)	肩手で、くびれの上辺底を笠る。体部には直線的に斜め上方に立ちあがる。	ナテ	ナテ	暗褐色 褐色	石・瓦(1~4) ○	墨痕		
25	高杯	残高 6.4	脚「森」に5条の沈縮文。 ヘラ模様。 矢羽根文。	ヘラミガキ	ナテ	淡褐色	石・瓦(1~2) ○		17	
26	高杯	残高 8.6	充満法。基盤やや厚い。	碧威のため不明	ナテ	赤褐色	石・瓦(1~4) ○			
27	高杯	口径(29.8)	口縁部をやや外反側方にのびる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰 色	美 ○			
28	器台	口径(29.8)	口縁に刷毛目。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰 色	美 ○		17	

●表3 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存材質	法量	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重き(g)		
29	石盾 I	完形	縞泥片岩	14.5	4.1	0.65	66.5		
30	石盾 I	残	縞泥片岩	6.0	4.2	0.5	22.9		
31	石盾 I	残	縞泥片岩	7.4	2.7	0.5	15.4		
32	石盾 I	残	縞泥片岩	5.5	4.8	0.60	25.6		

第IV章

道後今市遺跡

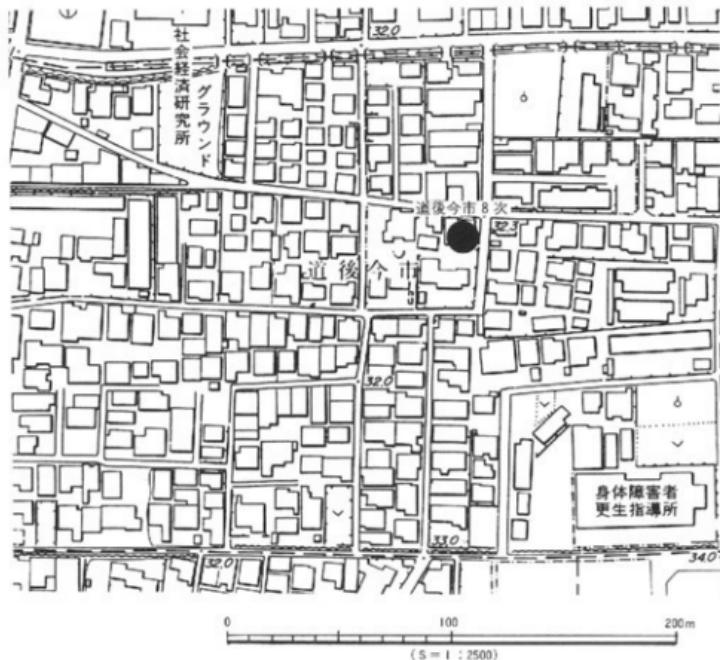
— 8次調査 —

第VI章 道後今市遺跡8次調査

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1990(平成2)年7月、井関亮甫氏より、松山市道後今市1065-5における宅地開発にあたって当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。当地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『68 今市遺物包蔵地』にあたり、周知の遺跡として知られており、同包蔵地内においては財愛媛県埋蔵文化財調査センターが昭和56年11月～昭和59年6月にかけて実施した道後今市遺跡1次～5次調査地、松山市教育委員会が行った道後今市遺跡6次(平形銅劍出土推定地)、今市遺跡7次調査地があり、弥生時代～中世にかけての遺構・遺物が検出されており、これらのことなどから当該地における埋蔵文化財の有無を確認するため1990(平成2)年9月試掘調査を行った。



第31図 調査位置図

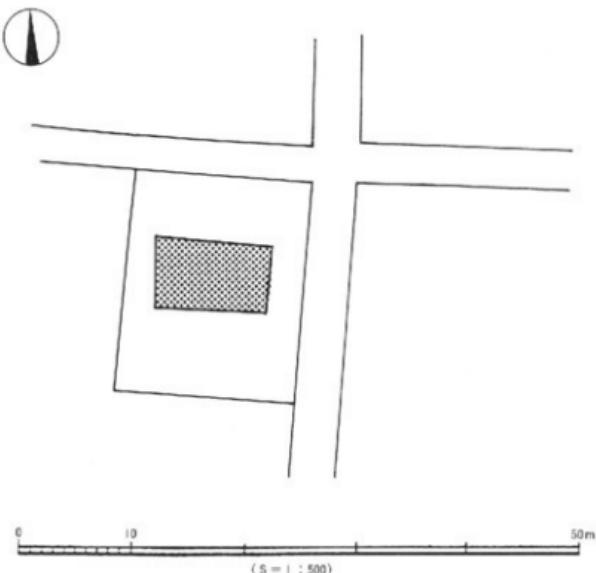
道後今市道路8次調査

(2) 調査組織

調査地 道後今市1065-5
遺跡名 道後今市遺跡8次調査
調査期間 1990(平成2)年9月3日～同年10月6日
調査面積 379m²
調査委託 井関亮甫
調査担当 相原浩二
調査補助員 武田和高
作業員 相良浩志、中條聖郎、大庭誠、後藤猛
整理作業 西岡早苗

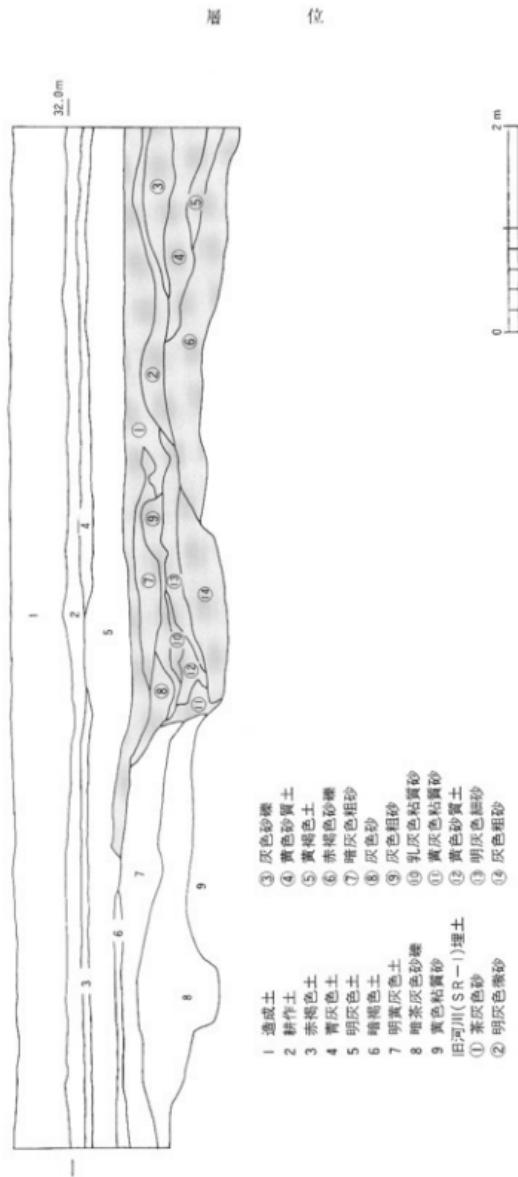
2層位(第33図)

本調査地は石手川扇状地と丸山川・大川による扇状地とが接する扇状地性氾濫原(標高32.4m)に立地する。



第32図 調査区位置図

第33圖 調查區南壁土壤圖

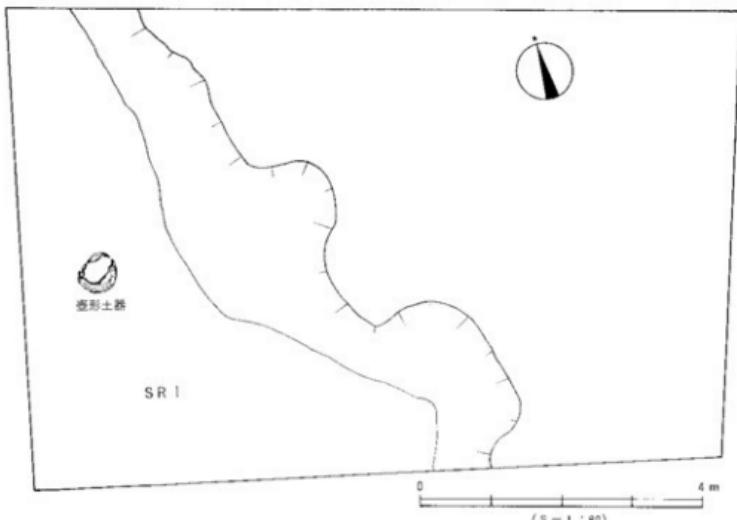


基本層位は第1層造成上、第2層耕作上、第3、4層水田床土、第5層明灰色土、第6層暗褐色土、第7層明黄灰色土、第8層暗茶灰色砂礫、第9層黄色粘質砂である。調査区西側は旧河川となっており第5層下、砂礫層、砂層が重なりあうように堆積している。近隣の今市遺跡の基盤面は本調査区では第7層上面が相当するものと思われるが上層には明確な遺物包含層はなく、人為的掘り込みも確認しなかった。遺物は第5層中と旧河川の埋土から出土した。

3 調査の概要（遺構と遺物）

遺構 調査区で検出した遺構は旧河川（SR-1）の1条のみである。流路は第7層、第8層を削るように南北方向に流れる。川岸は蛇行する。川床である黄色粘質砂は緩やかに東から西へ傾斜している。対岸は調査区狭小の為未検出である。

出土遺物 第35図の壺形土器は河川部下層の砂礫層から出土した。胴上半部から頸部にかけての出土である。胴部最大径は57cmをはかり、肩部は内湾し大きく張る。肩部と頸部に1本の沈線が巡り頸部は外湾気味に立ちあがり長く内傾する。口縁・底部は欠損の為形態は不明。胎上に石英粒・金雲母を含み肩部、頸部に黒斑が見られ、丹塗りの痕跡を示す。内外面とも摩滅しており全体の調整は不明であるが一部で調整が認められる。板付II式土器に

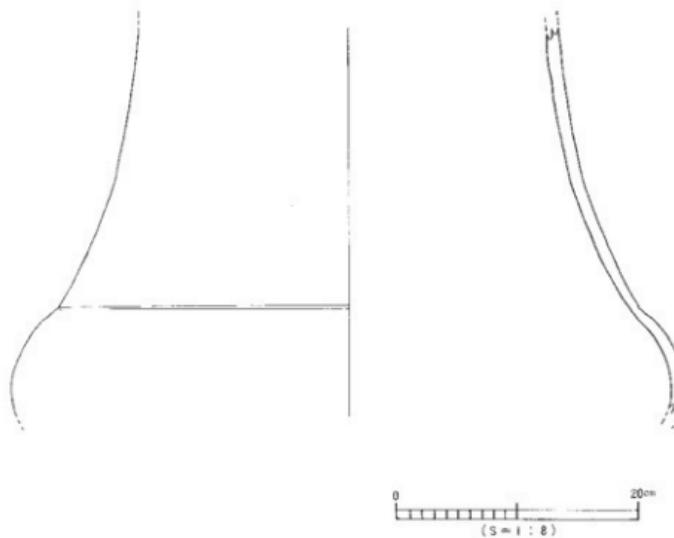


第34図 遺構・遺物図

類するものと思われる。同じく、河川の砂礫中から突帯文土器系の深鉢の破片も出土している。その他、第5層中から摩滅し丸みを帯びた土師器片・陶磁器片・自然流路の上層から須恵器片・土師器片、下層からは弥生土器片が数十点出土したが全て細片のうえ摩滅しており図示できなかった。

4 小 結

今回の試掘調査では明確な人為的造構は確認しなかった。検出した自然流路は土層堆積状況や遺物出土状況から弥生前期から大小緩急の流れを繰り返し古墳期までには埋没したものと思われる。この流路から出土の遺物は流出遺物であるが、下層出土の壺は他の遺物が細片であるに対し、ほぼ形を保っての出土であることからあまり流されているとはおもわれない。安定層である第7層上からの落ち込んだ遺物とすれば本調査区周辺に弥生時代前期前半の遺跡が展開するものとおもわれ今後周辺域の調査に期待するものである。



第35図 SR-1 出土遺物実測図

道後今市遺跡 8 次調査

【参考文献】

- 松山市 1987 「松山市史料集第 2 卷 考古編 II」。
- 岡田敏彦他 1985 「道後今市遺跡」 香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐原 真 1982 「弥生土器 I」 ニュー・サイエンス社

第 V 章

道後樋又遺跡

— 2次調査 —

第V章 道後樋又遺跡2次調査

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1990（平成2）年5月18日、藤本志郎より松山市道後樋又1219-8地内における宅地開発にあたって、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター（以下、市教委・埋文センター）に提出された。当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『67 樋又遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡として知られている。

同包含地内では、これまで縄文時代後・晚期～中世までの集落関連遺構が確認されており、特に同地域は弥生時代の松山平野において、主要な集落地帯として存在していたことが、近年の調査で明らかになっている。文京遺跡（愛媛大学構内）11次調査では屋外炉3基を含む縄文時代後・晚期の遺構と遺物が確認されている。また、同6次～8次調査では、弥生中期後半～後期前半の竪穴式住居址4棟のほか、縄文晚期から中世までの包含層が確認されている〔宮本一夫 1990〕。道後城北RN B（南海放送）遺跡〔西尾幸則 1989〕では、縄文後期と縄文晚期後葉の包含層をそれぞれ検出している。また、松山大学構内道路2次調査〔梅木謙一 1991〕では、弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴式住居址16棟を含め縄文晚期から



道後櫛又遺跡 2 次調査

中世までの遺構と遺物を検出している。

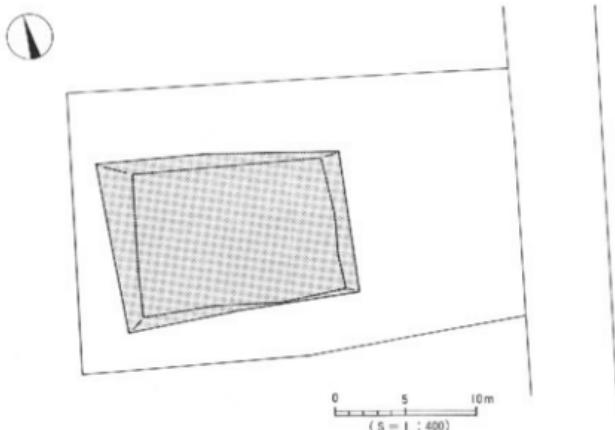
これらのことから、市教委・埋文センターは、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認するため、1990（平成2）年5月30日に試掘調査を実施した。試掘の結果、自然流路1条と、縄文土器・弥生土器・土師器を含む遺物包含層を検出した。この結果を受け、市教委・埋文センターと藤本志郎の両者は協議を行い、宅地開発により破壊される遺構に対し、記録保存のために発掘調査を実施することになった。

調査は当該地の縄文後・晩期～中世における集落環境及び古地形の解明と、縄文時代の包含層の確認を主目的とし、埋文センターが主体となり、藤本志郎・穴吹工務店の協力のもと、1991（平成3）年1月16日に開始した。

（2）調査の経緯

調査地は、調査以前は耕地整備された水田であった。調査対象面積は600m²余りである。廃土置場の都合上、最終的な発掘調査面積は260m²余りとなった。以下、調査工程を略記する。

1991（平成3）年1月16日より重機による表土剥ぎ取り作業を開始した。試掘調査の結果と、調査日程の都合上、地表下約1.5mまで掘り下げを行い、廃土は調査地外へ排出した。調査地は、試掘の後、一度埋めもどしされていたため、それらの搅乱土の除去を含め、表土剥ぎ取りに2日間を費した。



第37図 調査地測量図

調査の経過

1月18日より作業員を増員し本格的な発掘調査を開始する。初めに、調査区内に、東西に1本、南北に3本のベルトを設定した。その後、上層確認のため各グリットごとにベルト沿いに小レンチを掘り、その上で各層ごとの掘り下げをし遺構検出を順次行う。

2月16日、黄褐色粘質土上面で、遺構検出及び遺構の測量等を終了し、その後、この黄褐色粘質土内に小トレンチを掘り、土層観察を行う。その結果、粘性の違いにより、上下二層に分層でき、各々掘り下げ、遺構検出を行う。

2月25日、黄褐色粘質土の掘り下げを終了し、最下層の灰色砂礫の検出を行う。

2月28日～3月1日、出土遺物・調査用具等を撤去する（野外調査終了）。

3月1日～3月31日の間、松山市立埋蔵文化財センターにて報告書に関する整理作業を行う。

(3) 調査組織

調査地 松山市道後樋又1219-8

遺跡名 道後樋又遺跡2次調査

調査期間 野外調査 1991(平成3)年1月16日～同年2月28日

室内調査 1991(平成3)年3月1日～同年3月31日

調査面積 601.88m²

調査委託 藤本志郎

調査担当 梅木謙一・宮内慎一

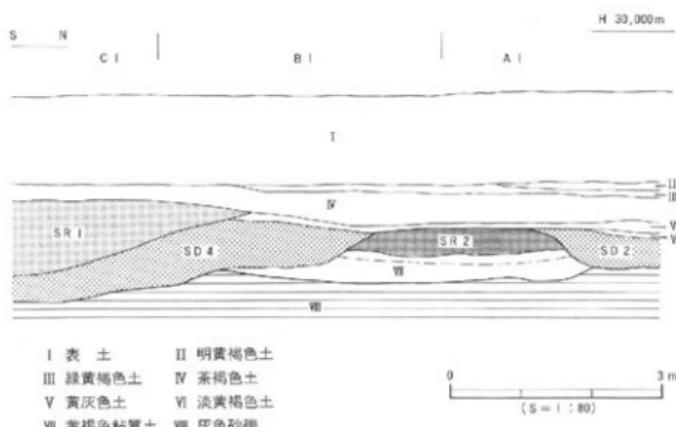
作業員 高橋 恒、工藤 賢稔、塚原 竜一、林 正則、大久保英昭、中島 宏、西原 勝二、富山 寛之、藤井 宏枝、水口あをい、白石 塑子、瀬戸 恵子、藤沢 真美、森田 晶子、株式会社 穴吹工務店

調査協力 株式会社 穴吹工務店

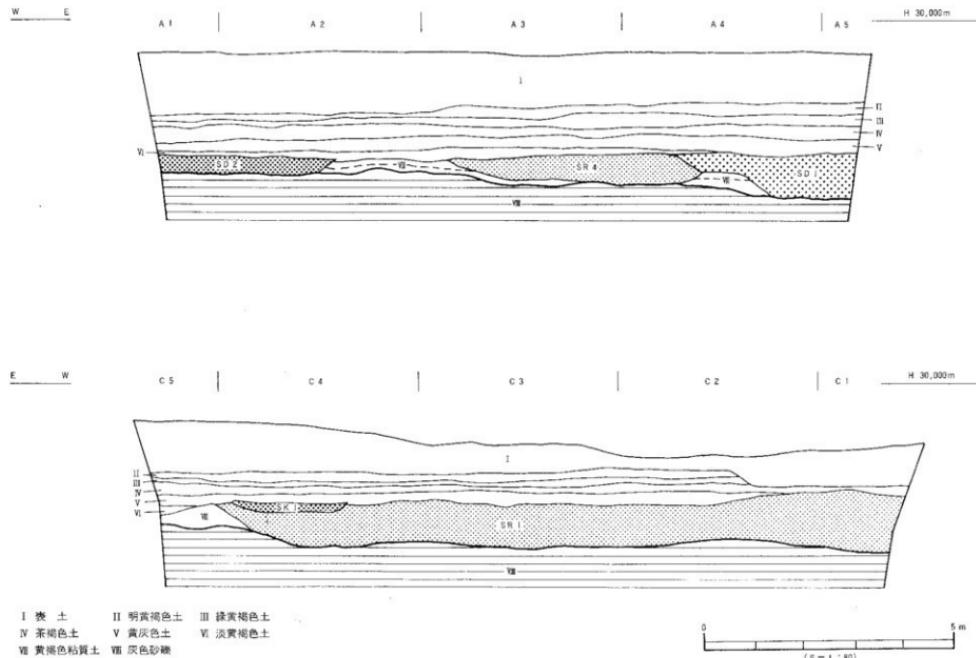
2 層 位 (第38・39図、図版21)

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層明黄褐色土、第Ⅲ層緑黄褐色土、第Ⅳ層茶褐色土、第Ⅴ層黄灰色土、第Ⅵ層淡黄褐色土、第Ⅶ層黄褐色粘質土、第Ⅷ層灰色砂礫である。

第Ⅰ層は近現代の造成工事による客土で、地表下100~120cmまで開発が行われている。第Ⅱ層は厚さ約20cmの堆積で、おそらく水田耕作に伴う耕土と考えられる。第Ⅲ層は厚さ20~25cmの堆積であるが、遺物がごく僅かであるため明瞭な時期判断はしがたい。第Ⅳ層は調査区全域でみられ、調査区北東から南西に向けて緩傾斜をなし、厚さ20~50cmの堆積で、土師器・須恵器を包含する。第Ⅴ層は、第Ⅳ層と同様の堆積をなし、厚さ10~30cmで、土師器・須恵器を包含する。第Ⅵ層は調査区南半部（自然流路SR1）を除くほぼ全域でみられ、東から西へ向けて緩傾斜をなし、弥生土器・土師器・須恵器を包含する。第Ⅶ層は、第Ⅵ層と同様、調査区南半部を除く全域でみられ、厚さ20~60cmで縄文土器・弥生土器を包含する。粘性の違いで二層に分層でき、下層は上層に較べやや砂質をおびている。第Ⅷ層は径10~20cm程度の円・角環から構成された旧石手川系の砂礫層である。南から北へ緩傾斜をなしているが、調査区南半部にて一部盛り上がって堆積している点がみられる。



第38図 西壁土層図



第39図 北壁(上) 南壁(下) 土層図

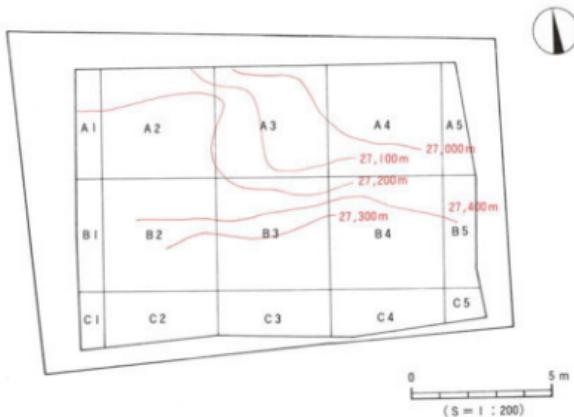
層位

造構は主に、第V・VI層中及び第VII層上面で検出した。第V層中では自然流路1条(SR1)、土壤1基(SK1)を検出した。第VI層上面では、溝1条(SD1)を、第VI層中では6c前半～8c前半の須恵器片を含む自然流路2条(SR2, SR3)、溝2条(SD2, SD3)を、第VII層上面では土壤3基、溝3条、自然流路2条、柱穴7基他を検出した。

第V・VI層中及び、VI層上面検出の造構は古墳時代～中世、第VII層上面検出の造構は縄文時代晚期～弥生時代のものと考えられる。

これらのことから、各層は出土遺物・検出造構から判断すると、第III層は中世以降、第IV層は中世段階、第V層は古代～中世、第VI層は古墳時代～古代までに堆積したものと判断される。第VII層上面の標高を測量すると、調査区南西部が最も高く、漸次、北東に向けて傾斜をなしている。

なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリットに分けた。4mグリットは、北から南へA・B・Cとし、西から東へ1・2・3・4・5として、A1・A2……C5といったグリット名を付した(第40図)。



第40図 調査地区割図・第VII層上面コンタ図

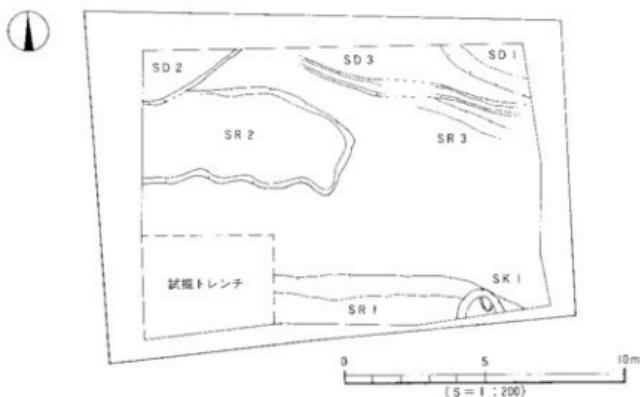
3 調査の概要（遺構と遺物）

今回の調査において確認した遺構は、土壙 4 基、溝 6 条、自然流路 5 条、柱穴 7 基他である。これらの遺構は大きく二つに分かれ、第 V・VI 層中及び VI 層上面検出の、土壙 1 基、溝 3 条、自然流路 3 条は、古墳時代～中世、第 VII 層上面検出の土壙 3 基、溝 3 条、自然流路 2 条、柱穴 7 基は、縄文時代晚期～弥生時代の遺構である。

（1）中世～古墳時代（第41図）

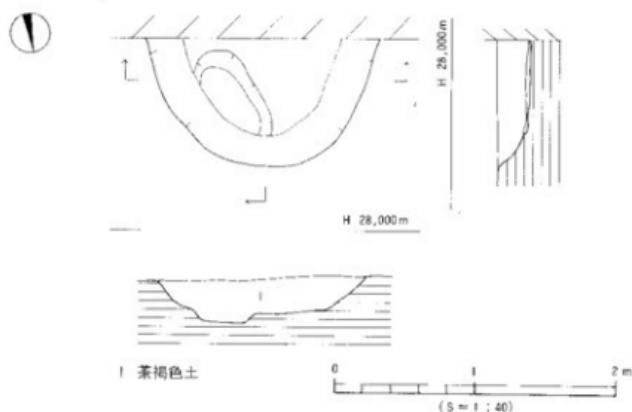
中世の遺構は、第 V 層中検出の土壙 SK 1 と流路 SR 1 があげられる。SK 1 については、遺物が僅かであるために詳細な年代付けはわからないが、層位関係等から中世段階の遺構と考えられる。また流路 SR 1 については、遺物の出土はないが、SK 1 に切られることなどから判断すると、中世段階の遺構と考えられる。

SK 1（第42図） 調査区東隅 C 4 区に位置する。南半部は調査区外へ続く。平面形は橢円形を呈すると考えられ規模は東西 1.6m、南北検出長 0.9m、深さ 15cm を測る。第 V 層中より掘りこまれており、埋土は茶褐色土である。断面逆台形状をなし、床面はほぼ平坦である。床面にて径 20×60cm、深さ 5cm 程度のビットを 1 基確認した。遺物は土師器皿片が出土している（図示せず）。



第41図 遺構配置図〔第V・VI層中, VI層上面〕

調査の概要



第42図 SK1 測量図

SR1 調査区南C 2～C 5区に位置する。西隅は試掘トレンチにより削平され、東隅の一部はSK1に切られている。第V層中の検出で、規模は検出幅2.0m、検出長9.0m、深さ80cm(検出面下)を測り、南南東から西北西に方位をとる。断面「U」字状で、埋土は、粒子の異なる灰褐色微砂であり、数回の流路の変化があったことが認められる。川床には一部酸化鉄がみられた。遺物の出土はない。

次に中世～古代の造構は、溝SD1があげられる。

SD1 調査区北東隅A 4～A 5区に位置する。第VI層上面での検出であり、深さ約40cm(検出面下)を測る。断面は「U」字状を呈し、床面には第VII層の礫が一部現れている。埋土は緑黄色土であり、遺物は土師器・須恵器小片が出土している。

他に古代～古墳時代の造構として、溝SD2、SD3、流路SR2、SR3が認められる。

SD2 調査区北西隅A 1～A 2区に位置する。第VI層中の検出であり、断面は「U」字状をなし、深さ約40cm(検出面下)を測る。床面には第VII層の礫が現れている。埋土は暗緑黄色土であり、遺物は土師器・須恵器片が数点出土している。

SD3 調査区北半A 3～A 5区に位置する。第VI層中の検出であり、規模は幅50cm、検出長9.0m、深さ8cm(検出面下)で、南東から北西に方位をとる。断面は「U」字状で床面はほぼ平坦である。埋土は濃黄褐色土である。遺物の出土はない。

道後櫛又遺跡 2 次調査

S R 2 調査区北西 A 1 ~ A 3 区に位置する。第 VI 層中の検出であり、規模は幅 3.0 m、検出長 7.0 m、深さ 20 cm (検出面下) を測る。北西隅は S D 2 に一部切られている。断面は「U」字状を呈し、床面は造構中央部がやや凹んでいる。南東から北西に方位をとる。埋土は暗灰色粗砂である。

S R 3 調査区北東 A 4 区に位置する。南半部は試掘トレンチにより削平されており、北西隅は S D 3 に切られている。第 VI 層中の検出であり、深さ約 15 cm (検出面下) を測り、埋土は明灰色砂である。遺物の出土はない。

以上の土壤・溝・流路は出土遺物が僅少でかつ限られているため性格は不明であり、かつ正確な年代の不明なものが多いが、それらの検出面の層位関係や出土遺物等から、S K 1、S R 1 は中世、S D 1 は古代～中世、S D 2・3、S R 2・3 は古代～古墳時代の造構と考える。

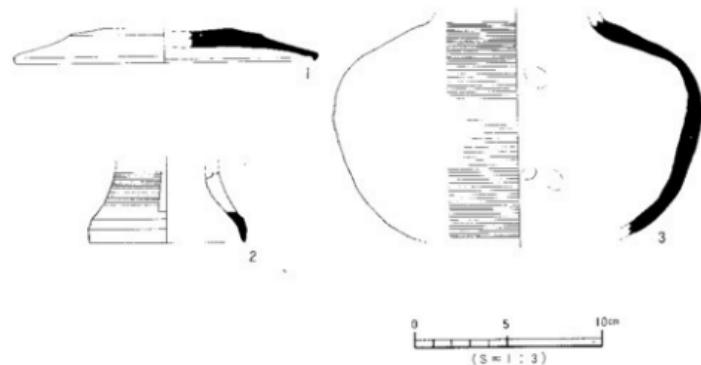
S R 2 出土遺物 (第43図 1 ~ 3、図版24)

1 は、かえりをもたない須恵器环蓋である。飛鳥 IV (7世紀第4四半期) 以降の特徴を示す。

2 は、須恵器高環の脚部である。「ハ」字状に外反し、端部付近で段をなし、裾部は甘く内傾する。脚部にはスカシがみられる。

3 は、須恵器壺の胴部片である。

これら須恵器から判断すると、S R 2 は 6 世紀～8 世紀段階の造構であるといえよう。



第43図 SR2 出土遺物実測図

調査の概要

(2) 弥生時代～縄文時代 (第44図)

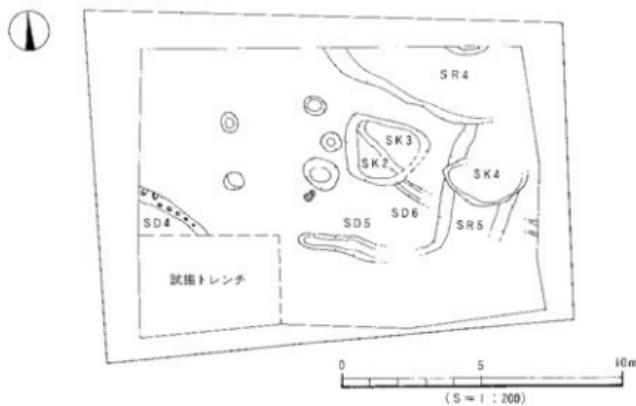
すべて第Ⅷ層上面での検出であり、土壙3基、溝3条、自然流路2条、柱穴7基他である。遺物の出土が僅かであり、性格は不明である。

SD4 (図版23) 調査区西B1～B2区に位置する。造構南側は試掘トレンチに削平され、なおかつ流路S R 1に切られている。断面形は「U」字状を呈し、埋土は明灰色砂礫(3～5cm大の円礫)である。床面には一部第Ⅷ層灰色砂礫が現れている。造構の壁面に数基のピット状造構を検出した。全てが壁面に沿ってほぼ垂直に掘り込まれており、何らかの目的を持った棚列を形成していた造構ではないかと考えられる。

SD5 調査区中央B3区に位置する。東側は試掘トレンチにより削平されている。規模は幅0.6m、検出長3.6m、深さ6cm(検出面下)で、南東から北西に方位をとる。断面形は「U」字状で、埋土は暗灰褐色土である。遺物の出土はない。

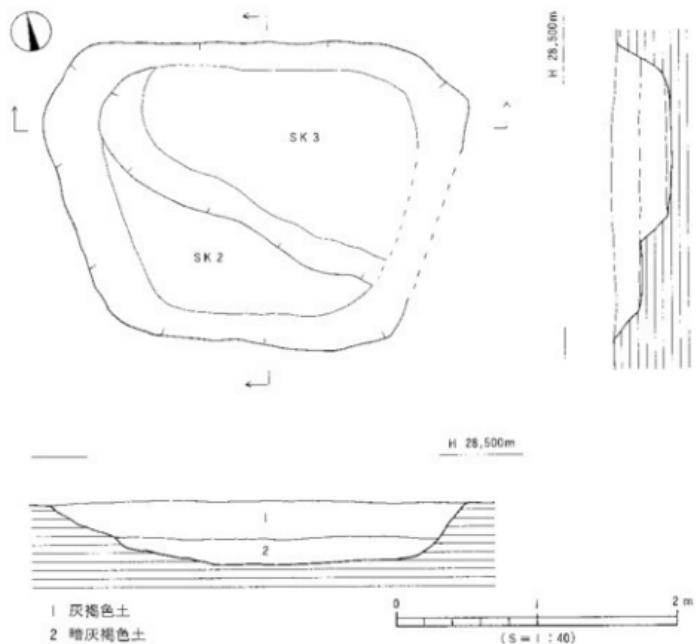
SD6 調査区東B4～B5区に位置する。造構中央部は試掘トレンチにより削平され、西端はSK2に切られ、東端は調査区外へ続く。規模は、幅0.4m、検出長5.0m、深さ8cm(検出面下)を測り、南東から北西に方位をとる。断面「U」字状で、埋土は暗灰褐色土である。遺物の出土はない。

SR4 調査区北東A3～A4区に位置する。規模は、幅2.4m、検出長6.5m、深さ25cm(検出面下)を測り、東から西に方位をとる。断面形は「U」字状を呈する。埋土は大きく二つの礫層(3～5cm大の円・角礫)が観察され、数回の流路の変更が認められる。埋土下層部より弥生時代中期の壺や高环が出土している。他に床面上にて径40cm大の角礫がみられた



第44図 造構配置図〔第Ⅷ層上面〕

道後桶又遺跡 2 次調査



第45図 SK2・SK3 測量図

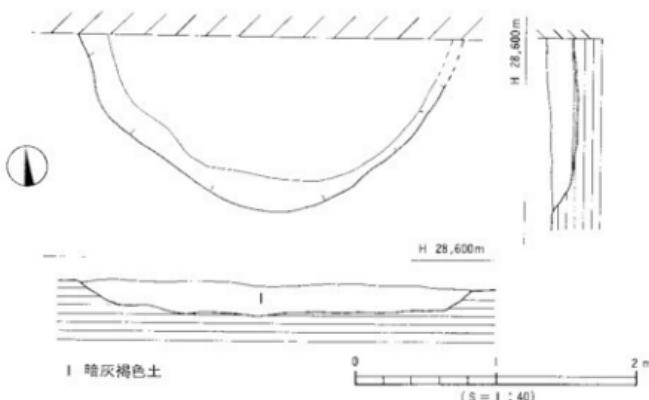
が、その性格はわからない。

S R 5 調査区東A 5～B 4区に位置する。規模は幅2.5m、検出長4.8m、深さ40cm（検出面下）を測る。南西から北東に方位をとる。中央部はSK4に切られ、北端はSR4に切られる。南側はSR1に切られている。断面形は「U」字状を呈し、堆土は暗灰色砂礫である。床面付近から縄文晩期後葉の浅鉢が出土している。

SK2 (第45図) 調査区中央A 3～B 4区に位置する。平面形は不整橢円形を呈し、規模は東西3.0m、南北2.5m、深さ20cm（検出面下）を測る。南東隅はSD6を切っている。断面形は逆台形状を呈し、床面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色土である。

SK3 (第45図) SK2を掘り下げた床面での検出である。平面形は不整橢円形を呈し、規模は幅1.0m、長さ2.0m、深さ約20cmを測る。断面形は舟底状を呈し、埋土は明灰褐色土である。遺物の出土はない。

調査の概要



第46図 SK 4 測量図

SK 4 (第46図、図版22) 調査区東B 4区に位置する。北半部は未検出であるが、平面形は不整の楕円形を呈すると考えられ、規模は東西2.8m、南北検出長1.2m、深さ15cmを測る。流路 S R 5 を切っている。断面形は舟底状を呈し、床面は S R 5 の礫が現れている。埋土は暗灰褐色土で、明灰色砂 (S R 3 埋土) が覆う。遺物の出土はない。

S R 4 出土遺物 (第47図 4 ~ 7、図版25)

4は壺形土器口縁部片である。長頸壺で、口縁外反部内面に断面三角形の凸帯を貼り付ける。弥生時代前期後葉～中期前葉。5は壺形土器口縁部小片である。口縁端部は貼り付けにより下方に拡張する。端面には、ヘラ状工具による斜格子目文を施す。弥生時代中期前～中葉。6は高環形土器脚部片である。連続成形技法であり、環底部の充填を看取る。弥生時代中期中葉～後期前半。

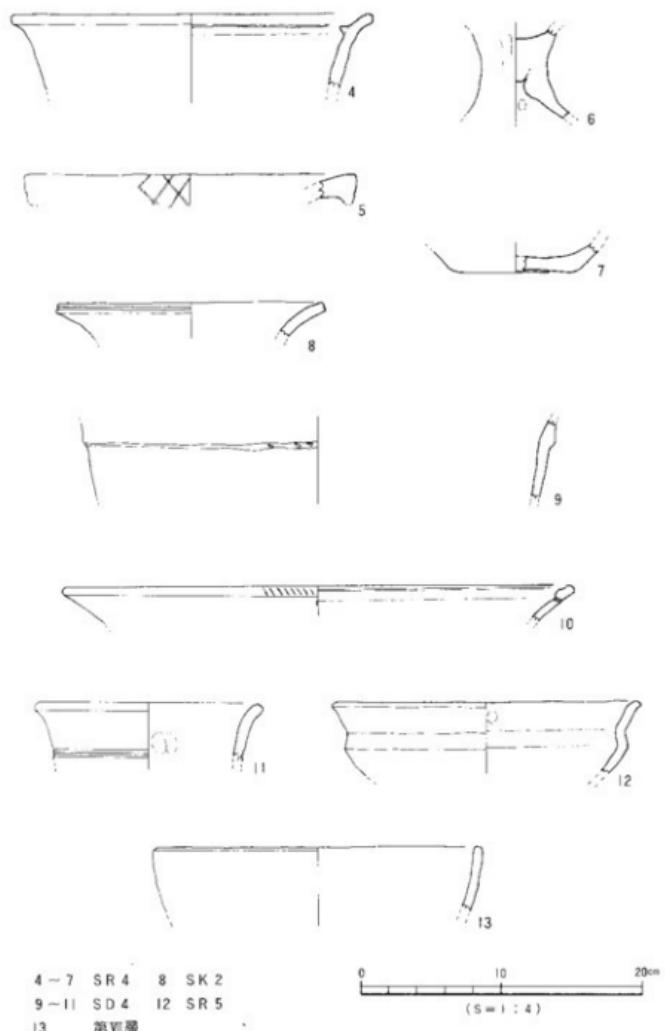
S K 2 出土遺物 (第47図 8、図版25)

8は壺形土器口縁部小片である。外反する口縁部は、端面に沈線文を1条施す。弥生時代前期か (小片にて確認できず)。

S D 4 出土遺物 (第47図 9 ~ 11、図版26)

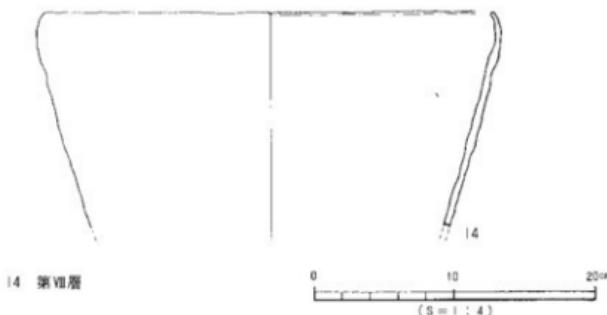
9は縄文時代晩期凸帯文系の深鉢片である。口縁端部をわずかに欠く。幅広の凸帯には下端部に三角形の刻目を施す。10は縄文時代晩期の深鉢片である。口縁内面に丸い凸帯をもち、端面には刻目を施す。小円孔を1ヶ看取する。11は壺形土器口縁部小片である。頸部に沈線文を2条施す。

道後掘又造跡 2 次調査



第47図 出土遺物実測図(I)

小 結



第48図 出土遺物実測図(2)

S R 5 出土遺物 (第47図12、図版26)

12は浅鉢形土器小片である。屈曲する体部をもつ。縄文時代晩期後半～。

第VII層出土遺物 (第47図13、第48図14、図版26)

13は粗製の深鉢形土器片である。内湾して立ち上がる口縁部。14は深鉢形土器片である。

外面は板状工具による条痕が看取される。縄文時代後期。

以上の流路や溝は、出土遺物が限られているため正確な年代の不明であるものが多いが、それらの検出面や切り合い関係、出土遺物から、S R 5 は縄文時代晩期後半以降、S D 4 が弥生時代前期以降、S R 4・S D 5 が弥生時代中期後葉以降、S D 6 が弥生中期末以前のものと考えられる。また土壙については、S K 2 は弥生時代中期末以降、S K 3 は弥生時代中期末以前、S K 4 は縄文時代晩期後半以降の造構と考えられる。

(3) その他の造構と遺物

本調査において確認された柱穴は7基である。いずれも第VII層上面での検出である。柱穴中からの遺物の出土はほとんどなく、正確な年代は判断しがたい。

4 小 結

今回の調査において、土壙4基、溝6条、自然流路5条、柱穴7基他を確認することができた。中世～古墳時代の造構と、弥生時代～縄文時代晩期の造構に大別できるものである。特に本調査では、流路や溝が多数検出されている。これらは、第VI層堆積以前と以降、すなわち、縄文晩期後葉～弥生時代中期後半以前と、古墳時代～中世までの2段階に区分される造構である。前者は、S R 1、S R 2、S R 3、S D 1、S D 2、S D 3、後者は、S R 4、S R 5、S D 4、S D 5、S D 6である。近隣の文京遺跡（愛媛大学）8次調査においても

同様に、数条の自然流路が発見されていることから、本調査地付近が、舌状台地から谷部へ落ちる箇所にあたっており、そのために自然流路等が流れやすい地形環境にあったためであろうと考えられる。

また、道後城北 RNB（南海放送）遺跡や、松山大学構内遺跡1次調査地にて、中世・古墳・弥生・縄文の各時代の遺物包含層が検出されている。本調査地検出の第IV・V・VI層は、南海放送遺跡の第5・6層に、1次調査地の12・13・14層に相当するものと考えられ、本調査地周辺では中世と古墳時代後期以降の遺物包含層が安定して堆積していたものと推測される。しかしながら、本調査地では弥生時代の遺物包含層が单一で検出されなかったことは、前述した旧地形のために、遺物包含層の堆積が困難であったことに加え、第VI層堆積以前に、本調査地が造成され、遺物包含層が消失した可能性も考えられる。しかしながら、本調査の結果からだけでは判断しがたい。

次に、特筆すべきは、第VII層黄褐色粘質土中からの縄文時代晩期の遺物の出土である。第VII層は約60cmの堆積であるが、その粘性の違いにより2層に分層でき、下層部は上層部に較べ、やや砂質を帯びている。今回出土した遺物はこの上層部中からのものである。南海放送遺跡においては、この黄褐色粘質土中より、縄文後期と晩期後葉の遺物が、それぞれ層を上下にして検出されている。今回の調査においては、残念ながら下層部からの遺物の出土はみられず、層位上、この黄褐色粘質土を明瞭な時期区分するまでに至らなかった。

また、黄褐色粘質土下に、調査区ほぼ全域で第VIII層灰色砂礫が検出された。既に、平井幸弘氏（愛媛大学）により、この灰色砂礫を、最終水期最盛期頃の石手川系の堆植物である「下部疊層」との指摘がある。本調査地南半部にて、この疊層が盛り上がりっている部分が検出されたが、これらのこととは、今後の道後城北地区での、古地形復元を考えるうえでは、好資料となるものと思われる。

【参考文献】

- 宮本一夫 1990 「文京遺跡第8・9・11次調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告書II
愛媛大学法文学部考古学研究室・愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 西尾幸則 1989 「道後城北RNB（南海放送）遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』
- 梅木謙一 1991 「松山大学構内遺跡—2次調査」松山市文化財調査報告書20
- 愛媛県 1986 「愛媛県史 資料編 考古」
- 松山市 1987 「松山市史料集 考古編II」
- 古代学協会四国支部 1988 「松山道後城北の弥生遺跡をめぐって」シンポジウム資料

造構・遺物一覧

造構・遺物一覧 (造構一覧: 宮内慎一、遺物観察表: 梅木謙一・水口あをい)

- (1) 以下の表は、本調査検出の造構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 造構の一覧表中の出土遺物欄の略号について。
例) 縄文→縄文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。
- (3) 遺物観察表の各記載について。
 - 法量欄 () : 復元推定値
 - 形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。 例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾→裾部、胴底→胴部～底部。
 - 胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。 例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。 () 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。 例) 砂・長 (1~4) 多→「1~4 mm大の砂粒・長石を多く含む」である。 焼成欄の略記について。 ○→良好、 ◎→良、 △→不良。

●表4 土壌一覧

土壌 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土 (シルト)	出土 遺物	備 考	時 期
1	C4	複 合 形	逆 台 形	1.60×0.90×0.15	茶褐色土	土 壤	SR1を切る	中 世
2	A3-B1	不整地凹形	逆 台 形	3.00×2.50×0.20	灰褐色土	灰 生	SD1を切る	弥生中期以降
3	A3-B4	不整地凹形	舟 底	2.00×1.00×0.20	明灰褐色土		SK2床面検出	弥生中期以前
4	B4	不整地凹形	舟 底	2.80×1.20×0.15	暗灰褐色土		SR3を切る	縄文後期以降

●表5 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土 遺物	備 考	時 期
1	A4-A5	U 字 状	4.00×1.80×0.40	暗灰色土	土 壤・須 惠		古 代 以 後
2	A1-A2	U 字 状	4.00×1.60×0.40	暗灰色土	土 壤・須 惠	SR2を切る	古 代 以 後
3	A3-A5	U 字 状	9.00×0.50×0.05	暗灰色土		SR3を切る	古 代 以 後
4	B1-B2	U 字 状	3.30×0.50×0.40	明灰色砂砾	縄 文・弥 生	SR1に切られる	弥生初期以降
5	B3	U 字 状	3.00×0.60×0.05	暗灰色土			弥生中期以降
6	B4-B5	U 字 状	5.00×0.40×0.05	暗灰色土		SK2に切られる	弥生中期以前

●表6 自然流路一覧

(1)

流路 (SR)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土 遺物	備 考	時 期
1	C2-C5	U 字 状	9.00×2.00×0.05	灰褐色粗砂		SK1に切られる	中 世
2	A1-B3	U 字 状	7.00×3.00×0.20	暗灰色粗砂	灰 生	SD2に切られる	古 壤 以 後

道後橋又遺跡 2 次調査

(2)

流路 (SR)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(=)	埋 土	出 土 遺 物	備 考	時 期
3	A 4	U字状	3.60×0.60×0.15	暗灰色沙		SD 3に切られる。	古墳時代
4	A 3～A 4	U字状	6.50×2.40×0.25	灰褐色砂	朱 粉	SK 5を切る。 發生中期以降	
5	A 5～B 4	U字状	4.80×2.50×0.40	暗灰色砂	朱 粉	SK 4に切られる。 漢文化期以降	

表 7 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (色)	胎 土 成	備 考	図版
				外 面	内 面				
1	环型	口径(16.7) 高さ 3.9	扁平な天井部からU字部へならだらに下がり、口縁部は下方へ微曲。埴部は丸い。	①一回転ヘア削り 3 ②凹部カキ目 ③一回転ナデ	④回転ナデ ⑤一回転ナデ	灰褐色 ○	素烧 ○	SD 2	24
2	高杯	底径(8.3) 高さ 3.7	ハの字状で外反する脚部で脚部付近で段をなし。底部は内傾。スカッシュあり。	⑥半 ⑦一回転ナデ	同転ナデ	灰 色 ○	素烧 ○	SD 2	24
3	盃	側面(19.6) 底径 11.4	扁平な半球形の体部からなだらかに脚部に連する。底部丸い。	⑧一回転カキ目 同転ナデ	同転ナデ (指輪压痕)	青灰色 ○	素烧 ○	SD 2 自然釉	24
4	盃	口径(24.8)	口縁部は外反し、端部は丸い。口縁外反部内面に斜面で角部の凸部の付着	⑨一ココナデ ⑩一窓減のため不明	⑪一ココナデ ⑫一窓減のため不明	石・長(1~4) 金 ○	素烧 ○	SD 4	25
5	盃	口径(23.0)	口縁部は下方に屈曲し、底部は丸付けより上方に直通。口縁部に付着子文あり。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~5) ○	素烧 ○	SD 4	25
6	高杯	残高 6.5	版く外反する耳杯の脚部。脚部は丸く、口縁部は光滑によ。	⑬一 ナデ ⑭一 傾溝のため不明	ナデ	暗褐色 ○	石・長(1~4) 金 ○	SD 4	25
7	盃	底径 (9.0)	わずかに上げ底を呈する底部。	窓減のため不明	窓減のため不明	黄褐色 ○	石・長(1~3) 金 ○	SD 4 素烧	25
8	盃	口径(18.2)	口縁部は外反し、口縁端面には1条の沈擦文を施す。	窓減のため不明	窓減のため不明	黄褐色 ○	石・長(1~3) 金 ○	SD 2	25
9	深鉢	残高 5.2	凸面文様の深鉢。凸唇上に表面V字形の刻目を施す。底部部欠損。	ヨコナデ	ナデ	素褐色 ○	石・長(1~3) 金 ○	SD 4	26
10	深鉢	口径(35.4)	口縁部内面に丸みのある凸唇を付与し、表面に刻目を施す。後1mm大の円孔あり。	⑮一 ナデ ⑯一ヨコナデ	ナデ	素褐色 ○	石・長(1~3) 金 ○	SD 4	26
11	盃	口径(16.2)	外反する口縁部。縁部は丸い。底部にささの沈擦文を施す。	⑰一 ナデ ⑱一ヨコナデ	ヨコナデ	素褐色 ○	石・長(1~2) 金 ○	SD 4	26
12	浅鉢	口径(21.2)	圓錐する体部をもち、口縁部付近でわずかに外反する。	⑲一 ナデ ⑳一ヨコナデ	ナデ	暗褐色 ○	石・長(1~3) 金 ○	SK 5	26
13	深鉢	口径(23.0)	口縁部は内凹して立ちあがり、縁部はわずかに丸みをもつ。	㉑一 ナデ ㉒一ヨコナデ ㉓ヨコナデ	ヨコナデ (指輪压痕)	素褐色 ○	石・長(1~4) 金 ○	SD 4	26
14	深鉢	口径(31.2)	腹型は蓮瓣的に立ちあがり。口縁部に内方へ折曲する。縁部は丸い。	㉔一 ヨコナデ ㉕一 条幅	㉖一ヨコナデ ㉗一窓減のため不明	暗褐色 ○	石・長(1~3) 金 ○	SD 4 素烧	26

第 VI 章

モワイ グー ホン プラ
祝谷本村遺跡

第VI章 祝谷本村遺跡

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

1989(平成元)年12月12日、株式会社ミツワ都市開発より松山市祝谷5丁目745-1、753-2地内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター（以下、市教委・埋文センター）に提出された。当該地は、松山市の指定する『55道後北代遺物包含地』内にあたり、周知の遺跡として知られている。同包含地内では、これまでに弥生時代においては、前期末から中期にかけての遺物を出土している上居窓遺跡や、アイリ式土器で知られるアイリ遺跡などが確認されている。周辺地域においては、弥生時代中期中葉の遺物を大量に含む包含層と、平形銅劍1振を検出している祝谷六丁場遺跡〔宮崎泰好 1991〕や、弥生中期～古墳時代の集落関連遺構を検出している祝谷アイリ遺跡〔梅木謙一 1992〕などが確認されている。その他にも、旧石器時代から近世に至る長い間の埋蔵文化財が数多く包含されている地域である。

これらのことから、市教委・埋文センターは当該地における埋蔵文化財の有無と、さらに遺跡の範囲やその性格を確認するために、1990(平成2)年2月に試掘調査を実施した。試掘の結果、土壌1基、柱穴4基と弥生土器・須恵器を含む遺物包含層を検出した。この結果を受け、市教委・埋文センターとミツワ都市開発の両者は協議を行い、宅地開発により破壊される遺構・遺物に対し、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。調査は、当該地の弥生～古墳時代における集落構造及び古地形の解明を主目的とし、埋文センターが主体となり、ミツワ都市開発の協力のもと1990(平成2)年7月6日に開始した。



第49図 調査地位置図

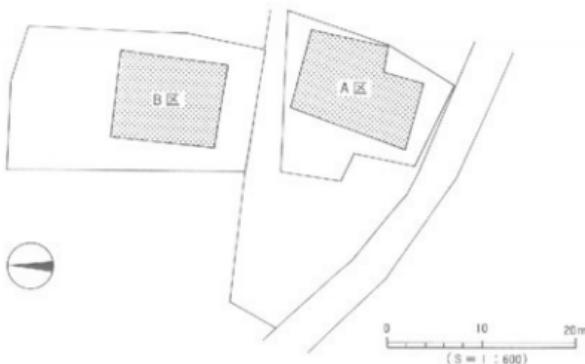
(S=1:5,000)

(2) 調査の経緯

調査地は、近現代の造成によって2段カットされていたために、調査地南半部の低い地区をA区、北半部をB区とし、分区して調査を行った。調査対象面積は約580m²であるが、調査地のすぐ側に民家や道路などがあったために、最終的な発掘調査面積はA・B両区あわせて300m²余りとなった。以下、調査の工程を略記する。

1990（平成2）年7月11日、A区の調査を開始した。重機による表土剥ぎ取りに2日間を費やした。7月13日より作業員を増員し本格的な調査を開始する。深掘りによる土層観察の結果、2層の遺物包含層を検出した。そのうえで、各層ごとに掘り下げをし、遺構検出を順次行った。調査の結果、土壌状遺構や溝状遺構、柱穴等が多数検出された。8月19日、A区の調査を終了し、8月20日からB区の調査を開始した。A区同様、表土剥ぎ取り、場外搬出をした後、深掘りによる土層観察をし、A区との土層を照合したが、B区については近現代の造成等のために、A区の遺構検出面及び遺物包含層はすでに削平されており、遺構・遺物は検出されなかった。9月5日、A・B両区の調査を終了し、出土遺物・調査用具等を撤去する（野外調査終了）。

9月10日～10月12までの間、松山市立埋蔵文化財センターにて報告書に関する整理作業を行う。



第50図 調査地測量図

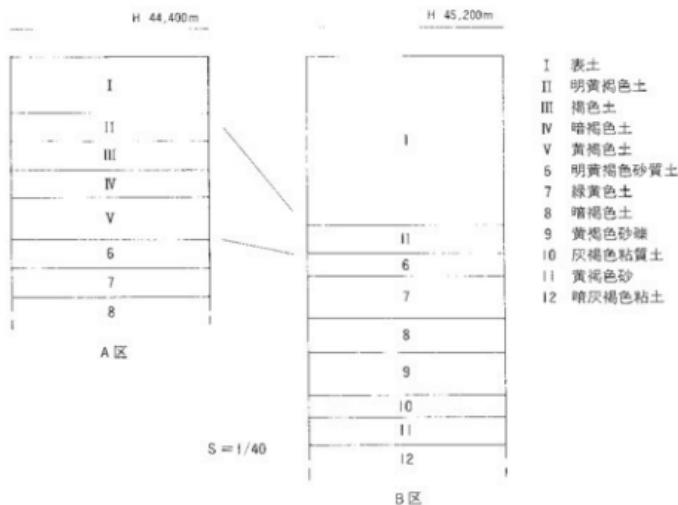
層位

(3) 調査組織

調査地 松山市祝谷5丁目745-1, 753-2
 遺跡名 祝谷本村遺跡
 調査期間 野外調査 1990(平成2)年7月6日～同年9月5日
 屋内調査 1990(平成2)年9月10日～同年10月12日
 調査面積 578.17m²
 調査委託 株式会社 ミツワ都市開発 代表 佐伯敦義
 調査担当 梅木謙一、宮内慎一
 作業員 高橋 桓、工藤 賢徳、扶川 博、亀山 健一、岸 武弘、亀山 泰昌、
 山本 圭、久井 勇志、山崎 司、黒田 正機、林 亨、松本 剛、
 武田 和高、水口あをい、森山 利恵、松本美知子、黒田 令子、西尾 得子、
 正岡みどり、大西 朋子、白石 望子、瀬戸 恵子、森井 宏枝、藤沢 真美、
 森田 晶子

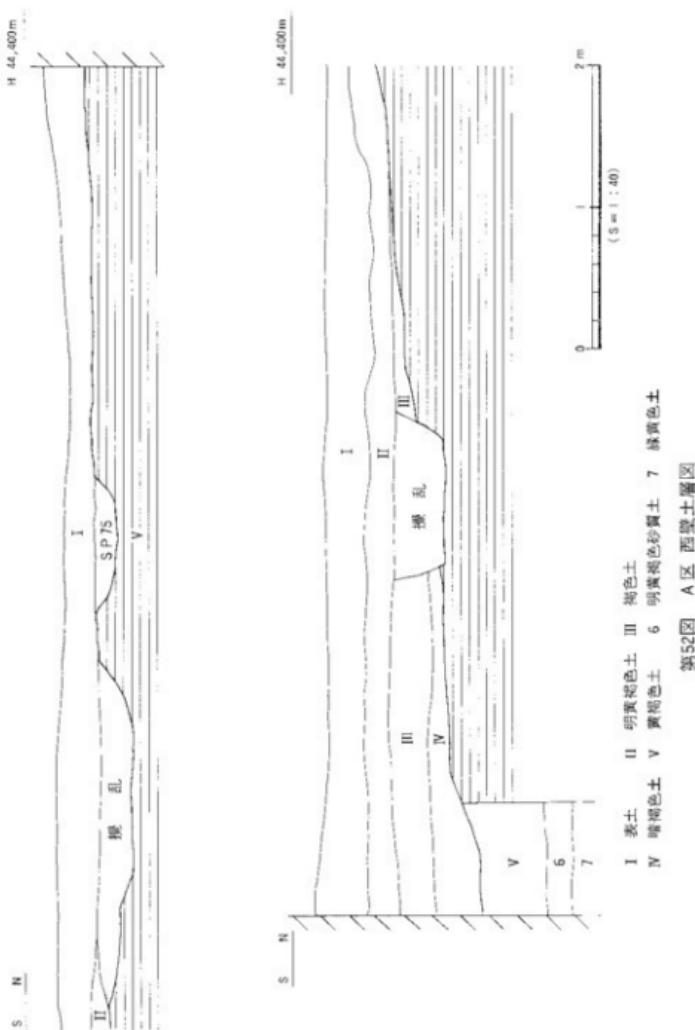
2 層位 (第51・52図)

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層明黄褐色土、第Ⅲ層褐色土、第Ⅳ層暗褐色土、



第51図 基本層位図

祝谷本村道路



層 位

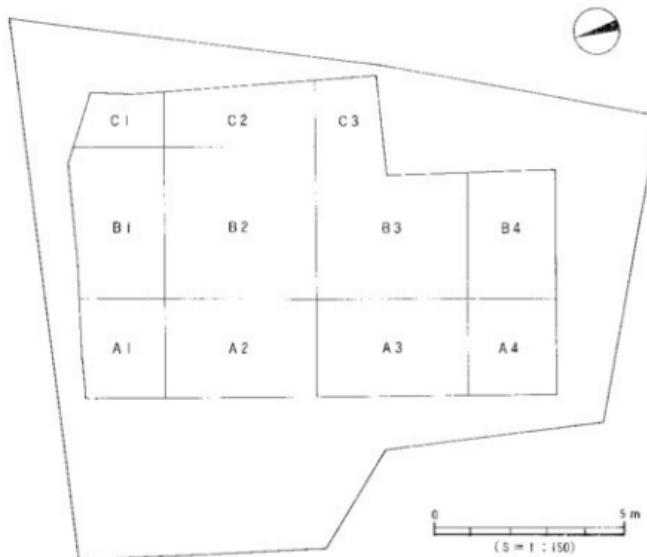
第V層黄褐色土である。第I・第II層は、近現代の造成工事による客土で地表下30~60cmまで開発が行われている。第III層~V層はA区のみの検出であり、第III層褐色土は調査区南半部にみられ、北から南に向けて傾斜をなし、厚さ20~25cmの堆積で、須恵器・上師器を包含する。第IV層暗褐色土も、第III層とは同様に調査区南半部のみにみられ、厚さ20~30cmの堆積で、弥生土器・須恵器・上師器を包含する。第V層黄褐色土は無遺物層である。

また、第V層上面の標高を測量すると、調査地の北から南にむけて傾斜をなしており、その比高差は約80cmを測る。

なお、調査にあたり、調査区内を4m四方のグリッドに分けた。呼称名は第53図に示す。

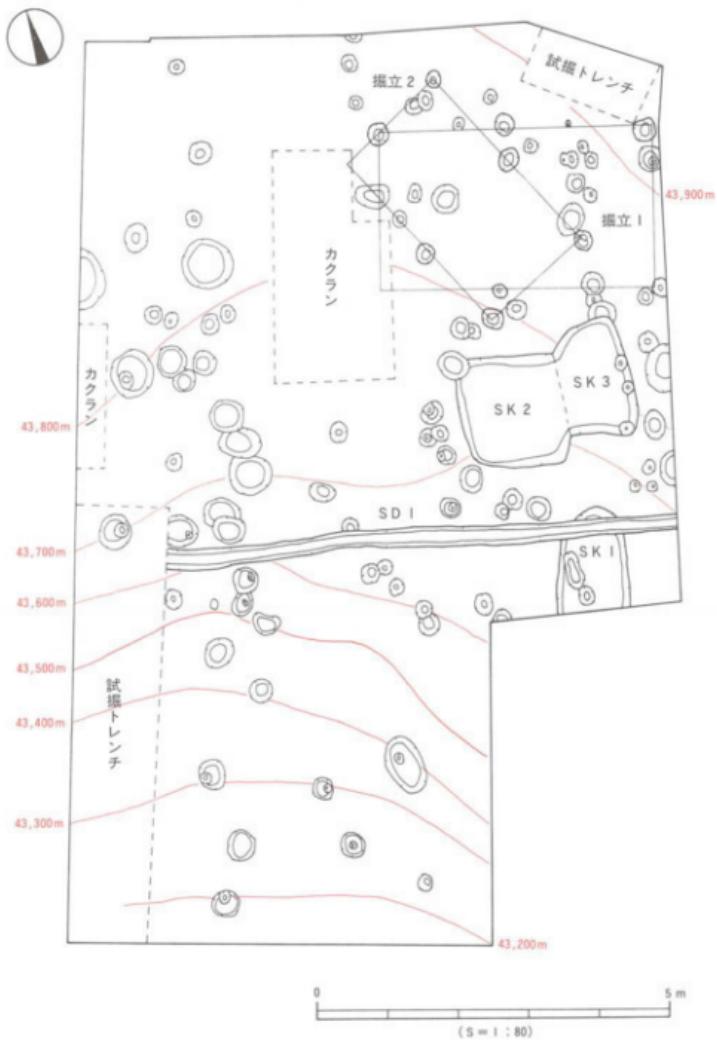
遺構は、第V層上面で検出した(第54図)。掘立柱建物址2棟、土壙3基、溝状遺構1条、柱穴104基(掘立柱建物柱穴10基を含む)他である。

これらのことから各層は出土遺物(検出遺構)等から判断すると、第III層は中世段階、第IV層は古代までに堆積したものと判断される。



第53図 調査地区割図

祝谷本村遺跡



第54図 遺構配置図

3 調査の概要（遺構と遺物）

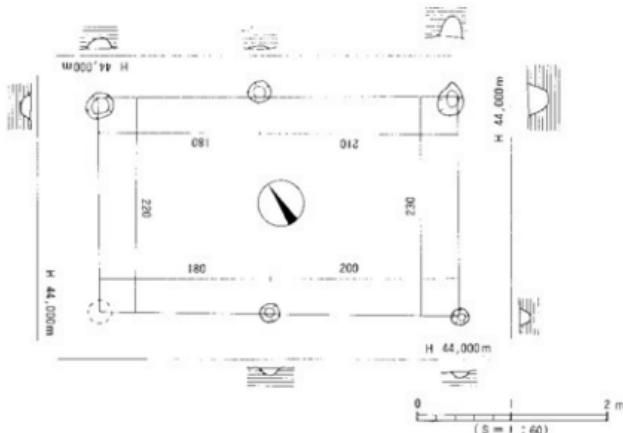
(1) 中世の遺構と遺物

中世の遺構は、掘立柱建物址2棟、土壙2基、溝状遺構1条を確認した。すべて第V層上面での検出である。

〔1〕掘立柱建物址

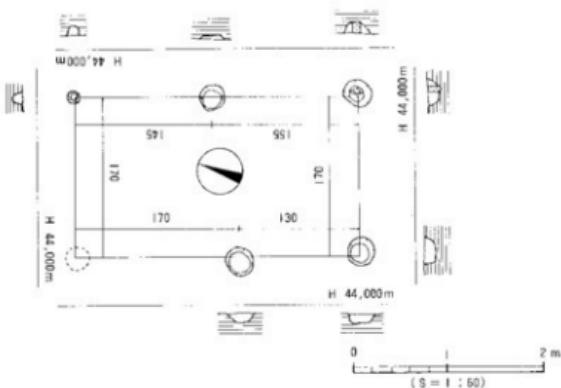
1号掘立柱建物址（第55図） 調査区北東B1～C2区に位置する。1×2間の建物址で、ほぼ東西にその主軸をとる。南西隅は擾乱により削平されている。梁行2.2m、桁行3.7mを測る東西棟で、各柱穴は円～楕円形を呈し、規模は径25～40cm、深さ5～20cmを測り、柱穴埋土は褐色土である。柱穴内より、土師器片が出土している。

2号掘立柱建物址（第56図） 調査区北東B1～C2区に位置する。北西～南東に主軸をとる1×2間の建物址である。西隅は擾乱により削平されている。梁行1.6m、桁行3.0mを測り、各柱穴は、円～楕円形を呈し、規模は径20～35cm、深さ5～15cmを測る。柱穴埋土は1号掘立と同様の褐色土である。柱穴内より、土師器・須恵器片が出土している。



第55図 1号掘立柱建物測量図

祝谷本村遺跡



第56図 2号掘立柱建物測量図

[2] 土壙

SK 2、SK 3 があげられる（第57図、図版29）。切り合い関係から SK 2 が SK 3 に先行する。

SK 2 調査区東側B 2～C 3区に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は、東西1.6m、南北1.5m、深さ35cm（検出面下）を測る。断面形は逆台形状をなし、床面は比較的平坦である。埋土は褐色土單一層である。遺物は須恵器片の他、土師器羽釜片や小皿片が出上している。土壙の性格は不明である。第57図1は土師器羽釜である。断面三角形の凸唇を口縁に貼り、内溝するものである。

時期：出土遺物から、中世後期、おそらく13世紀～14世紀代の遺構と考えられる。

SK 3 調査区東側C 3区に位置し、SK 2 に切られている。平面形は隅丸方形をなし、規模は、東西1.0m、南北1.6m、深さ40cm（検出面下）を測る。断面形は舟底状をなし、床面は中央部がやや凹んでいる。埋土は SK 1 に較べ、やや粘質の褐色土である。土壙の性格は不明である。

時期：遺物が僅かであるため、時期の判定は難しいが、SK 2 に切られることから、13世紀以前、古代までの遺構と考えられる。

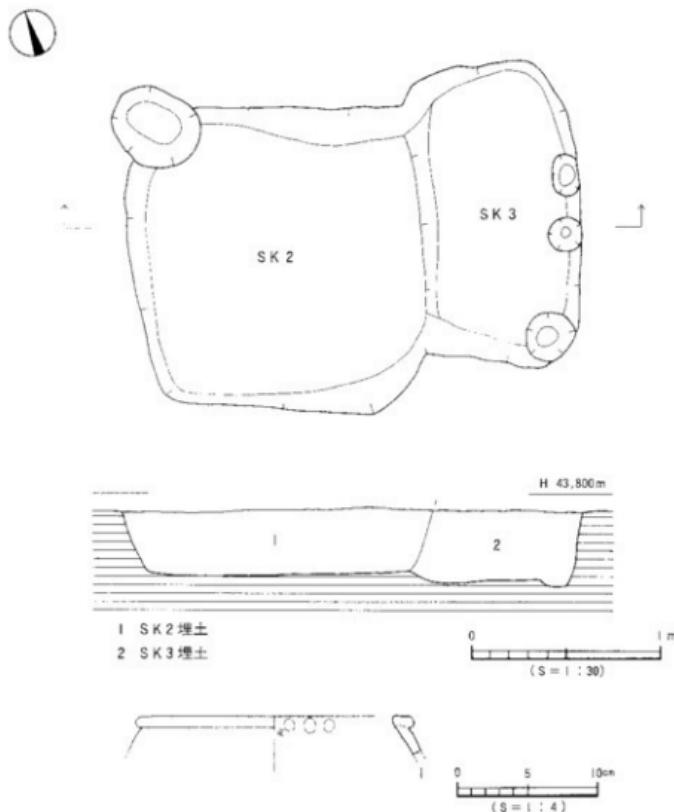
[3] 溝

SD 1 調査区中央A 1～A 3区に位置する。断面「U」字状で、規模は幅20cm、検出長7.0m、深さ5～7cm（検出面下）を測る。東から西に向けてわずかに傾斜をなす（比高差約3

調査の概要

(cm)。西隅はトレンチ及び擾乱により削平されており、東隅は、SK 1を切っている。溝の性格は不明である。土層観察により、本来は第Ⅲ層中から掘り込まれたものであり、埋土は褐色土である。

時期：埋土中より上師器小圓片が数点出土しているが、年代の特定は難しく、中世段階の遺構と考える。



第57図 SK2・SK3測量図・SK2出土遺物実測図

(2) 古代～古墳時代の遺構と遺物

この時代の遺構は土壙 SK 1 に限られる。

SK 1 (第58図、図版28) 調査区東側C 3区に位置する。南半部は調査区外へ続き、北半部は一部SD 1に切られている。平面形は橢円形を呈すると考えられ、規模は、東西90cm、南北検出長1.25m、深さ18cm(検出面下)を測る。断面形は逆古形状をなし、床面は平坦である。埋土は第Ⅳ層と同様の暗褐色土である。出土遺物には、弦文土器・須恵器が含まれていたが、土壙の性格は不明である。

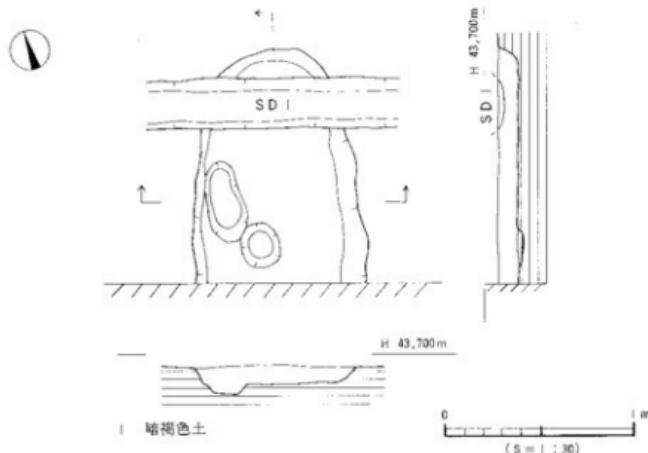
時期：層位関係や出土遺物から、SK 1は古代～古墳時代の遺構と考えられる。

(3) その他の遺構と遺物

本調査において確認した柱穴は104基(掘立柱建物柱穴10基を含む)である。いずれも第Ⅳ層上面での検出である。埋土の違いにより、少なくとも2つのグループに分けられるが、柱穴内からの遺物が僅かであるため、明確な時期は判断しがたい。

第III層出土遺物 (第59図2～9、図版30)

2・3は須恵器环蓋、4～6は环身である。2は口縁部がわずかに外反し、口縁部と天井部を区切る稜はぶい。3は、中央部が突出するつまみ、4は高台が平坦面で接続する环身である。2・3・5は6世紀前半、6は6世紀後半、4は8世紀代に比定されよう。7～9



第58図 SK 1 測量図

調査の概要

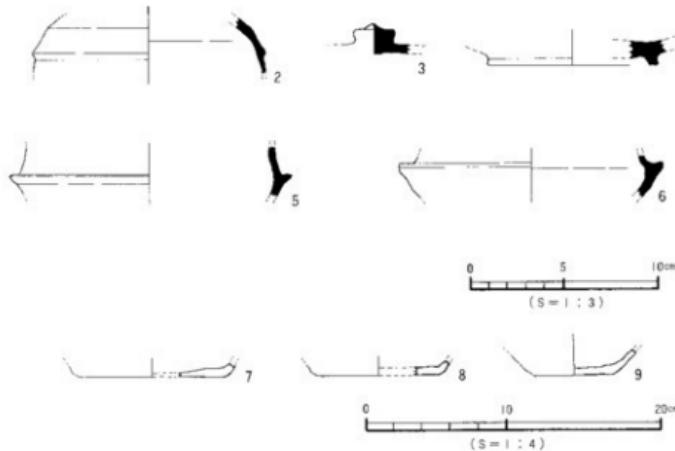
は上師器皿である。全てに底部糸切り痕が顯著にみられる。

第IV層出土遺物 (第60図10~19、図版29・31・32)

10~16は変形土器である。10・11はやや胴の張るもので、10は断面三角形の口縁が貼付され、端部に刻目を施す。外面には、櫛状工具による5条の沈線下に、ヘラ状工具による刺突文を上下に施し、刺突と刺突の間に山形文を順次くり返す。11・12は口縁部が逆「L」字状を呈し、端部は丸く收められている。11は、外面に縱方向の荒い刷毛目調整後、横ないし斜め方向のヘラ磨きを施し、内面には横方向のヘラ磨きを施す。12は、外面に縱方向の荒い刷毛目調整後、横方向のヘラ磨きを施す。13は、断面三角形の貼付口縁で、端部に断面「V」字状の刻目を施す。外面は全体に縱方向の刷毛目調整後、頸部は横方向、胴部は縱方向の丁寧なヘラ磨きを施す。これらは弥生中期初頭段階の特徴を示している。

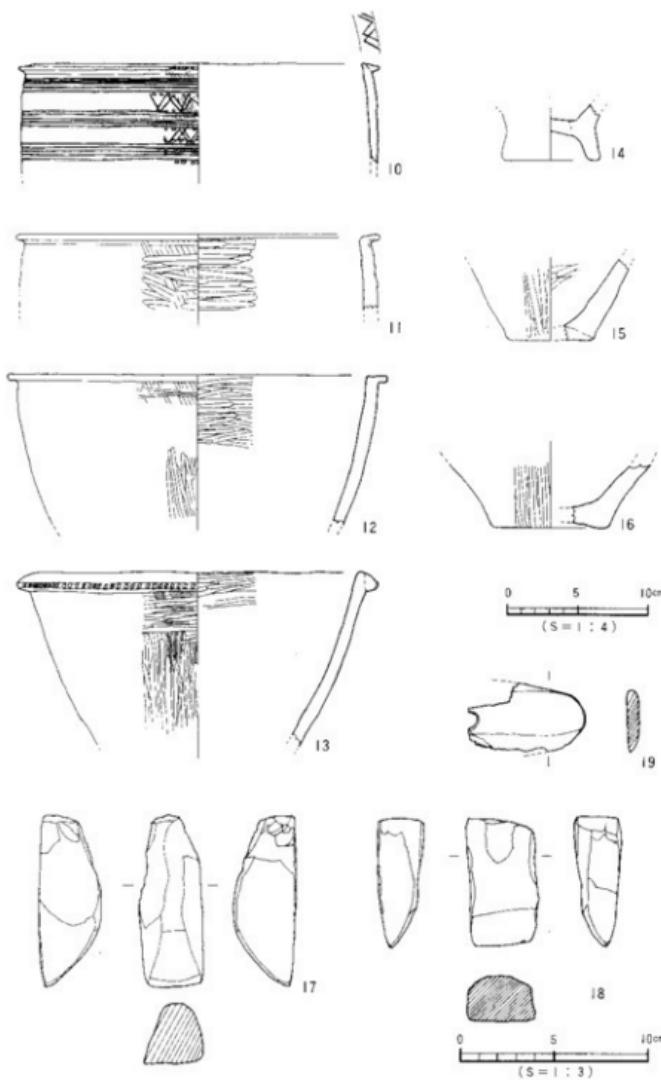
14~16は変形土器の底部である。14は上げ底で、外面に細かな刷毛目調整を施す。15は平底で、内外面ともにヘラ磨きを施す。16はやや上げ底の底部で、外面にヘラ磨きを施す。

他に、石斧2点、石庖丁1点が出土している。17は柱状片刃石斧、18は扁平片刃石斧である。两者とも入念に研磨され仕上げられている。19は結晶片岩製の石庖丁である。



第59図 第III層出土遺物実測図

祝谷本村遺跡



第60図 第IV層出土遺物実測図

4 小 結

今回の調査において弥生時代から中世までの遺構と遺物を確認することができた。弥生時代については、包含層からの弥生土器の出土がみられたことなどから、本調査区周辺及び、本調査区から上の丘陵上～中腹部に、同時代の集落が存在していたことをうかがわせるものである。事実、祝谷アイリ遺跡の調査において、弥生時代中期中葉～古墳時代の堅穴式住居址などの集落関連遺構が検出されている。これは、対面する祝谷六丁場遺跡などを含め、弥生時代中～後期を通じ、祝谷地区の丘陵を基盤として同時代の集落が存続していたものといえよう。

また、本調査出土の弥生土器については、道後城北地区を含め、松山平野における弥生時代中期初頭～中葉までの土器編年を考えるうえで、好資料となるものである。

ついで、古墳時代～古代の遺構と遺物が認められている。同時期の遺構は、祝谷アイリ遺跡にて、集落関連遺構が検出されているにとどまっているものの、本調査区近隣に存在する古墳時代集落に関連して、SK1などの遺構が存在するものと考えられる。引き続き、掘立柱建物址や土壙、溝などの検出は、こく近隣の地に中世の集落が存在するものと考えてよからう。

現在のところ、祝谷地区での古墳～中世の遺構の検出はあまり例をみていない。本調査の掘立柱建物址や溝などの遺構の検出は、古代～中世の祝谷地区における集落構造(経営)を考えるうえでは、好資料となるものであり、今後の基本的資料のひとつとなりうるものである。

加えて、今後は資料を収集し、祝谷地区の弥生時代～中世にいたる集落構造や動態を明らかにし、その変遷を考えいかなければならぬであろう。

【参考文献】

- 宮崎 泰好 1991 「祝谷六丁場遺跡」 松山市文化財調査報告書24
- 梅木 謙一 1992 「祝谷アイリ遺跡」 松山市文化財調査報告書25
- 宮木 一夫 1989 『鷹子・椿味遺跡の調査』 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 梅木 寛・山本英二 1989 『一般県道「菅沢-松山線」埋蔵文化財調査報告書I』
- 愛媛県史 資料編 考古
- 松山市 1989 『松山市史料集 第2巻 考古編II』
- 古代学協会四国支部 1988 『松山道後城北の弥生遺跡をめぐって』 シンポジウム資料

祝谷本村遺跡

構造・遺物一覧 (構造一覧: 宮内慎一、遺物観察表: 梅木謙一・水口あをい)

- (1) 以下の表は、本調査検出の構造・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 構造の一覧表中の出土遺物欄の略号について。
例) 繩文→繩文土器、弥生→弥生土器、土師→土師器、須恵→須恵器。
- (3) 遺物観察表の各記載について。

法量欄	() : 復元推定値
形態・施文欄	上器の各部位名称を略記。例) 口→口縁部、胴中→胴部中位、柱→柱部、裾部、胴底→胴部~底部。
胎土・焼成欄	胎土欄では混和剤を略記した。例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。()中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。例) 砂・長 (1 ~ 4) 多→「1 ~ 4 mmの大砂粒・長石を多く含む」である。
	焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表8 振立柱建物址一覧

振立	規模 (間)	方位	桁 行				床面積 (m ²)	時 期	備 考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1	1×2	東面	370(12.7)	6.0・6.7	220(7.3)	7.3	8.14	中 江	
2	1×2	東面	360(10.0)	5.7・4.3	170(5.7)	5.7	5.10	中 江	

表9 土塁一覧

土塁 (SK)	地区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	C 3	楕円形	複合形	1.25×0.90×0.18	褐色土	骨生・須恵	SD 1に切られる。	古墳時代
2	Bd-C1	隅丸形	逆台形	1.60×1.50×0.35	褐色土	I期・須恵	SK 3を切る。	中 世
3	C 3	隅丸形	舟形	1.60×1.00×0.40	褐色土	I期	SK 2に切られる。	中 世

表10 溝一覧

溝 (SD)	地 区	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
I	A 1 ~ A 3	U字状	7.00×0.20×0.07	褐色土	I. 領	SK 1を切る。	中 世

遺物観察表

●表11 包含層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(色)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	羽釜	口径(17.6)	断面方形状の内若が、口縁部に丸みされ、腹部は内凹気味に下がる	①-ナデ ②-ココナデ	①-ナデ (出目付:6.0) ②-ココナデ	黄褐色	石・灰(1~3) ○	582 詳	30
2	坪壠	縦径(12.6)	大井型は丸味をもつて、口縁部はやや内凹気味に下がる。端縁の棱にはよい。	①-四輪ヘラ割り ②-四輪ナダ	①-四輪ナダ ②-四輪ナダ	灰 色	青 ○	田曇	
3	壺	底径 1.6	中央部が突出するつまみ。	ナデ	ナデ	灰白色	青 ○	田曇	30
4	坪舟	高さ径(5.2)	ハの字に閉く高台の付く 底、高台は、ほぼ平底面 で構成する。	①-四輪ナダ ②-四輪ナダ	①-ナデ	灰白色	青 ○	田曇	
5	坪舟	受部径(15.0)	たちあがりは内傾した後、 直立する。受部はほぼ水平 面上にのみ暗部がある。	①-四輪ナダ ②-四輪ナダ	四輪ナダ	青灰色	青 ○	田曇	30
6	坪舟	受部径(14.0)	たちあがりは内傾し、受 部はやや外方にのび、 端部は丸い。	①-四輪ナダ ②-四輪ナダ	四輪ナダ	青灰色	青 ○	田曇	30
7	皿	底径(11.1)	上縁基部。器底は薄く、 底面から口縁部への屈曲 は純粋。	①-ヨコナデ ②-四輪条切り	ココナデ	青褐色	青 ○	田曇	30
8	皿	底径 (9.2)	上縁基部。内面には、底 部と口縁部を分ける筋が みられる。	①-ヨコナデ ②-四輪条切り	ヨコナデ	青灰色	青 ○	田曇	
9	皿	底径 (5.8)	器高の高い上縁基部。	①-ヨコナデ ②-四輪条切り	ヨコナデ	青灰色	青 ○	田曇	30
10	甕	口径(23.2)	断面三角形の貼付口縁。 底面はやや張り、口縁端 部は丸くさめる。	①-ナデ ②-ハケ(8本/1cm)→ ヨカヘラミガキ	①-ナデ ②-ヨカヘラミガキ	青灰色 黄褐色	石・灰(1~4) ○	田曇	31
11	甕	口径(22.7)	追し土被口縁を有する甕。 側部はやや張り、口縁端 部は丸くさめる。	①-ナデ ②-ハケ(7本/1cm)	①-ナデ (追)一端滅のため不明	青褐色	石・灰(1~3) ○黒ウンモ	田曇	31
12	甕	口径(26.4)	丸L字形口縁。底部は張 りがあり、内凹気味に下 がる。口縁端部は丸い。	①-ナデ ②-タテハケ(10本/1cm)→ ヨカヘラミガキ ③-タテヘラミガキ	①-ナデ ②-ヨカヘラミガキ ③-ヨコナデ	黄褐色	石・灰(1~3) ○	田曇 田曇	31
13	甕	口径(25.4)	断面U角形の貼付口縁。 底部は膨らむ。直線的に 下がる。口縁端に削ぎた めある。	①-ナデ ②-タテハケ(10本/1cm)→ ヨカヘラミガキ ③-ヨコナデ	①-ナデ ②-ヨカヘラミガキ ③-ヨコナデ	黄褐色	青 ○	田曇 無題	32
14	甕	底径 6.6	くびれの上げ底を有する 瓶の底盤。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色	石・灰(1~3) ○	田曇	
15	甕	底径 (5.8)	平底の底盤から、斜め上 方に直線的にたちあがる。	①-ナデ ②-タテヘラミガキ ③-ナデ	①-ヨコナデ ②-ヨカヘラミガキ ③-ナデ	黄褐色	石・灰(1~3) ○	田曇	31
16	甕	底径 (7.9)	やや上に底盤を呈する底盤 外反気味にたらあがる。	①-ナデ ②-ナデ	①-ナデ (追)一端滅のため不明 ②-ナデ	黄褐色	石・灰(1~3) ○	田曇	31

祝谷本村遺跡

表12 包含層出土遺物觀察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
17	柱狀片 刃石斧	完形	蛇紋岩	9.1	3.2	3.2	147.8	N番	32
18	種平片 刃石斧	完形	結晶片岩	6.8	3.6	2.5	101.1	M番	32
19	磨製 石盤丁	少	結晶片岩	5.7	3.2	0.6	21.6	N番	32

第VII章 調査の成果と課題

本書では、昭和58年～平成3年の間に、松山市道後城北地区内で発掘調査した5遺跡について、調査報告を行った。調査の結果、縄文時代～古代の遺物と集落関連構造を確認するに至った。

縄文時代

道後桶又遺跡2次調査地より、後～晩期の上器小片が出土した。道後城北地区では、これまでに南接する文京遺跡(8・9・11次)【愛媛大学他 1990】より、当該期の土器が出土している。さらに、これ等の縄文上器は、道後城北地区の平野部に堆積する黄(褐)色シルト層中に包含されることが確認されており、今回の資料は黄色シルト層が縄文後～晩期の生活面及び文化層であることを立証する追認資料となるものである。

また、黄色シルト下の疊層及び黄色シルトを切る旧河川は、文京遺跡内でも検出されており、黄色シルト層堆積前及び縄文時代晩期前後の旧地形復元の一つの資料となるものである。

弥生時代

前期 文京遺跡4次調査地では、円形の竪穴式住居址が検出された。松山平野の弥生前期前半の住居址は、現時点においても未確認であり、貴重な資料である。住居址は、円形プランで2本の主柱穴と中央にピット(炉か)を有する点で注目される。

遺物では、道後今市遺跡8次調査で検出した旧河川より、大型赤の胴下半部以上の大型破片が出土している。当該地での出土例は少なく、器形が知れる資料として貴重なものである。文京遺跡4次調査地、道後今市遺跡8次調査地からは、小片であるが、縄文晩期(凸帯文土器)の系譜をひくと考えられる深鉢(甕)片が少量出土しており、前期前半の土器相を示唆するものとして注意しなければならないだろう(註1)。

中～後期 文京遺跡4次調査中に隣接地で偶然発見された一群の土器は、後期初頭の資料として重要なものといえる。特に、小型の分銅形土製品が土器と共に出土していることで注目される。

道後今市6次調査地は、平形銅劍出土地(道後今市)として、いぜんより多くの研究者に知られるところである【和田千吉 1909】。今回の調査では、直接的に平形銅劍に関する資料は得られなかったものの、中期後葉～後期初頭及び古墳時代の包含層を確認したことは、周辺地の今後の調査と後期後半の集落構造研究の一資料となるものであり、重要な調査であるといえよう。

古墳時代

道後今市遺跡6次調査で、中期（5世紀時代）の竪穴式住居址を検出した。依存状況に恵まれなかつたが、一括性の高い土器を出土したことは、古墳時代土師器の様相が不詳明な松山平野においては重要な資料といえる。くわえて、住居址の壁体構に直径10cm内外の小ピットを検出したことは、同時期の平野内住居址でも散見され、住居構造研究の一つの資料となるものである（第III章）。

古代

道後城北地区での当該期の資料確認例は少なく、小片少量であるが、祝谷本村遺跡出土品は、希少資料として注意したい。道後城北地区の古代集落の様相は不明であり、今後の調査と既存資料の再検討を期待するものである。

以上、簡単に本刊報告の5調査についてのまとめを行った。報告の調査地は、いずれも、道後城北地区が充実した弥生時代中期後半の集落地の周縁部にあたる。かつ、小集落地（道後城北地区は城北・道後・祝谷に小区分される）の境界付近であるものもあり、弥生中期後半の構築物検出が少なかったことは、当該期の集落構造解明の手がかりとなるものであろう。

各調査地は、いずれも1,000m²に満たない狭い範囲での調査である。調査の対象となった道後城北地区は、弥生時代、中世、近世において松山平野の要地であった地域である。小規模な調査であるが、従統的な調査は将来における各時期の集落構造解明にとっては、欠くことのできない資料となるものであろう。本報告中の文京遺跡4次調査の弥生時代前期前半の竪穴式住居址は、発見以来約10年が過ぎている。現在においても、平野内では同時期間形態の住居址の確認事例はない。重要な遺跡地での調査の必要性を強く感じさせるものである。

（註）

1. 近年、平野内で弥生前期の資料が数例確認された。

朝美瀬（アサミオ）遺跡2次調査…………「朝美瀬道路・辻町道路」1992 財團法人松山市生涯学習振興
財團埋蔵文化財センター

山越（ヤマガエ）遺跡2次調査…………「山越遺跡2次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報』1991

久米高畠（クメカバタケ）遺跡9次調査…………「久米高畠遺跡9次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報』

1991

【参考文献】

愛媛大学法文学部考古学研究室、愛媛大学埋蔵文化財調査室

1990 「文京遺跡第8・9・11次調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告II

和田 千吉 1909 「考古界」第8篇第5号

写真図版

図版例言

1. 遺構の撮影は、各調査担当者及び大西朋子が行った。

使用機材：

カメラ アサヒペンタックス67
ニコンニューFM2 他
レンズ ペンタックス67 75mmF4.5 他
ズームニッコール28~85mm 他
フィルム ネオパンSS

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ/ビューア-45G
レンズ ジンマーS240mmF5.6 他
ストロボ コメット/CΔ-32 2灯・CB2400 2灯(バンク使用)
スタンド他 トヨ/無影撮影台・ウェイトスタンド101
フィルム 白 黒 ブラスXパン4×5
カラー エクタクロームEPP4×5

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

(白黒に限る。)

使用機材：

引伸機 ラッキー-450MD
ラッキー-90MS
レンズ エル・ニッコール135mmF5.6A
エル・ニッコール50mmF2.8N
印画紙 イルフォードマルチグレードIII RC

【参考文献】『埋文写真研究』 Vol. 1 1990, Vol. 2 1991

〔大西 朋子〕



1 B区 調査前全景（東北より）



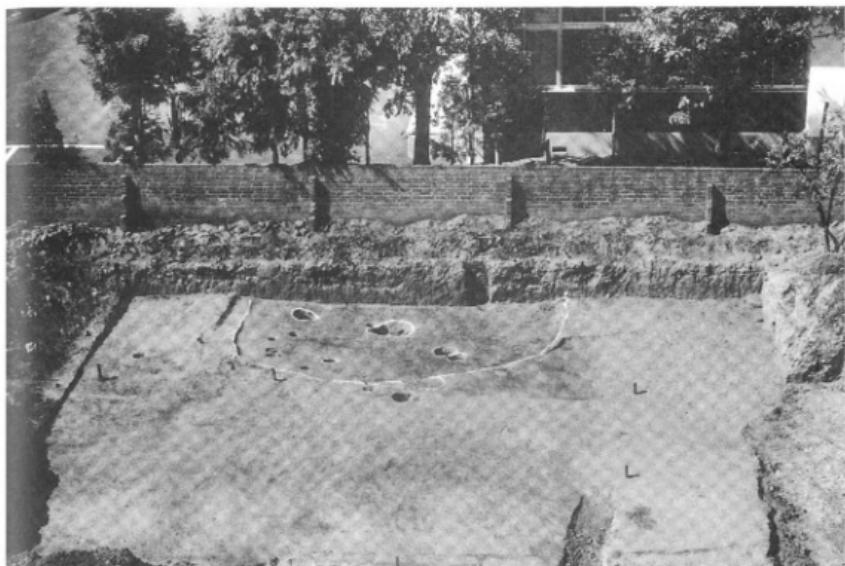
2 B区 トレンチ掘削状況



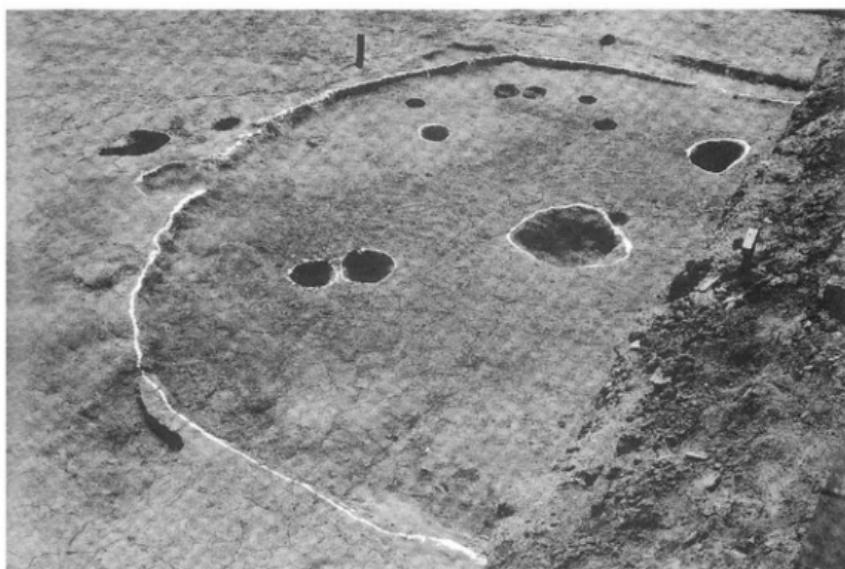
1 A-1区 調査前全景（南西より）



2 A-1区 調査状況



1 壴穴住居 SB-1 (南より)

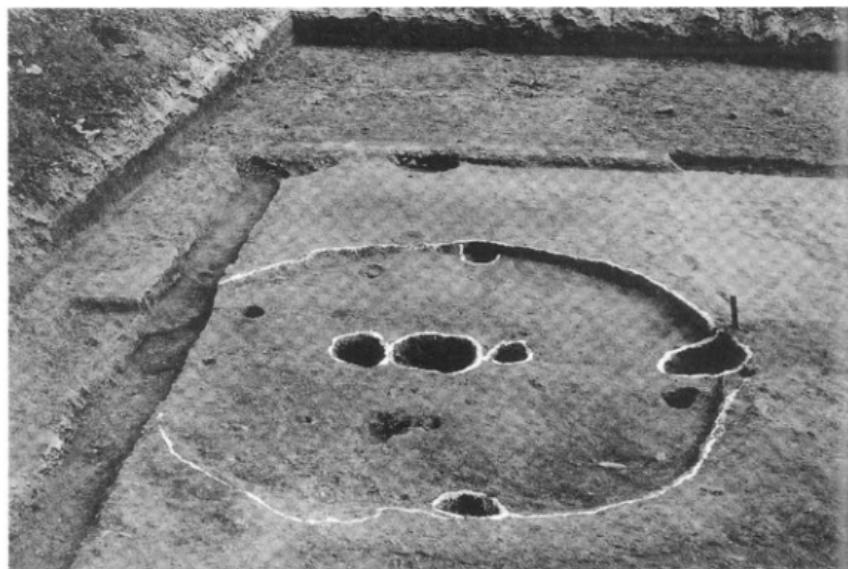


2 SB-1 (東北より)

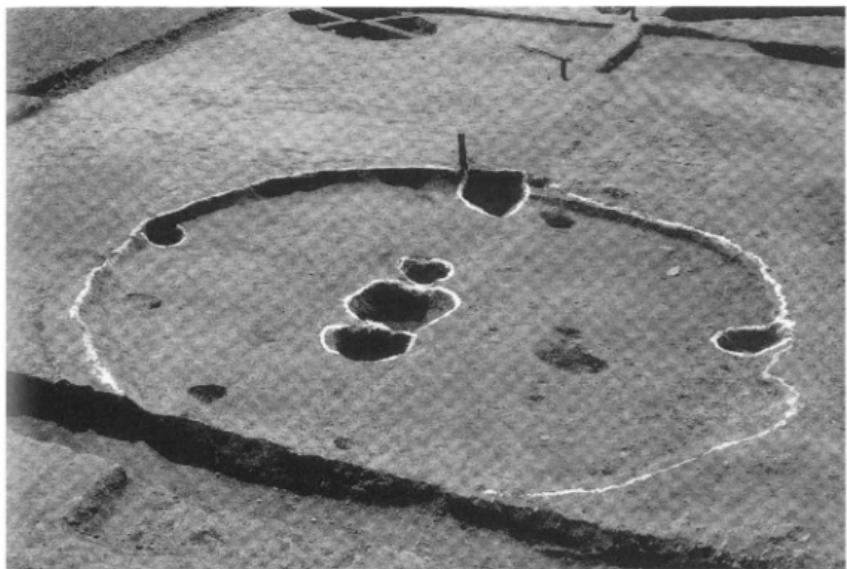
図版
四



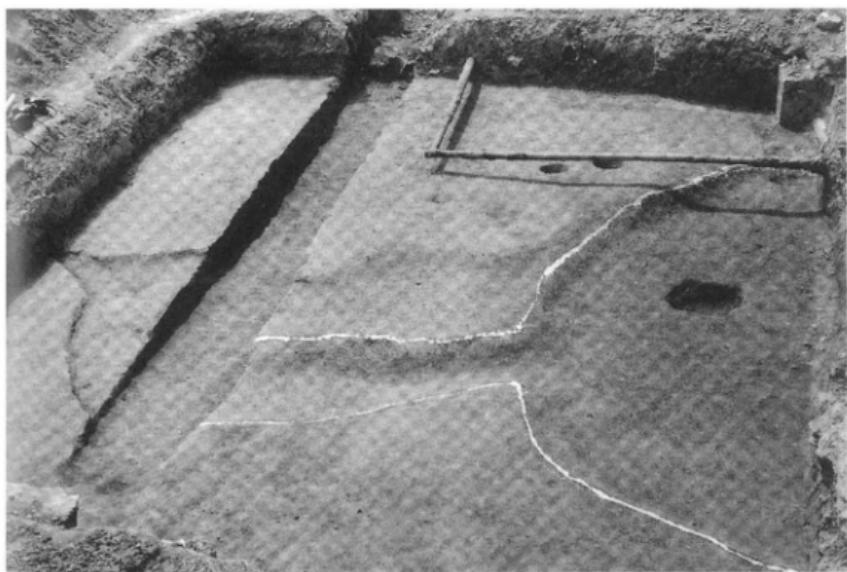
1 A-1区 東半部調査状況（南西より）



2 積穴住居 SB-2 (北より)



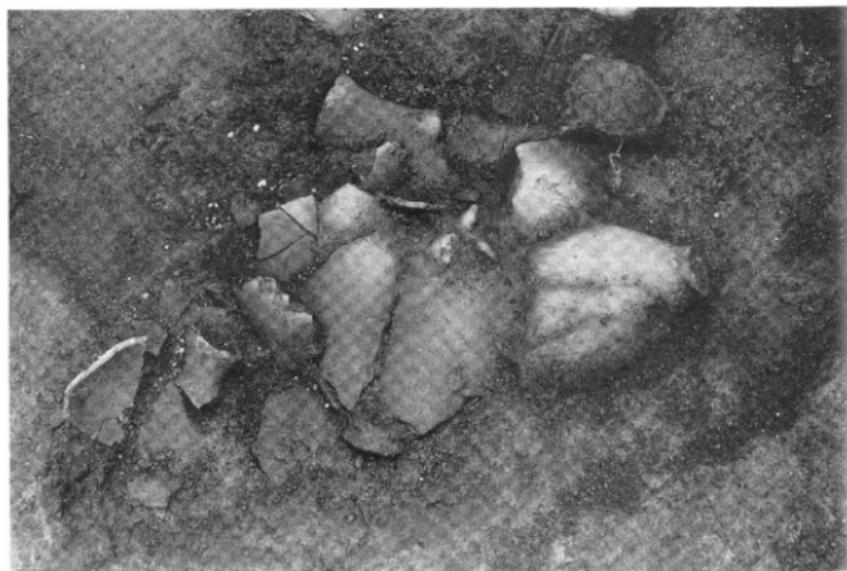
1 SB-2 (東北より)



2 積穴住居 SB-3 (東より)



1 運動場東端検出土墳



2 土壇内遺物出土状況



1 SB-1・SB-2 出土遺物 (1~6: SB-1, 30~33: SB-2)



13



14



17



19

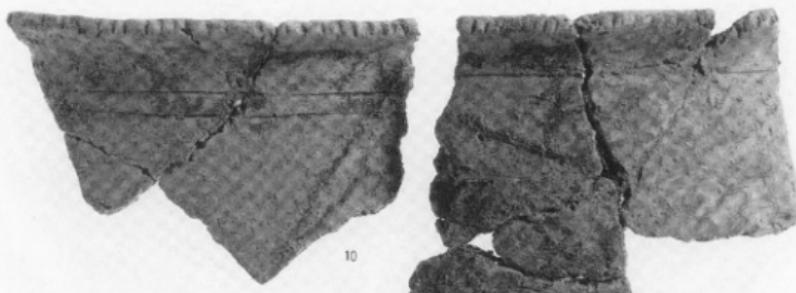


29



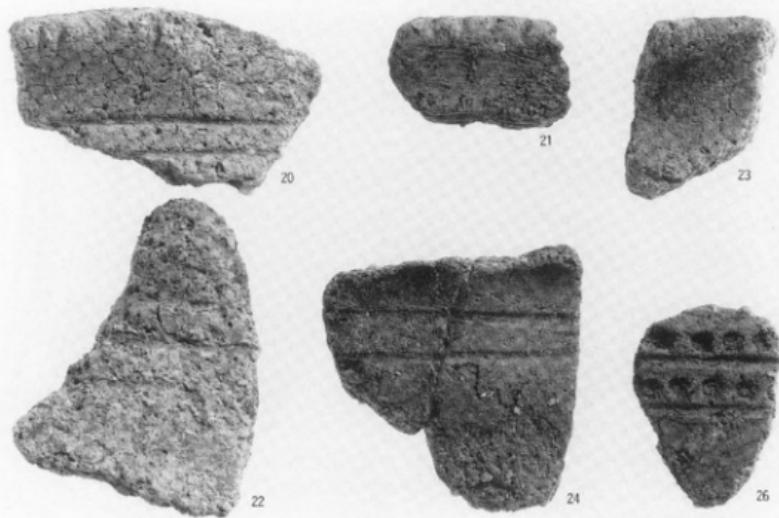
18

1 SB-2 出土遺物 ①



10

8



20

21

23

22

24

26

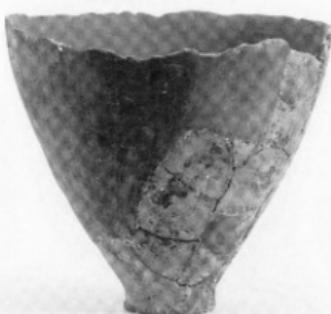
1 SB-2 出土遺物 ②



1 B区出土縄文式土器



37



42



38



43



47

1 土壌出土遺物 ①



52



54



55

1 土壙出土遺物 ②



1 遺構検出状況 ① (南より)



2 遺構検出状況 ② (南西より)

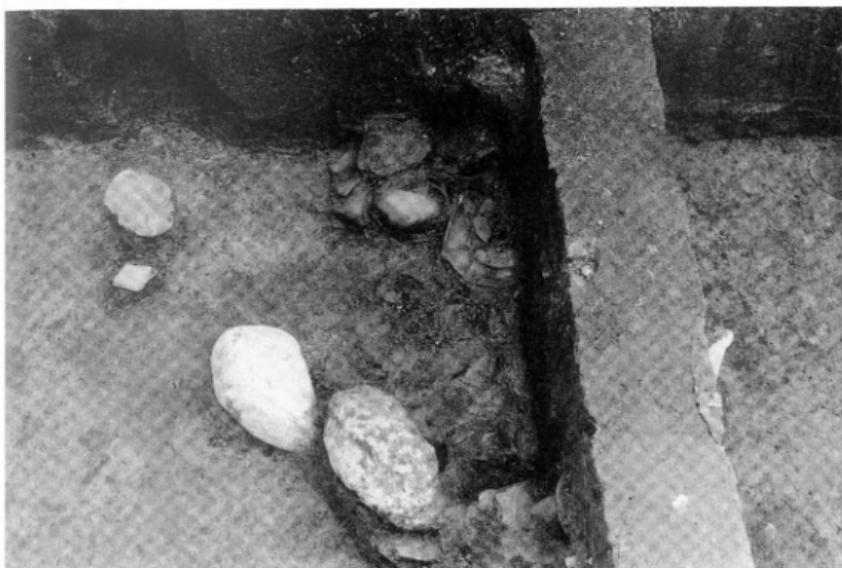


1 遺構検出状況 ③（南より）

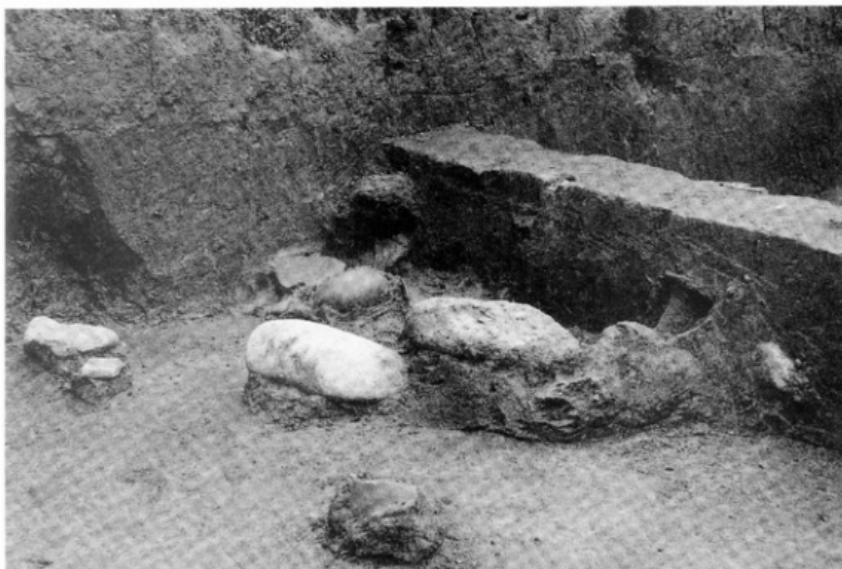


2 SB1 検出状況（西より）

道後今市遺跡 6次調査

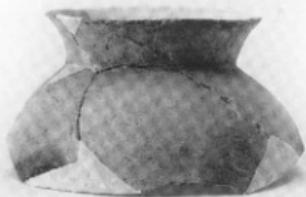


1 SB1 炉検出状況 ①（西より）



2 SB1 炉検出状況 ②（北西より）

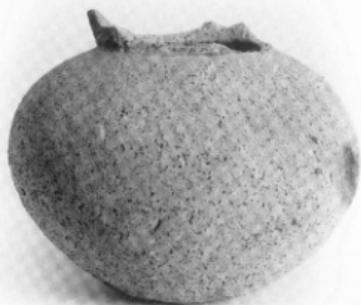
圖版一六



2



5



6



11



15



16

1 SB1 出土遺物 ①



18



19

1 SB1 出土遺物 ②



21



22

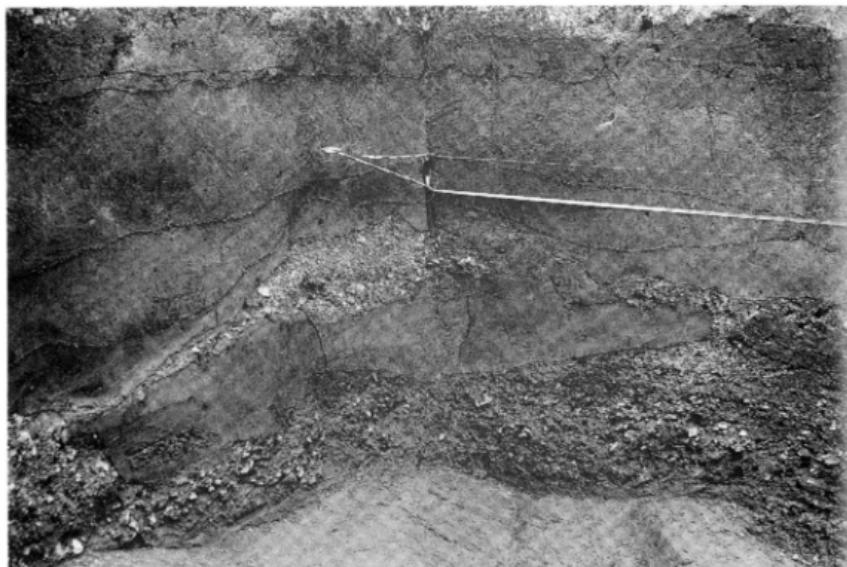


25

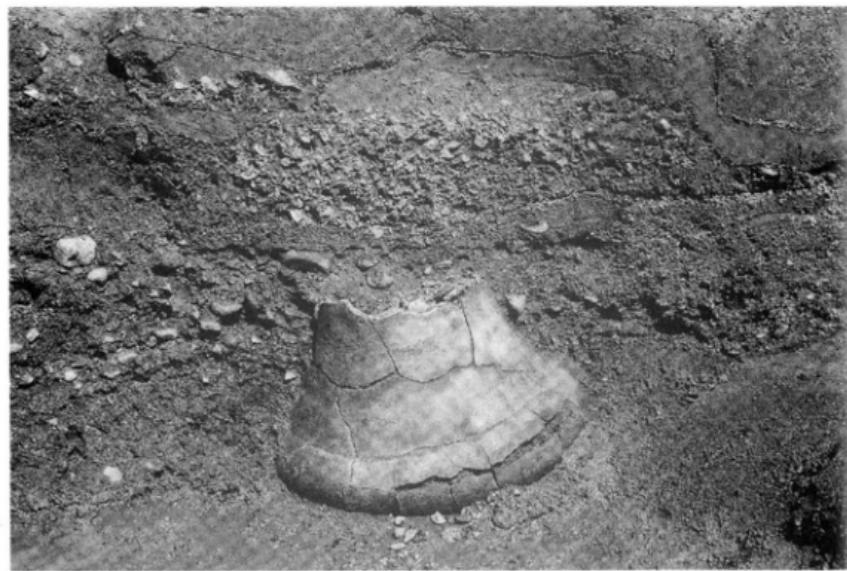


28

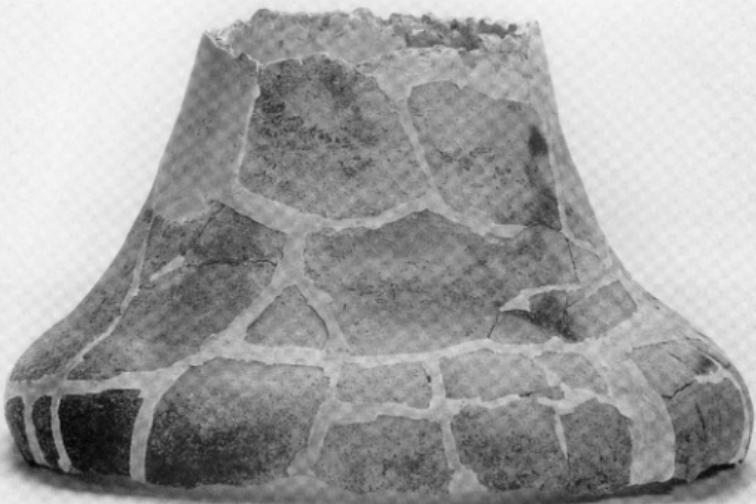
2 包含層出土遺物



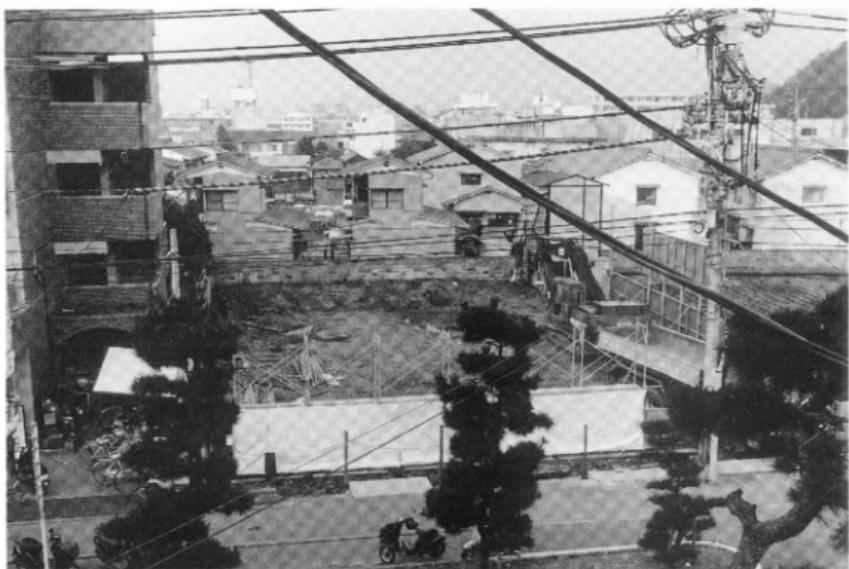
1 南西隅土層（北東より）



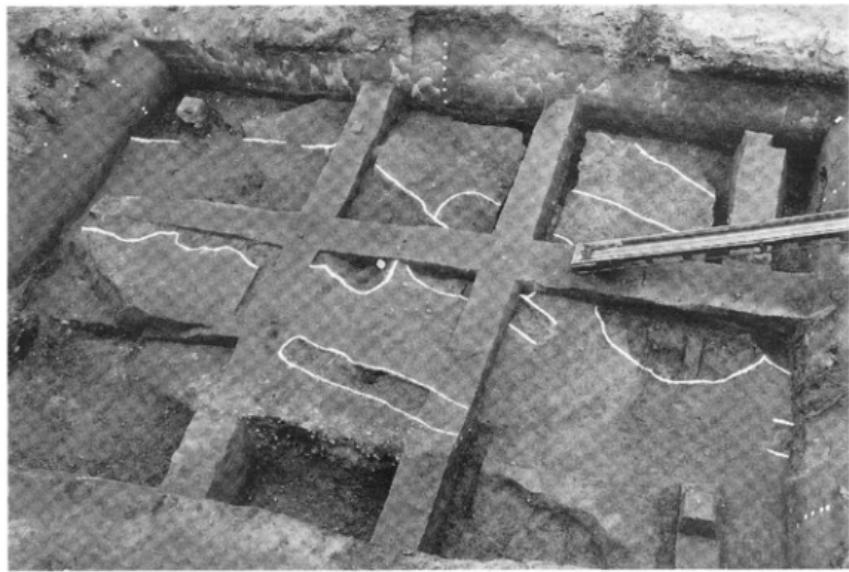
2 遺物出土状況（南より）



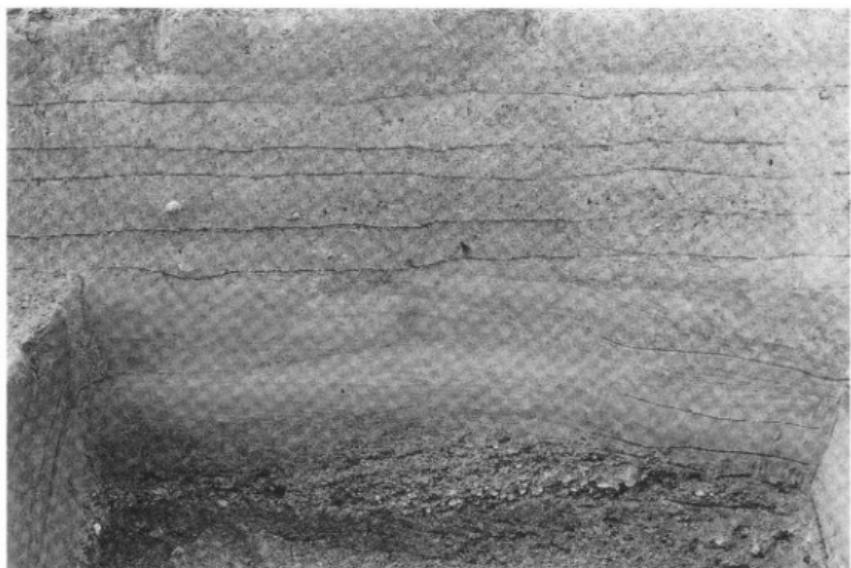
1 SR1 出土遺物



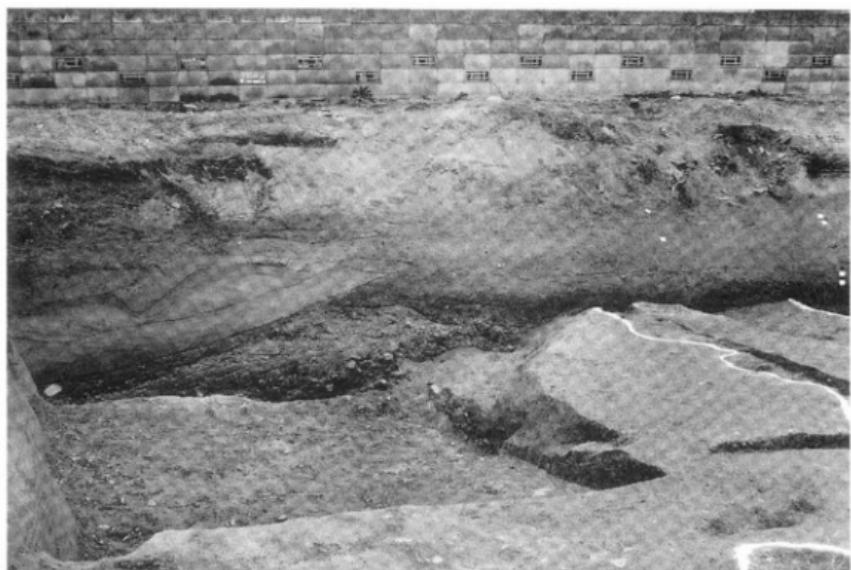
1 調査前全景（東より）



2 造構検出状況（南より）



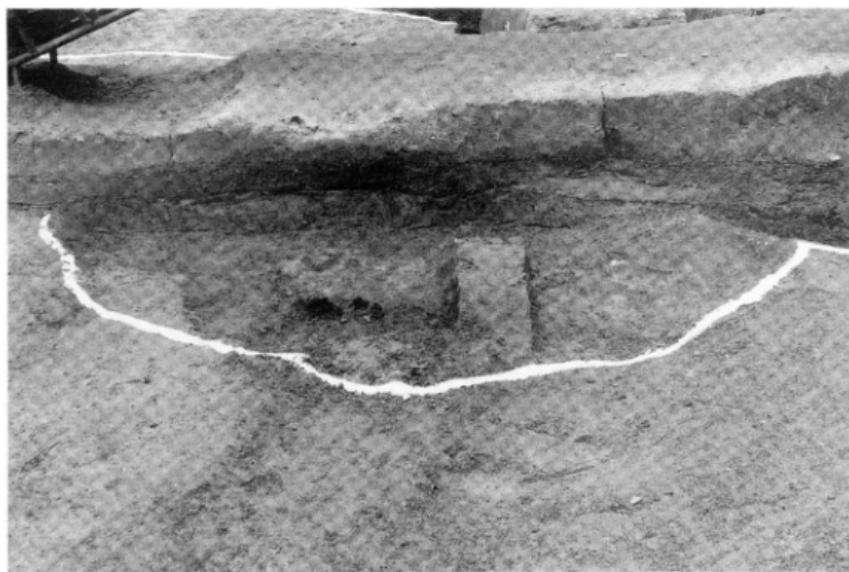
1 南壁土層（北より）



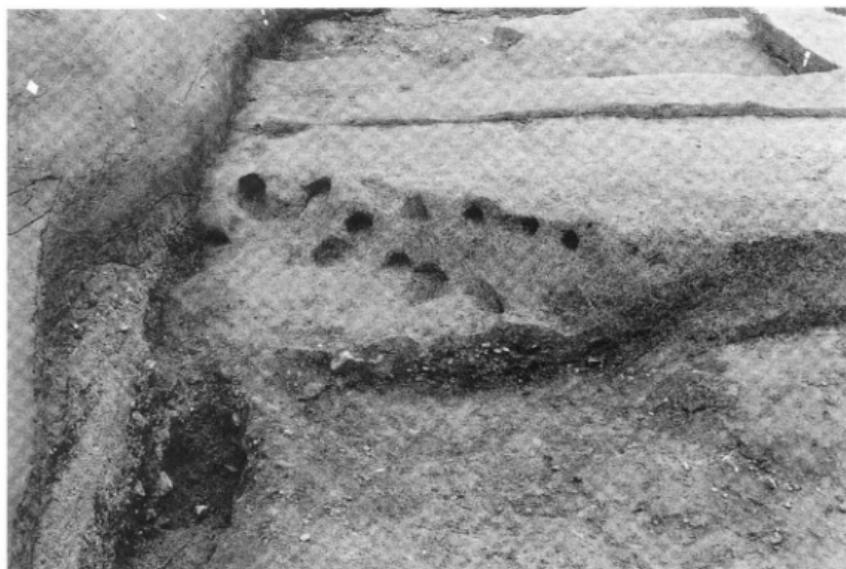
2 西壁土層（東より）



1 灰色砂礫検出状況（北西より）



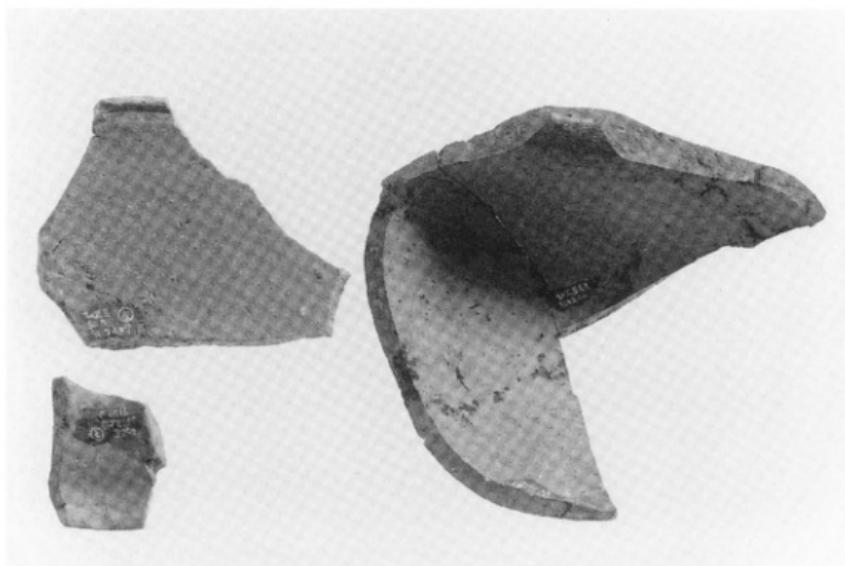
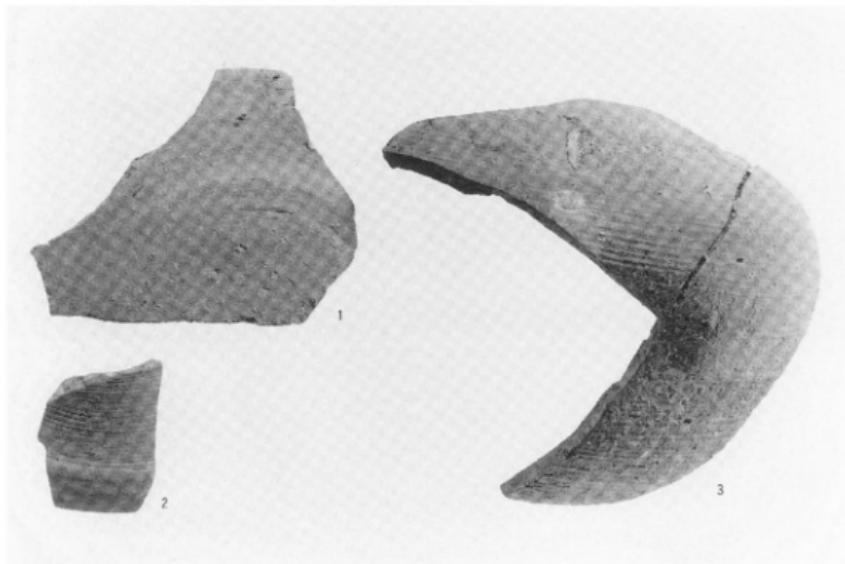
2 SK4（南より）



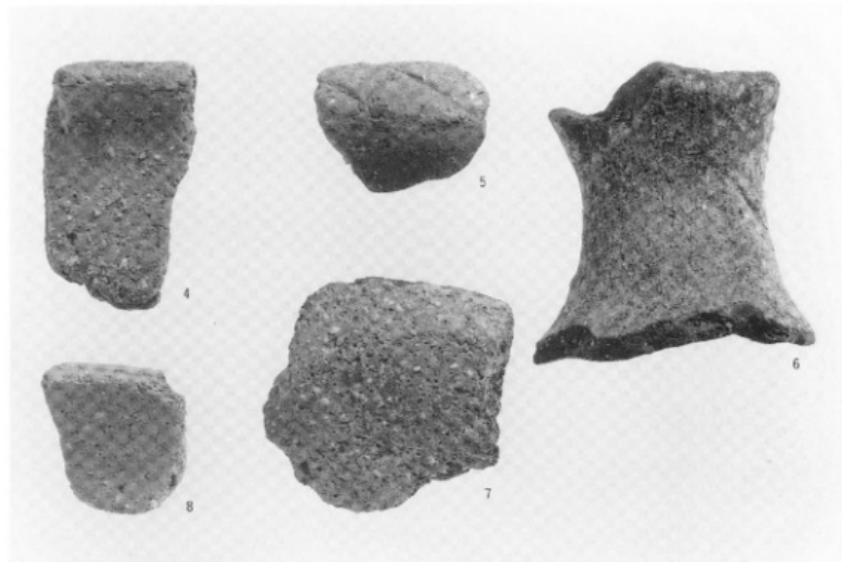
1 SD4 (南より)



2 遺物出土状況 (東より)

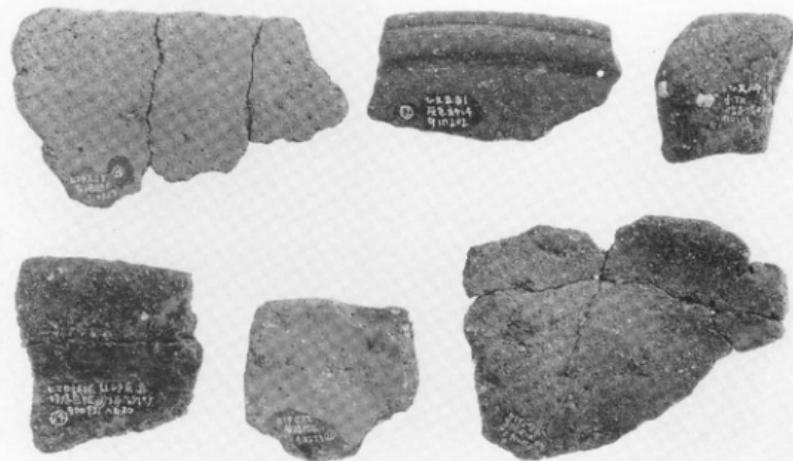
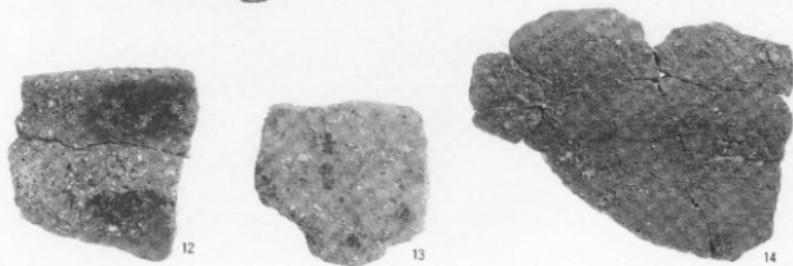
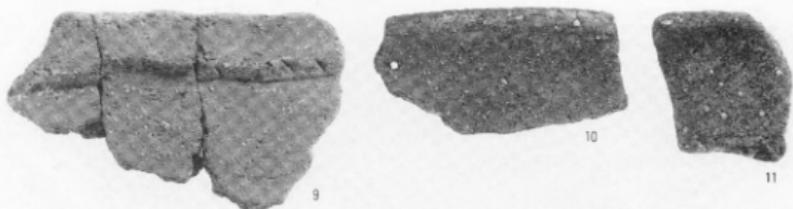


1 SR2 出土遺物〔上〕：外面，〔下〕：内面

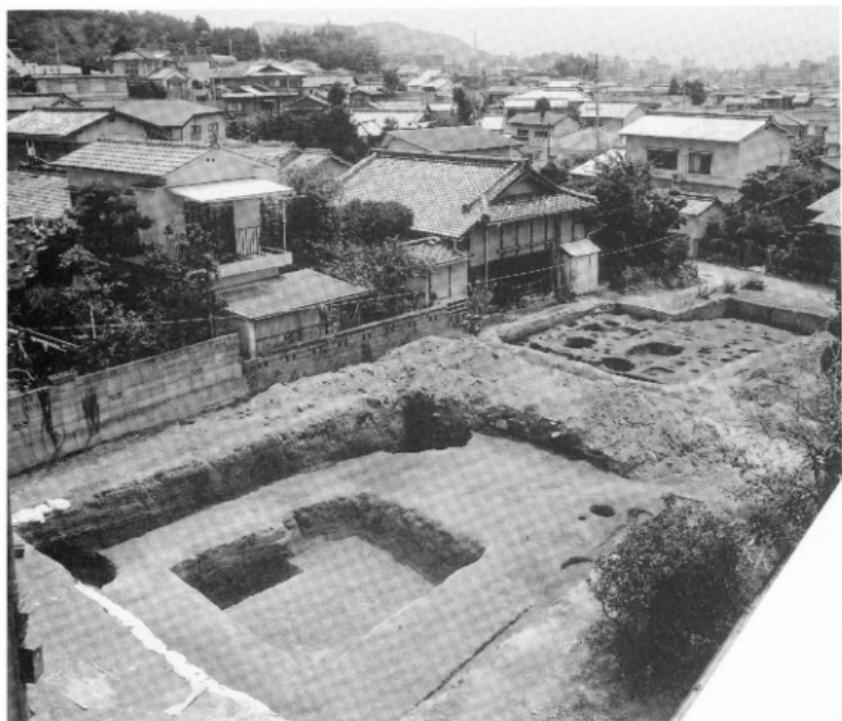


1 SR4 出土遺物(4-7) SK2 出土遺物(8) [上]：外面，[下]：内面

図版二六



1 SD4 出土遺物(9~11) SR5 出土遺物(12) 第VII層出土遺物(13・14) [上] : 外面, [下] : 内面



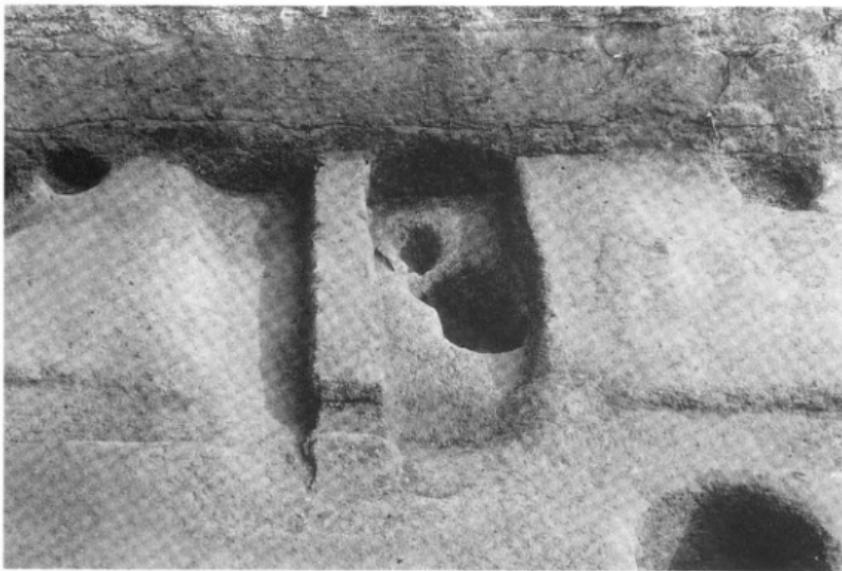
1 調査区全景（北より）



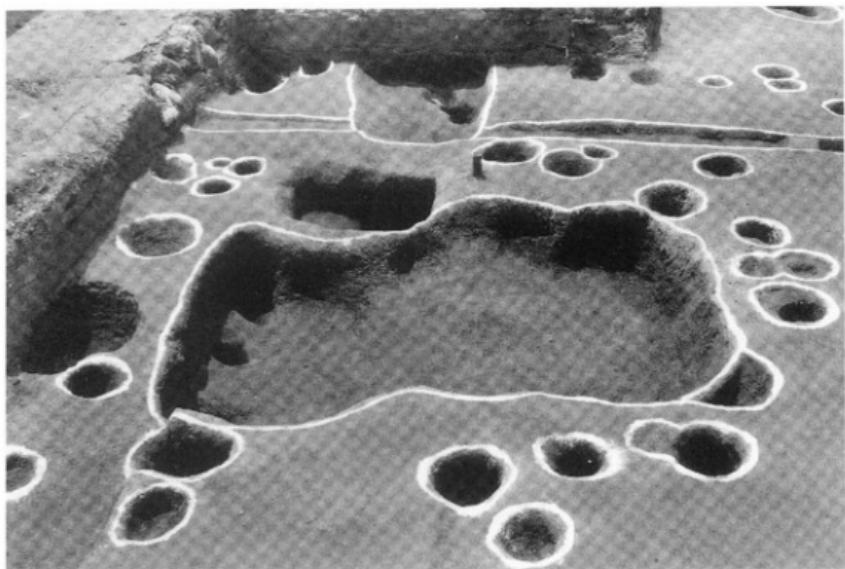
2 A区 遺構検出状況（北西より）



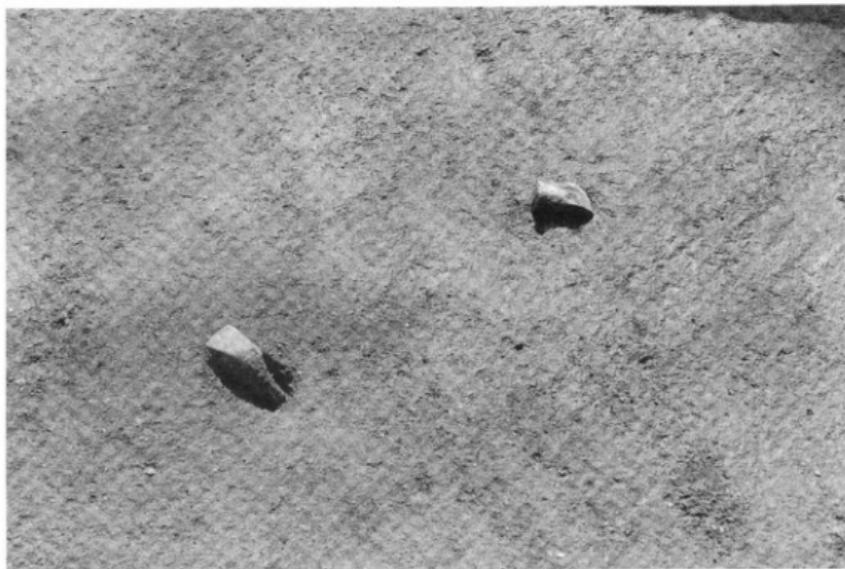
1 南壁土層（北より）



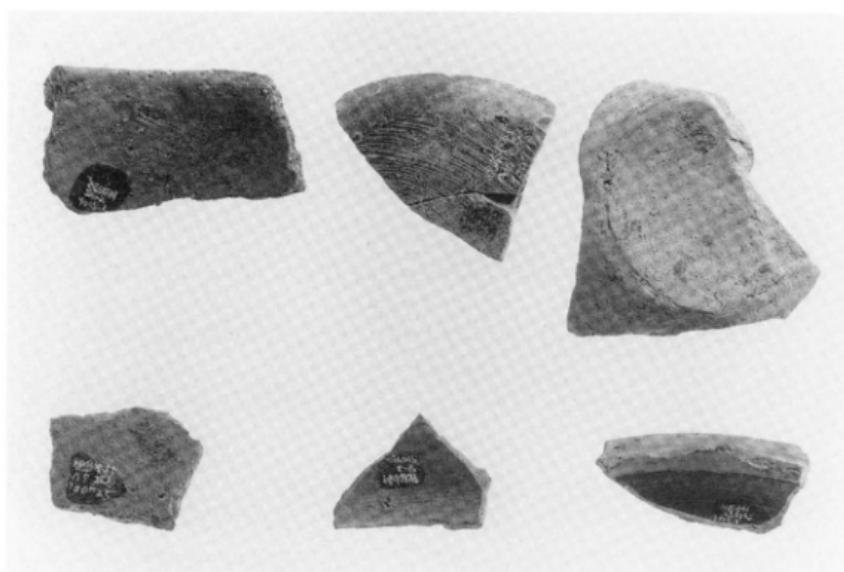
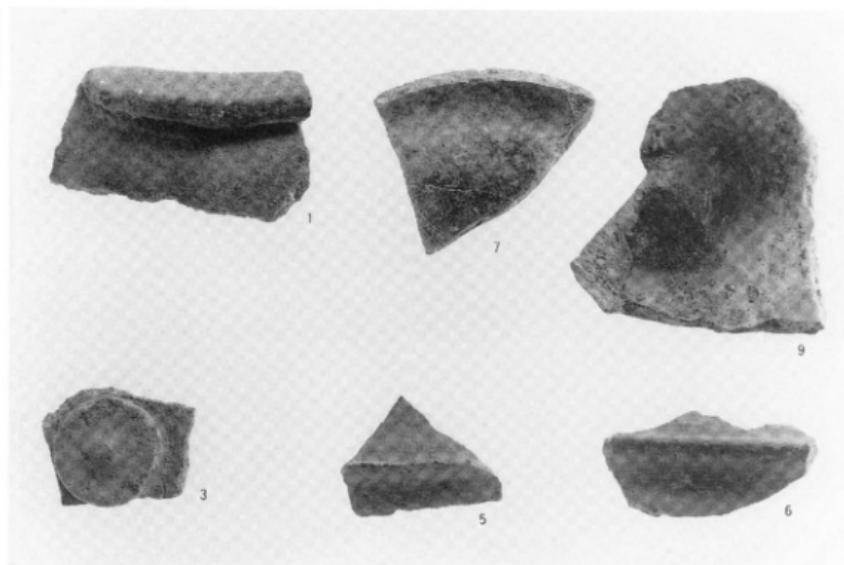
2 SK1（北より）



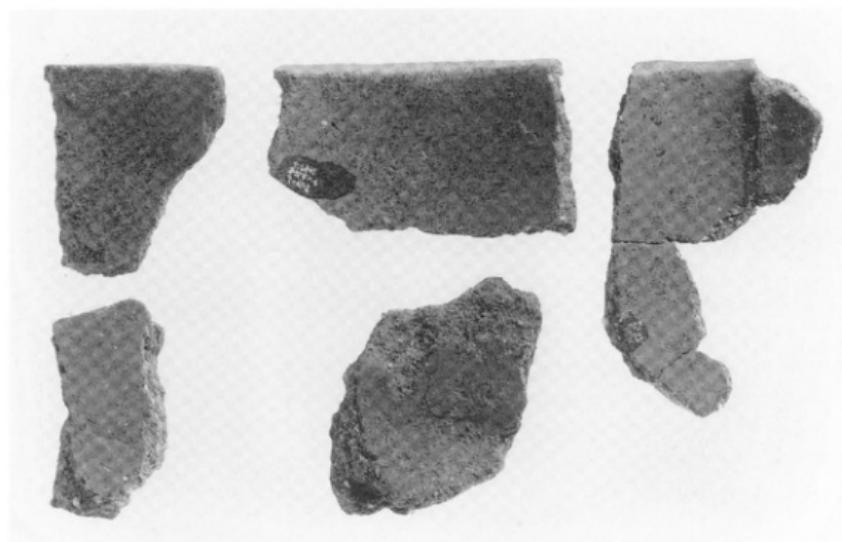
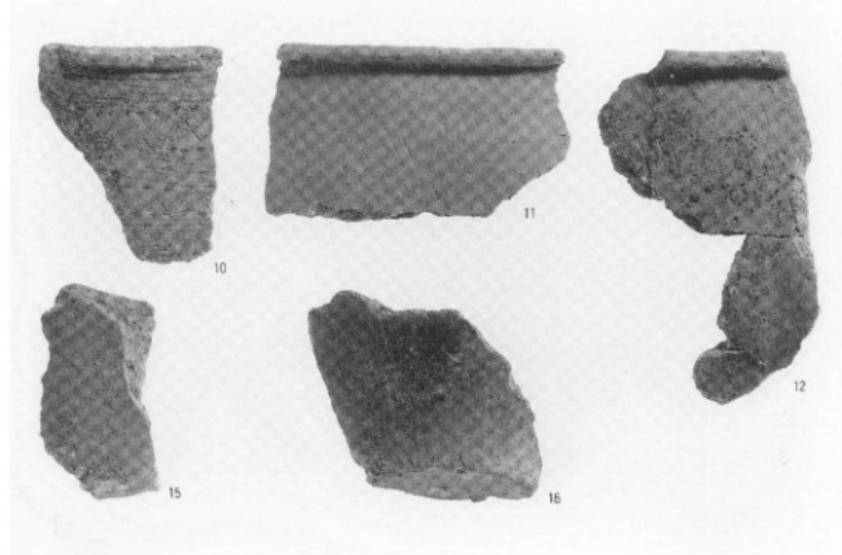
1 SK2・SK3 (北より)



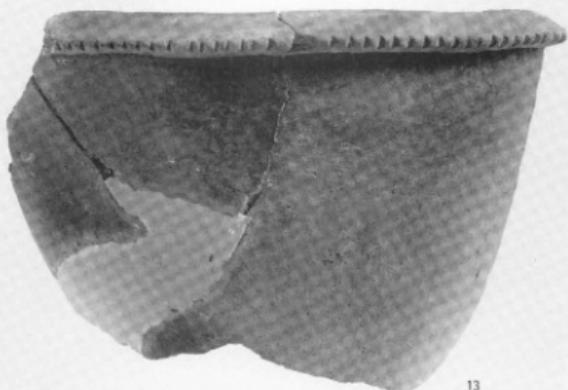
2 遺物出土状況 (南より)



1 SK2 出土遺物 (1) 第III層出土遺物 (3・5・6・7・9) [上]：外面，[下]：内面



1 第IV層出土遺物 ① [上]：外面，[下]：内面



13



19



17



18

1 第IV層出土遺物 ②

松山市文化財調査報告書 第30集

道後城北遺跡群

平成4年8月31日 発行

編集 財團法人 松山市生涯學習振興財團

発行 埋蔵文化財センター

〒791 松山市南斎院町乙67番地 6

TEL (0899) 23-6363

印刷原印刷株式会社

〒791 松山市山越4丁目8-15

TEL (0899) 24-8823
